しりきしない
尻岸内町

なか　はま
中浜E遺跡

——尻岸内町中浜E遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書——

昭和59年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

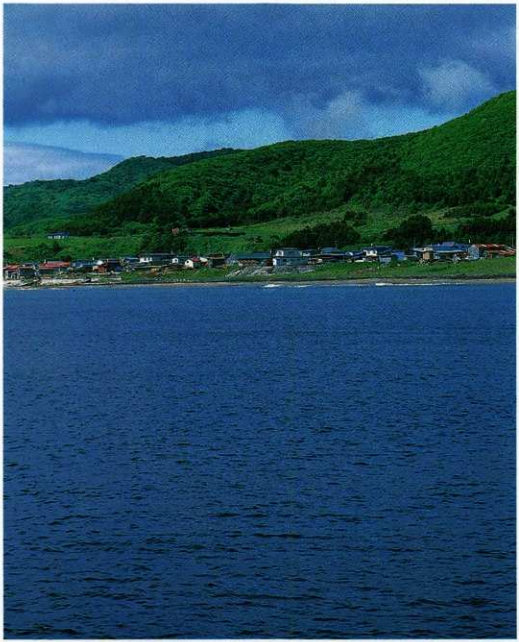
しりきしない
尻岸内町

中浜（なかはま）E遺跡

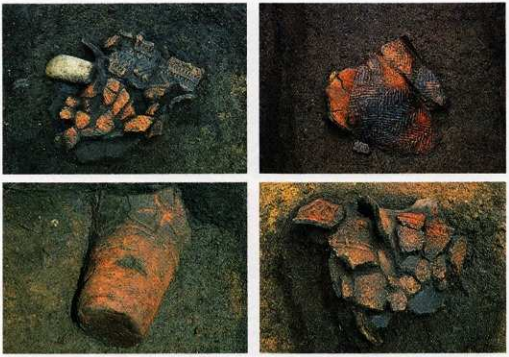
——尻岸内町中浜E遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書——

昭和59年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター



海から見た中浜E遺跡（中央部段丘上が調査地区）



(1) 住居跡H－1遺物出土状態

(2) 住居跡H－1出土遺物

例　　言

1．本書は，一般国道278号恵山1工区道路改良工事のうち豊浦バイパス工事にともなう尻岸内町中浜E遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は，北海道教育委員会の指示により，北海道開発局函館開発建設部の委託を受けて，財団法人北海道埋蔵文化財センターが実施した。

3．調査の期間は現地発掘期間が昭和59年5月7日から7月14日，室内整理期間が昭和59年11月5日から昭和60年3月30日である。

4．調査にあたっては，尻岸内町教育委員会の協力を得た。

また，次の諸機関及び人々の指導・助言を得た。（順不同・敬称略）

尻岸内町郷土博物館，市立函館博物館，北海道開拓記念館，八戸市立博物館，知内町郷土資料館，北海道大学理学部環境基礎学研究室

浜田昌幸，小笠原忠久，矢野牧夫，赤松守雄，増川栄一，高橋豊彦

5．本書の作成は，調査を担当した財団法人北海道埋蔵文化財センター調査部調査第四班の鬼柳彰，田口尚，中村千春が行なった。

文責者は次のとおりである。

鬼柳彰　Ⅰ章，Ⅱ章1・3・5。田口尚　Ⅱ章2・4，Ⅳ章，Ⅴ章2。中村千春　Ⅲ章，Ⅴ章1。

6．花粉分析については，北海道開拓記念館山田悟郎氏に依頼した。

7．火山灰の鉱物組成の分析は，調査第二班花岡正光が担当した。

目　　次

例　言
I　調査の概要
1．調査要項…… 1
2．調査体制…… 1
3．調査の経緯…… 3
II　遺跡の概要
1．位置と環境…… 4
2．発掘区の設定…… 5
3．基本層序…… 6
4．遺物の分類…… 11
(1)　土器…… 11
(2)　石器…… 12
5．調査結果の要旨…… 16
III　遺構とその遺物
1．住居跡…… 18
2．土壙…… 32
3．Tピット…… 35
4．焼土…… 36
IV　包含層出土の遺物
1．土器…… 45
2．石器…… 59
V　まとめ
1．遺構…… 98
2．遺物…… 99
中浜E遺跡の古植生について……107
完新世の火山灰について……112

挿 図 目 次

図Ⅰ－1　中浜E遺跡の位置と周辺の遺跡……2
2　遺跡周辺の地形図……3
図Ⅱ－1　発掘区設定図……5
2　遺跡土層断面図……7
3　Ⅳ層上面地形図……9
4　Ⅴ層上面地形図……10
5　遺構位置図……16
図Ⅲ－1　H－1実測図……19
2　H－1遺物出土状況図……20
3　H－1出土の遺物……21
4　H－1出土の遺物……22
5　H－1出土の遺物……23
6　H－1出土の遺物……24
7　H－1出土の遺物……25
8　H－2実測図……27
9　H－2出土の遺物……28
10　H－2出土の遺物……29
11　H－2出土の遺物……30
12　H－2出土の遺物……31
13　土壙実測図……33
14　土壙出土の遺物……34
15　Tピット実測図……37
16　Tピット実測図……38
17　Tピット実測図……39
18　Tピット実測図……40
19　Tピット実測図……41
20　Tピット出土の遺物……41
21　Tピット出土の遺物……42
22　Tピット出土の遺物……43
図Ⅳ－1　包含層出土の土器……49
2　包含層出土の土器……50
3　包含層出土の土器……51
4　包含層出土の土器……52
5　包含層出土の土器……53
6　包含層出土の土器……54
7　包含層出土の土器・有孔円盤……55
8　包含層出土の石器……64
9　包含層出土の石器……65
10　包含層出土の石器……66
11　包含層出土の石器……67
12　包含層出土の石器……68
13　包含層出土の石器……69
14　包含層出土の石器……70
15　包含層出土の石器……71
16　包含層出土の石器……72
17　包含層出土の石器……73
18　包含層出土の石器……74
19　包含層出土の石器……75
20　包含層出土の石器……76
21　包含層出土の石器……77
22　包含層出土の石器……78
23　包含層出土の石器……79
24　包含層出土の石器……80
25　包含層出土の石器……81
26　包含層出土の石器……82
27　包含層出土の石器……83
28　包含層出土の石器……84
29　包含層出土の石器……85
30　包含層出土の石器……86
31　包含層出土の石器……87
32　包含層出土の石器……88
33　包含層出土の石器……89
34　包含層出土の石器……90
図Ⅴ－1　遺物分布図(1)……101
2　遺物分布図(2)(1)……102
3　遺物分布図(2)(3)……103
4　遺物分布図(4)……104

表 目 次

表Ⅱ－1　出土遺物一覧表……17
表Ⅲ－1　H－1出土遺物一覧表……18
2　H－1掲載遺物一覧表……25
3　H－2出土遺物一覧表……26
4　H－2掲載遺物一覧表……31
5　土壙出土遺物一覧表……32
6　土壙掲載遺物一覧表……34
7　Tピット出土遺物一覧表……44
8　Tピット掲載遺物一覧表……44
表Ⅳ－1　包含層掲載土器一覧表……56
2　包含層写真掲載土器一覧表……58
3　包含層掲載石器一覧表……91

写 真 図 版 目 次

図版１－１　中浜E遺跡より眺めた恵山……117
　　２　中浜川と日暮山……117
図版２－１　発掘前の風景……118
　　２　伐採作業……118
図版３－１　調査風景……119
　　２　発掘後の風景……119
住居跡H－１
図版４－１　法面で確認されたH－１断面…120
　　２　H－１完掘……120
図版５－１　H－１炉……121
　　２　H－１炉の探鉢……121
　　３　H－１覆土の土器……121
　　４　H－１覆土の剥片石器……121
　　５　H－１覆土の礫石器……121
図版６－１　H－１床面出土の土器……122
　　２　H－１床面出土の土器……122
　　３　H－１床面出土の土器……122
　　４　H－１床面出土の土器……122
　　５　H－１床面出土の土器……122
　　６　H－１床面出土の土器……122
図版７－１　H－１床面出土の剥片石器……123
　　２　H－１床面出土の礫石器……123
　　３　H－１床面出土の礫石……123
　　４　H－１床面出土の石皿……123
住居跡H－２
図版８－１　H－２完掘……124
　　２　H－２覆土の剥片石器……124
　　３　H－２覆土の礫石器……124
図版９－１　H－２床面出土の土器……125
　　２　H－２床面出土の剥片石器……125
　　３　H－２床面出土の礫石器……125
　　４　H－２床面出土の石皿……125
土壙
図版10－１　P－１……126
　　２　P－３……126
図版11－１　P－４……127
　　２　土壙の遺物……127
Tピット
図版12－１　TP－１……128
　　２　TP－２……128
　　３　TP－５……128
　　４　TP出土の炭化した笹……128
図版13－１　TP－６・７……129
　　２　TP－９……129
　　３　TP－10……129
　　４　TP－11……129
包含層の遺物出土状況
図版14－１　早期の土器……130
　　２　中期の土器……130
　　３　中期の土器……130
　　４　石斧……130
　　５　フレーク……130
包含層出土の土器
図版15－１　土器（Ⅰ群）……131
図版16－１　土器（Ⅰ群）……132
図版17－１　土器（Ⅰ群）……133
　　２　土器（Ⅰ群）……133
図版18－１　土器（Ⅰ群）……134
　　２　土器（Ⅰ群）……134
　　３　土器（Ⅰ群　魚骨回転文）……134
図版19－１　土器（Ⅰ群）……135
図版20－１　土器（Ⅱ群）……136
図版21－１　土器（Ⅲ群）……137
　　２　土器（Ⅲ群）……137
　　３　土器（Ⅲ群）……137
　　４　土器（Ⅲ群）……137
　　５　土器（Ⅲ群）……137
図版22－１　土器（Ⅲ群）……138
　　２　土器（Ⅲ群）……138
図版23－１　土器（Ⅳ群）……139
出土土器（早期）の文様の各種
図版24－１　無文……140

2 圧痕文……140
3 貝殻腹縁連続波状文……140
4 貝殻条痕文＋貝殻腹縁文……140
5 貝殻腹縁押し引き文……140
6 貝殻条痕文……140
7 沈線文（波状）……140
8 沈線文（波状）……140
図版25－1 沈線文……141
2 沈線文……141
3 貝殻腹縁押し引き文＋
給条体圧痕文……141
4 給条体圧痕文＋貝殻腹縁文……141
5 爪形文……141
6 隆帯文＋刺突文……141
7 隆帯文＋給条体圧痕文……141
8 隆帯文＋給条体圧痕文……141
図版26－1 給条体圧痕文……142
2 隆帯文＋沈線文……142
3 貝殻腹縁文……142
4 貝殻腹縁文……142
5 貝殻腹縁連続波状文……142
6 貝殻腹縁押し引き文……142
7 貝殻条痕文……142
8 貝殻条痕文……142
図版27－1 沈線文……143
2 沈線文……143
3 沈線文……143
4 沈線文……143
5 沈線文＋刺突文……143
6 沈線文＋刺突文……143
7 沈線文＋刺突文……143
8 沈線文＋刺突文……143
図版28－1 爪形文＋沈線文……144
2 沈線文……144
3 隆帯文＋沈線文……144
4 隆帯文＋沈線文……144
5 魚骨回転文……144
6 魚骨回転文……144
7 短縄文……144
8 組紐圧痕文……144
図版29－1 貼付帯……145
2 隆起線文……145
3 隆起線文＋給条体圧痕文……145
4 撚糸文……145
5 撚糸文……145
6 撚糸文＋給条体圧痕文……145
7 撚糸文……145
8 綾絡文……145
包含層出土の石器
図版30－1 石鏃・槍先類……146
図版31－1 石錐……147
2 つまみ付ナイフ……147
図版32－1 つまみ付ナイフ……148
図版33－1 つまみ付ナイフ……149
2 笹状石器……149
図版34－1 スクレイパー……150
図版35－1 スクレイパー……151
図版36－1 スクレイパーと異形石器……152
図版37－1 石斧……153
2 すり石……153
図版38－1 すり石……154
2 すり石……154
図版39－1 すり石……155
2 すり石……155
図版40－1 たたき石……156
2 たたき石……156
図版41－1 石錘……157
2 砥石……157
図版42－1 石皿・台石……158

凡　　例

1．遺構の略号は，Hは住居跡，Pは土壙，TPはTピット，Fは住居跡に付属しない焼土を表す。原則として発見順に番号をつけた。

2．遺構の記載については，位置は4m×4mのグリッド名で示し，規模は確認面の長軸長／壙底面長×確認面の短軸長／壙底面の短軸長×確認面からの最大深の順で記載した。

3．図示した遺構の床面出土遺物については番号を○で囲って表示した。

4．土層の説明については，基本土層をⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ…，遺構の覆土などは1・2・3…で表示し，色調・火山灰・黒色土などの混在状況，粘性などを図版中で説明した。

5．図版は下記の縮尺で掲載した。

遺構図　1：40　　土器実測図・拓影図　1：3　　剥片石器実測図　1：2

礫石器実測図　1：3

6．掲載遺物一覧表中の重量の数値のうち( )で示したものは破損品である。また，写真を掲載した遺物には写真図版番号を付してある。

7．写真図版の縮尺は不統一である。

Ⅰ　調査の概要

1　調査要項

事　業　名	尻岸内町中浜E遺跡埋蔵文化財発掘調査
事業委託者	北海道開発局函館開発建設部
事業受託者	財団法人　北海道埋蔵文化財センター
遺　跡　名	中浜E遺跡（北海道教育委員会登載番号：B－10－53）
所　在　地	北海道亀田郡尻岸内町字中浜92の57・58ほか
調査面積	1,090 m^2
調査期間	昭和59年4月2日～昭和60年3月30日

2　調査体制

財団法人　北海道埋蔵文化財センター	理事長	中村　龍一	
	業務部長	横田　直成	
	調査部長	竹田　輝雄	
	調査第四班長	鬼柳　　彰	（発掘担当者）
	文化財保護主事	田口　　尚	
	嘱　　託	中村　千春	

II　遺跡の概要

1　位置と環境

中浜E遺跡は亀田半島東南端の北海道亀田郡尻岸内町字中浜にある。尻岸内町は東南側が約15 kmにわたって津軽海峡に面し，西側の山間部で函館市に，北は椴法華村・南茅部町，南西で戸井町とそれぞれ境を接している。北東の御崎から南西の日浦にいたる海岸沿いに，古くから漁業を中心として発展してきた町である。町の背後は渡島山地の東南端にあたる標高200～300 mの山々が尾根を並べ，この山岳地帯をきざんで古武井川・尻岸内川が津軽海峡に注ぎ，流域には小さな平野を形成している。山間部には今も原生林が多く，ナラ・ブナを主体とする広葉樹林が広がっている。椴法華村と境を接する尻岸内町の北東部は太平洋に突き出しており，ここに噴煙を上げて活動する恵山（618 m）がそびえている。

日浦からサンタロナカセ岬にかけては安山岩の柱状節理が発達しており，海岸の美しい景色は有名で，地質学的にもきわめて興味深い所とされている。豊浦から古武井川河口にあたる日の浜の平野部にかけては，縁辺部の高さが約20 mの海岸段丘が続いている。

太平洋の千島海流と日本海から津軽海峡に入る暖流の影響によって，気候の変化は大きい。降水量は非常に多く，降水日数は一年のうちの半ばに達する。また5月から8月にかけては濃霧に覆われる日が多い。

中浜は尻岸内川の河口より約1.5 km南方にあたり，遺跡は集落の背後の段丘上にある。遺跡のすぐ南側を日暮山（203 m）に源を発する中浜川が段丘に深く沢をきざんで流れており，この沢は「サッカイヲタの小沢」と呼ばれている。調査地区は段丘の端からわずかに20 m，背後の日暮山の裾までは約80 mはなれている。ここからは眼下に中浜の家並みを，その向うに津軽海峡をはさんで青森県下北半島の山々をはるかに臨むことができる。また北東には，恵山がその偉容を誇っている。

遺跡周辺は現在畑地となっている。この付近に縄文土器が散布していることは，以前から地元の人々の間で知られていた。また調査区西側の日暮山の裾からは，耕作の際に長さ50 cmから70 cmほどの川原石が10数個発見されている。今回の調査では，縄文時代後期の土器片もかなり出土しており，その時代の配石遺構にともなった石の可能性もある。

松浦武四郎の三航蝦夷日志には，「サッカイヲタの小沢」の上に「蝦夷の大王の昔し住しと云館跡あり……」と記されている。このことから「尻岸内町史」では今回の調査区にあたる部分にチャシがあったものと推定している。しかし二ヶ月あまりにわたる発掘によっても，チャシ跡と考えられる遺構・遺物は出土していない。今後，さらに資料の検討が必要であろう。

尻岸内町では古くから遺跡調査が行なわれており，縄文時代中期の「古武井式土器」，晩期の「日ノ浜式土器」，続縄文時代の「恵山式土器」の型式名は当町内の遺跡名からつけられた標準型式である。昭和58年には恵山貝塚の一部が発掘調査され，多数の遺構が発見された。骨角器・

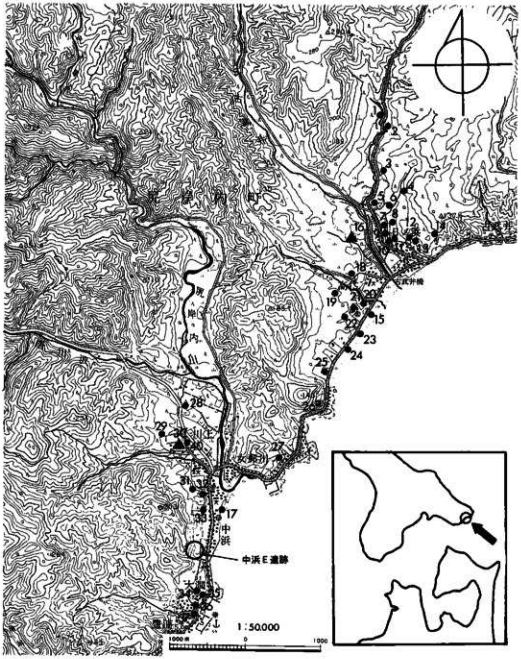
Ⅰ　調査の概要

1　調査要項

事　業　名	尻岸内町中浜E遺跡埋蔵文化財発掘調査
事業委託者	北海道開発局函館開発建設部
事業受託者	財団法人　北海道埋蔵文化財センター
遺　跡　名	中浜E遺跡（北海道教育委員会登載番号：B－10－53）
所　在　地	北海道亀田郡尻岸内町字中浜92の57・58ほか
調査面積	1,090 m^2
調査期間	昭和59年4月2日～昭和60年3月30日

2　調査体制

財団法人　北海道埋蔵文化財センター	理事長	中村　龍一
	業務部長	横田　直成
	調査部長	竹田　輝雄
	調査第四班長	鬼柳　　彰（発掘担当者）
	文化財保護主事	田口　　尚
	嘱　　託	中村　千春



1．古武井10遺跡　2．古武井9遺跡　3．古武井12遺跡　4．古武井5遺跡　5．古武井11遺跡
6．古武井8遺跡　7．古武井14遺跡　8．古武井4遺跡　9．古武井6遺跡　10．古武井13遺跡
11．古武井7遺跡　12．古武井2遺跡　13．古武井3遺跡　14．古武井1遺跡　15．目の浜砂丘4遺跡
16．古武井溶鉱炉跡　17．中浜B遺跡　18．目の浜遺跡　19．高岱2遺跡　20．高岱4遺跡
21．高岱遺跡　22．高岱3遺跡　23．目の浜砂丘3遺跡　24．目の浜砂丘2遺跡　25．目の浜砂丘1遺跡
26．魚付神遺跡　27．女鮫川遺跡　28．川上B遺跡　29．川上C遺跡　30．女鮫川瓦製造所跡
31．中浜D遺跡　32．中浜C遺跡　33．中浜遺跡　34．大洞B遺跡　35．大洞遺跡
36．大洞C遺跡　37．登満遺跡　38．川上遺跡

注．本図は道教委の埋蔵文化財包蔵地調査カードによる。

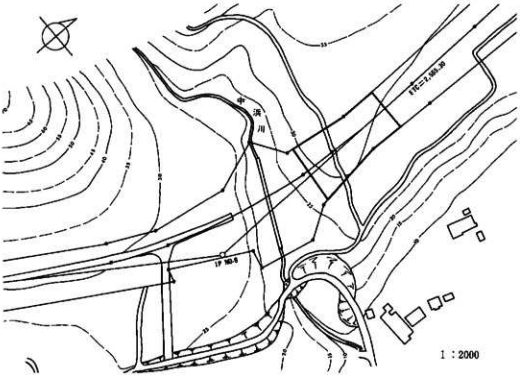
図Ⅰ－1　中浜E遺跡の位置と周辺の遺跡

3　調査の経緯

北海道開発局函館開発建設部は，昭和 55 年度より函館市から森町へ至る国道 278 号の改良工事を実施している。尻岸内町では，この道路が海岸沿いの集落の中を通過しているが，この改良工事完了後，町内の豊浦（とようら）から女部川（ひめがわ）にかけては段丘上を通ることになる。

北海道教育委員会は昭和 54 年に，この改良工事予定地内の埋蔵文化財包蔵地所在確認調査を行なったが，本遺跡を発見することはできなかった。しかし，函館開発建設部が工事を実施するにあたり，工事用道路を敷設したところ，今回の調査区にあたる部分から，縄文時代の遺構・遺物が発見された。北海道教育委員会は尻岸内町教育委員会の報告を受けて，昭和 58 年 9 月に範囲確認調査を実施，縄文時代早期から後期の遺跡であることを確認した。

発掘調査対象面積は当初 1,540 m² と決定されたが，調査に入り，前述の工事用道路に直交してトレンチ調査を行なったところ，この道路は，地山を深く掘りさくした後，角礫を厚く敷いてつくられており，遺構・遺物が検出されることはないものと判断されたため，調査対象区域から除外した。また，この工事用道路に直交する農道の一部も，これと同様に深く掘り下げられており，さらに調査予定地区南端の沢の北側斜面部分も地山が露出していて，遺構・遺物がまったくみとめられなかったため，調査対象から除いた。このため，本遺跡の最終的な発掘調査面積は 1,090 m² となった。



図Ⅰ－2　遺跡周辺の地形図

II　遺跡の概要

1　位置と環境

中浜E遺跡は亀田半島東南端の北海道亀田郡尻岸内町字中浜にある。尻岸内町は東南側が約15 km にわたって津軽海峡に面し，西側の山間部で函館市に，北は椴法華村・南茅部町，南西で戸井町とそれぞれ境を接している。北東の御崎から南西の日浦にいたる海岸沿いに，古くから漁業を中心として発展してきた町である。町の背後は渡島山地の東南端にあたる標高200～300 m の山々が尾根を並べ，この山岳地帯をきざんで古武井川・尻岸内川が津軽海峡に注ぎ，流域には小さな平野を形成している。山間部には今も原生林が多く，ナラ・ブナを主体とする広葉樹林が広がっている。椴法華村と境を接する尻岸内町の北東部は太平洋に突き出しており，ここに噴煙を上げて活動する恵山（618 m）がそびえている。

日浦からサンタロナカセ岬にかけては安山岩の柱状節理が発達しており，海岸の美しい景色は有名で，地質学的にもきわめて興味深い所とされている。豊浦から古武井川河口にあたる日の浜の平野部にかけては，縁辺部の高さが約 20 m の海岸段丘が続いている。

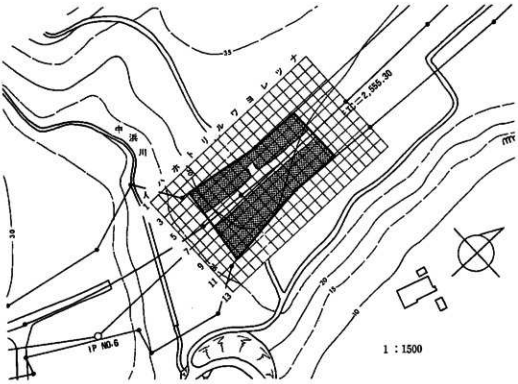
太平洋の千島海流と日本海から津軽海峡に入る暖流の影響によって，気候の変化は大きい。降水量は非常に多く，降水日数は一年のうちの半ばに達する。また 5 月から 8 月にかけては濃霧に覆われる日が多い。

中浜は尻岸内川の河口より約 1.5 km 南方にあたり，遺跡は集落の背後の段丘上にある。遺跡のすぐ南側を日暮山（203 m）に源を発する中浜川が段丘に深く沢をきざんで流れており，この沢は「サッカイヲタの小沢」と呼ばれている。調査地区は段丘の端からわずかに 20 m，背後の日暮山の裾までは約 80 m はなれている。ここからは眼下に中浜の家並みを，その向うに津軽海峡をはさんで青森県下北半島の山々をはるかに臨むことができる。また北東には，恵山がその偉容を誇っている。

遺跡周辺は現在畑地となっている。この付近に縄文土器が散布していることは，以前から地元の人々の間で知られていた。また調査区西側の日暮山の裾からは，耕作の際に長さ 50 cm から 70 cm ほどの川原石が 10 数個発見されている。今回の調査では，縄文時代後期の土器片もかなり出土しており，その時代の配石遺構にともなった石の可能性もある。

松浦武四郎の三航蝦夷日志には，「サッカイヲタの小沢」の上に「蝦夷の大王の昔し住しと云館跡あり……」と記されている。このことから「尻岸内町史」では今回の調査区にあたる部分にチャシがあったものと推定している。しかし二ヶ月あまりにわたる発掘によっても，チャシ跡と考えられる遺構・遺物は出土していない。今後，さらに資料の検討が必要であろう。

尻岸内町では古くから遺跡調査が行なわれており，縄文時代中期の「古武井式土器」，晩期の「日ノ浜式土器」，続縄文時代の「恵山式土器」の型式名は当町内の遺跡名からつけられた標準型式である。昭和 58 年には恵山貝塚の一部が発掘調査され，多数の遺構が発見された。骨角器・



図II－1　発掘区設定図

魚形石器などのほか，多量の土器・石器・獣骨・魚骨などが出土している。同58年には古武井9遺跡の調査も行なわれ，縄文時代中期及び後期の遺構・遺物が発見された。

2　発掘区の設定

発掘調査の基本図には北海道開発局函館開発建設部作成の「一般国道278号尻岸内町中浜敷地確定調査現地平面図」を使用した。発掘区の設定は以下のとおりである。

道路予定線のセンター杭E.T.C.＝2555.30とIP NO.6を見通した線（7のライン）と，E.T.C.＝2555.30を交点とし，これに直交する線を設定。この直交する線を基準として，調査区域全体を4mの方眼で覆い，南からイ・ロ・ハ……，西から1・2・3……の記号を付した。この4m方眼が調査の基本単位である。各グリットはそれぞれの南西隅の交点を通る線の記号の組み合わせによって表示した。

遺物のとり上げにあたっては，上記の4mグリットを東西・南北とも4列づつに16分割して行った。この1mグリットは，各4mグリット毎に1から16までの番号を付した。したがって，遺物の出土地点はイ－1－4のように表示される。

以上のように発掘にあたっては，グリット調査を基本としたが，層序の把握，遺構の検出などの際には，トレンチ調査を併用した部分もある。

3　基本層序

調査地区では，古くから畑作が行なわれており，土層はかなり攪乱されている。また，段丘縁辺部にあたり，さらに南側が深い沢になっていることなどから，土層の厚さは場所によって大きな差異がある。同一の層位でも途切れたり，うすく拡散してほかの層位との境が不明瞭になっている所が多い。

発掘を進めるにあたり，数ヶ所でトレンチ調査を行なった結果，下記の層位が基本になっていることを確認した。

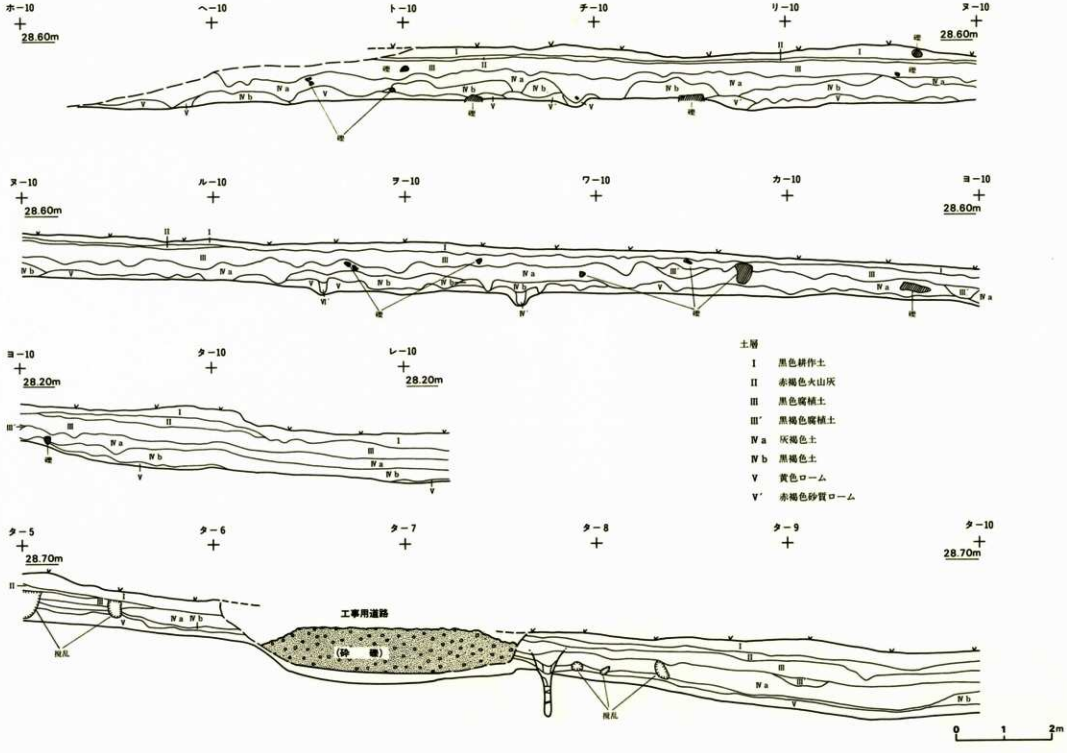
Ⅰ層　黒色耕作土：腐植質を含む黒色土で，場所によってはⅡ層の火山灰と混じり合っている。耕作によって，入り混んだと思われる土器片がわずかに出土している。

Ⅱ層　赤褐色火山灰：厚さ2・3 cmから10 cmほど。調査区北端部では耕作のため，Ⅰ層中に混じり合っている。この火山灰の起源は不明である。

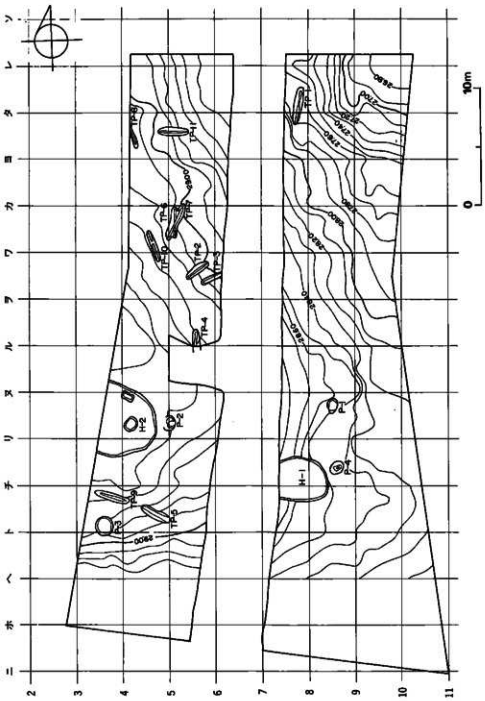
Ⅲ層　黒色腐植土：腐植質を多く含む黒色土。うすい赤色火山灰を含んでいる部分もあるが，不明瞭である。縄文時代早期から後期の遺物包含層。

Ⅳ層　灰褐色土，黒褐色土：この二つの土色に分層されるが，その境は不明瞭な部分が多い。細かい砂を均質に含んでいる。縄文時代早期の遺物包含層。

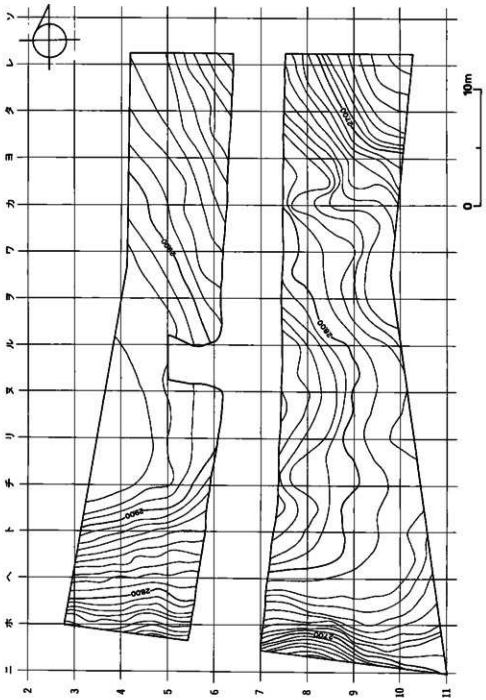
Ⅴ層　黄色ローム：地山。所々に砂が流れた跡がみられる。


ホ－10
28.60m
ヘ－10
ト－10
チ－10
リ－10
ヌ－10
28.60m
ヌ－10
28.60m
ル－10
ヲ－10
ワ－10
カ－10
ヨ－10
28.60m
ヨ－10
28.20m
タ－10
レ－10
28.20m
土層
Ⅰ　黒色耕作土
Ⅱ　赤褐色火山灰
Ⅲ　黒色腐植土
Ⅲ′　黒褐色腐植土
Ⅳa　灰褐色土
Ⅳb　黒褐色土
Ⅴ　黄色ローム
Ⅴ′　赤褐色砂質ローム
タ－5
28.70m
タ－6
タ－7
タ－8
タ－9
タ－10
28.70m
工事用道路
(砂　礫)
0
1
2m

図Ⅱ－2　遺跡土層断面図



図II－3　Ⅳ層上面地形図



図II－4　V層上面地形図

4　遺物の分類

土器については文様構成・器形そのほかの要素を観察したうえで，他の遺跡の出土資料と比較検討を行ない，Ⅰ群（縄文時代早期），Ⅱ群（早期末～前期初頭），Ⅲ群（中期），Ⅳ群（後期）に分類した。さらに各群の中でも細分を試みた。

石器については，剥片石器と礫石器に大別し，形態，調整・加工の状態，使用痕・加工痕の有無などによって，Ⅰ群からⅢ群に分類した。これらをさらに各部位の形状，断面形などから細分した。

土器

〈Ⅰ群〉　縄文時代早期に属する土器群

a類：無文，爪形文，貝殻腹縁圧痕文，貝殻腹縁連続波状文，貝殻腹縁押し引き文，貝殻条痕文，沈線文，刺突文，絡条体圧痕文，隆帯文が単独あるいは複合施文された土器。これらは，ノダップⅠ式，住吉町式，アルトリ式などの系統に相当する土器である。

b－1類　短縄文，絡条体圧痕文，組紐圧痕文が施されたもの。東釧路Ⅲ式土器に相当する。

b－2類　斜行縄文，羽状縄文，絡条体圧痕文，組紐圧痕文が施文され，貼付帯を特徴とするもの。コッタロ式土器に相当する。

b－3類　斜行縄文，短縄文，綾絡文が施され，微隆起線を特徴とするもの。中茶路式，梁川町式1類・2類土器の一部に相当する。

b－4類　撚糸文が羽状に施されたもの。綾絡文が施されたもの。東釧路Ⅳ式，梁川町式1類土器の一部に相当する。

〈Ⅱ群〉　縄文時代早期末葉～前期初頭に属する土器群

a類：縄文，羽状縄文，撚糸文，組紐回転文などが施され，繊維の痕跡がある土器。内面に縄文，条痕文が施されたものもある。早稲田5・6類，長七谷地2号遺跡出土資料，春日町式土器に類似するもの。

〈Ⅲ群〉　縄文時代中期に属する土器群

a類：円筒形深鉢の器形で羽状縄文，貼付帯，撚糸圧痕文，馬蹄形圧痕文が施された土器。円筒土器上層式に相当する。

b－1類　山形あるいは棒状の突起をもち斜行縄文が施された土器。見晴町式，森越式土器に相当する。

b－2類　口唇や胴部の貼付帯に刺突文が施された土器。大安在B式土器に相当する。

b－3類　口縁部，貼付帯上に撚糸圧痕文が施された土器。ノダップⅡ式土器に相当する。

〈Ⅳ群〉　縄文時代後期に属する土器群

a類：沈線文，磨消文を主体とし，さらに二本組の沈線による懸垂文，入組文，曲線文などが施されている土器。涌元式，余市式，入江式，トリサキ式土器に相当する。

b類：平行沈線を短い縦の沈線で区切る土器，磨消手法による文様があるもの。手稲式土器に相当する。

石器

剥片石器など（Ⅰ～Ⅴ群）

〈Ⅰ群〉石鏃・槍先類（ナイフとしての使用も考えられるものも含む）

A：三角形のもの

1：平基のもの

2：凹基のもの

B：五角形のもの

C：明瞭な茎部がないもの

1：棹葉形のもの（凹基のものも含めた）

2：ひし形のもの

3：基部が丸いもの

D：明瞭な茎部があるもの

1：最大幅が鏃長の中央より上にあるもの

2：最大幅が鏃長の中央あるいは下にあるもの

Z：破片

〈Ⅱ群〉　石錐

A：棒状のもの

1：つまみ部がないもの

2：つまみ部があるもの

B：V字状剥片の尖端部を使用したもの

C：石鏃・槍先の形態をもつもの

D：刺突部を作り出したもの（刺突部が複数のものもある）

Z：破片

〈Ⅲ群〉　ナイフ・スクレイパー類

A：つまみ付ナイフ

1：縦長のもの

a．二次加工が片面の周縁に施されたもの

b．二次加工が片面の全面に施されたもの

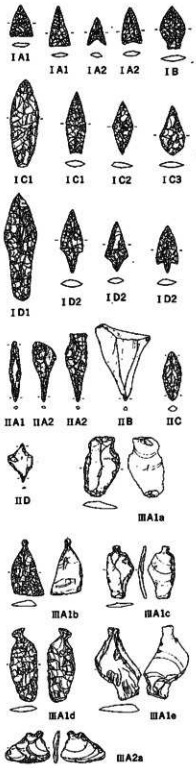
c．二次加工が両面の周縁に施されたもの

d．二次加工が両面の全面に施されたもの

e．つまみ部のみが作り出されたもの

2：横長のもの

a．二次加工が片面の周縁に施されたもの



b．二次加工が片面の全面に施されたもの

d．二次加工が両面の全面に施されたもの

B：篦状石器

1：刃部が片面のみ加工されているもの

2：刃部が両面加工されているもの

3：篦状石器に類似するもの（篦状の形態をもち粗雑なもの，大形のもので末端部に刃部があるもの）

D：スクレイパー

1：縦長剥片を調整・加工したもの

a．刃部が側縁にあり直線的なもの

b．刃部が側縁にあり張り出しているもの

c．刃部が側縁にあり抉りがあるもの

d．刃部が末端にあるもの

e．刃部が末端から側縁にかけてあるもの

2：横長剥片を調整・加工したもの

a．刃部が末端にあり直線的なもの

b．刃部が末端にあり張り出しているもの

c．刃部が末端にあり抉りがあるもの

d．刃部が側縁にあるもの

e．刃部が末端から側縁にあるもの

3：円形・楕円形のもの

a．二次加工が片面にあるもの

b．二次加工が両面にあるもの

4：尖端部をもつもの

a．二次加工が片面にあるもの

b．二次加工が両面にあるもの

5：石鏃・槍先の形態をもつが左右非対称のもの

Z：破片

〈IV群〉　不定形剥片石器　（I群～III群以外の剥片石器）

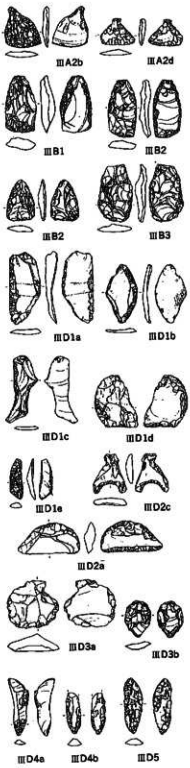
A：不定形剥片石器

Z：破片

〈V群〉　フレイク・コア

A：フレイク

1：加工痕のあるフレイク



2：使用痕のあるフレイク

3：フレイク

B：コア・原石

1：コア

2：原石（剥片石器の素材）

礫石器など（Ⅵ群～Ⅶ群）

〈Ⅵ群〉　石斧

A：石斧

1：擦切石斧・定角式石斧

a．全面磨製のもの

① 擦切痕があるもの

② 擦切痕がないもの

b．敲打整形痕があるもの

c．剥離整形痕があるもの

2：乳棒状石斧

a．研磨整形痕があるもの

b．敲打整形痕があるもの

c．剥離整形痕があるもの

3：素材を大きく変形することなく刃部のみ作り出したもの

X：未製品・擦切り残片・素材

Z：破片

〈Ⅶ群〉　すり石・たたき石

A：すり石

1：断面が隅丸三角形の礫の稜を擦ったもの

2：扁平な半円状礫の弦を擦ったもの

a．擦面を打ち欠いていないもの

b．擦面を打ち欠いているもの

c．擦面と側縁を打ち欠いているもの

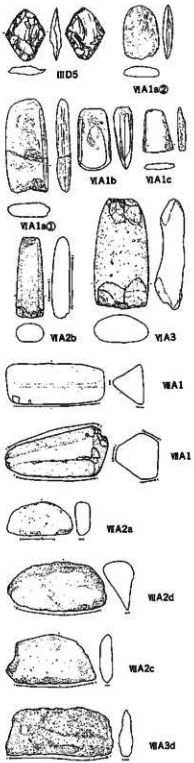
d．全周，全面を粗く打ち欠いているもの

3：扁平な短冊状礫の側縁を擦ったもの

a．擦面を打欠いていないもの

c．擦面と側縁を打ち欠いたもの

d．周縁，全面を粗く打ち欠いたもの



4：扁平礫の側縁を擦ったもの

5：円礫，亜円礫の表・裏面を擦ったもの

B：北海道式石冠

C：たたき石（くぼみ石を含む）

1：棒状礫あるいは円柱状礫の一端もしくは両端に敲打痕があるもの

2：扁平礫・亜円礫などの稜あるいは周縁に敲打痕があるもの

3：扁平礫の表・裏に敲打によるくぼみがあるもの（くぼみ石を含む）

Z：破片

〈Ⅷ群〉　石錘

A：石錘

1：4ヵ所に打ち欠きがあるもの

2：長軸の両端に打ち欠きがあるもの

4：3ヵ所に打ち欠きがあるもの。

Z：破片

〈Ⅸ群〉　砥石

A：砥石

1：研磨面に溝があるもの

2：研磨面が平滑なもの

3：研磨面がくぼんでいるもの

Z：破片

〈Ⅹ群〉　石皿・台石類

A：石皿

B：台石

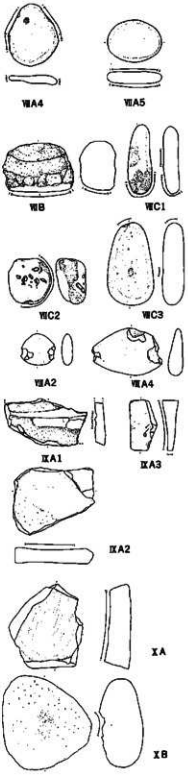
Z：破片

〈Ⅺ群〉　不定形礫石器　（Ⅵ群～Ⅹ群以外のもの，使用痕・加工痕のみられるものを含む）

A：不定形礫石器

Z：破片

〈Ⅻ群〉　礫　（石器の素材　遺構などと関連する礫を含む）



5　調査の要旨

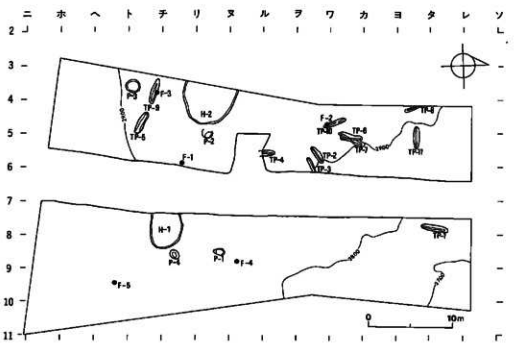
調査区は，南端が「サッカイヲタの小沢」に下りる急斜面になっており，さらに北東にも調査区外へ延びる浅い沢がある。この二つの沢にはさまれる部分は，低い舌状の微高地になっている。

発見された遺構は，竪穴住居跡が2ヵ所，土壙4ヵ所，Tピット11ヵ所，焼土5ヵ所である。住居跡は，舌状の微高地に東西に並んで検出されたが，構築時期は東側のH－1が縄文時代中期前葉，西側のH－2が後期初頭と考えられる。H－1の床面からは，円筒土器上層式に相当する6個体の土器と石皿などの石器類が一括して発見された。

土壙，Tピット，焼土は，二つの住居跡をとり囲むように分布している。つくられた時期は大まかにみて住居跡H－2に近い頃と考えられるが，相互の先後関係は明確ではない。

出土した遺物は，土器が破片点数にして7,000点あまり，剥片等を含む石器類が41,000点あまりである。これらの遺物は遺構と同時期の縄文時代中期から後期のものが約40%である。このほかの60%は早期から前期初頭の遺物であるが，この時期の遺構は検出されなかった。

遺構・遺物の分布状況をみると，本遺跡が今回の調査区より西側に大きく広がっていることが充分に予想される。



図Ⅱ－5　遺跡構位置図

表II－1 出土遺物一覧表

名称	分類	数量
土器	Ⅰa	642
〃	b－1	109
〃	2	157
〃	3	397
〃	4	1,924
〃	Ⅱa	212
〃	Ⅲa	2,972
〃	b－1	3
〃	2	8
〃	3	6
〃	Ⅳa	395
〃	Ⅳb	99
〃	不明	324
土器計		7,248
石鏃・槍先	ⅠA1	8
〃	2	9
〃	B2	7
〃	C1	34
〃	2	15
〃	3	2
〃	D1	14
〃	2	39
〃	Z	46
石錐	ⅡA1	2
〃	2	9
〃	B	11
〃	C	9
〃	D	8
〃	Z	1
つまみ付ナイフ	ⅢA1a	17
〃	b	115
〃	c	2
〃	d	7
〃	e	17
〃	2a	1
〃	b	1
〃	d	1
〃	Z	8
荒状石器	ⅢB1	23
〃	2	9
〃	3	3
〃	Z	19
スクレイパー	ⅢD1a	84
〃	b	107
〃	c	3

名称	分類	数量
〃	d	8
〃	e	21
〃	2a	15
〃	b	12
〃	c	2
〃	d	7
〃	e	9
〃	3a	9
〃	b	18
〃	4a	26
〃	b	23
〃	5	32
〃	Z	187
不定形剥片	ⅣA	6
〃	Z	1
加工痕	ⅤA1	92
使用痕	2	477
フレイク	3	26,999
コア	ⅤB1	198
原石	2	100
石斧	ⅥA1a①	7
〃	②	4
〃	b	4
〃	c	2
〃	2a	3
〃	b	1
〃	c	2
〃	3	1
〃	Z	5
すり石	ⅦA1	67
〃	2a	5
〃	b	2
〃	c	1
〃	d	7
〃	3a	2
〃	c	1
〃	d	2
〃	4	13
〃	5	45
〃	Z	3
北海道式石冠	ⅦB	3
たたき石	ⅦC1	48
〃	2	54
（くぼみ石）	3	41
〃	Z	1

名称	分類	数量
石錘	ⅧA1	4
〃	2	31
〃	4	3
〃	Z	2
砥石	ⅨA1	3
〃	2	28
〃	3	18
〃	Z	3
石皿	ⅩA	50
〃	Z	3
台石	ⅩB	27
〃	Z	2
不定形礫	ⅪA	212
礫	Ⅻ	11,423
（軽石）		2
石器など計		41,008
総計		48,256

Ⅲ　遺構とその遺物

1　住居跡

検出された住居跡は2ヵ所である。H－1は縄文時代中期前葉，H－2は縄文時代後期初頭に構築されたものと考えられる。

H－1

位　置　ト－7・ト－8・チ－7・チ－8

規　模　4.00（現存）×3.77／3.58×0.50 m

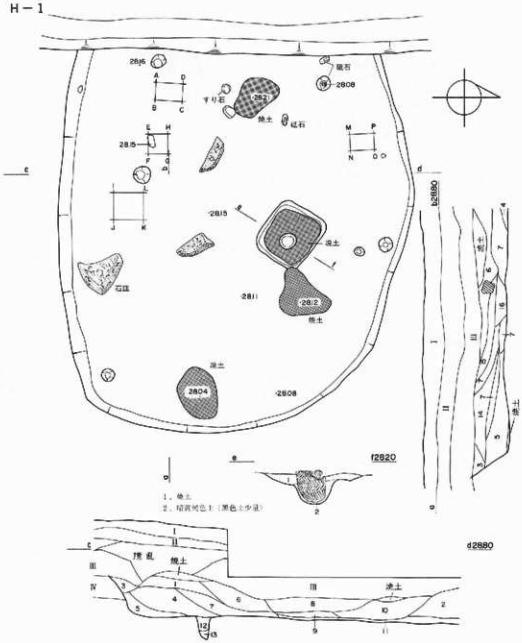
平面形　長円形

縄文時代中期前葉の竪穴住居跡。掘り込み面はⅢ層中位である。平面形は長円形と思われるが，西側は工事用道路で削られているために，全体の規模は明らかではない。床は堅くしまっている。方形の掘り込み炉が住居中央のやや北よりに設けられている。炉の中央には深鉢が埋められていた。この深鉢は上半を欠損しており，内面は二次焼成を受けている。焼土は炉の東側と住居の東西端に集中して検出された。柱穴は床面上に6個確認された。柱穴の深さは約25 cm，底および壁は比較的堅くしまっている。

床面からは円筒土器上層式（Ⅲ群a類）の深鉢5個体が出土。図Ⅲ－3－①～④はいずれも4弁の突起をもち，撚糸の圧痕が施された貼付帯がある。この貼付帯で区画された内側に①では半截竹管状工具，②では撚糸による馬蹄形圧痕文が施文されている。②は円筒土器上層b式に近いもので，①，③，④は円筒土器上層c式に相当するものと考えられる。さらに床面からは，Ⅲ群a類の土器片171点，石鏃3点，石錐1点，つまみ付ナイフ2点，スクレイパー7点，石斧1点，すり石3点，たたき石1点，石皿2点のほか多数のフレイク，コアが出土した。

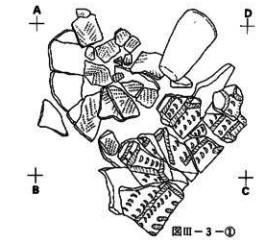
表Ⅲ－1　H－1出土遺物一覧表

名称	分類	数量 覆土	数量 床	名称	分類	数量 覆土	数量 床
土器	Ⅰa	2		スクレイパー	ⅢD4a		1
〃	Ⅰb－3	1		〃	b		1
〃	Ⅲa	53	171	不明剥片	ⅣZ	1	
〃	Ⅳa	1		フレイク	ⅤA1	5	1
〃	不明	3		〃	2	18	4
土器計		60	171	〃	3	265	23
石鏃・石槍	ⅠC1	1		コア	ⅤB1	4	2
〃	2	1		石斧	ⅥA1b	1	1
〃	D1	1	3	すり石	ⅦA1	1	
石錐	ⅡB	1		〃	2d	1	
〃	ⅡC		1	〃	3b		1
つまみ付ナイフ	ⅢA1b	3		〃	C	1	
〃	e		1	〃	d		2
〃	Z		1	〃	4	1	
スクレイパー	ⅢD1a	3	1	たたき石	ⅧC1	2	1
〃	b	7	1	砥石	ⅨA3	1	2
〃	e		2	石皿・台石	ⅩA		2
〃	2a	2		礫	Ⅺ	6	1
〃	3b		1	石器計		326	53

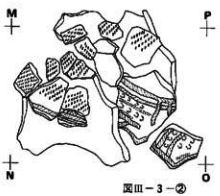


1．暗褐色土（黒色土に炭化物少量）
2．暗褐色土（炭化物多量）
3．黒色土（黄褐色火山灰粒状含量）
4．褐色土（炭化物に黒色土少量）
5．暗褐色土（炭化物に黒色土多量）
6．黒色土（黄褐色火山灰少量）
7．黒褐色土（黒色土にローム少量）
8．暗褐色土（ローム粒黄褐色火山灰少量）
9．（黒色土にローム混入）
10．黒色土（火山灰粒状少量）
11．暗黄褐色土（ロームに黒色土少量）
12．暗褐色土（黒色土にローム混入）
13．黄褐色土（ローム）
14．暗褐色土（黒色土少量黄褐色火山灰混入）
15．暗黄褐色土（黄褐色火山灰混入）
16．暗褐色土（ローム粒子）
17．暗黄褐色土（ローム粒多量）

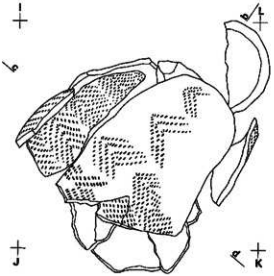
図Ⅲ－1　H－1実測図



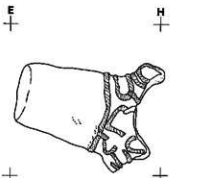
図Ⅲ－3－①



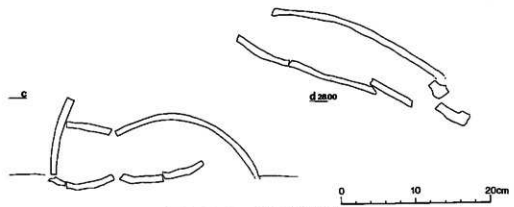
図Ⅲ－3－②



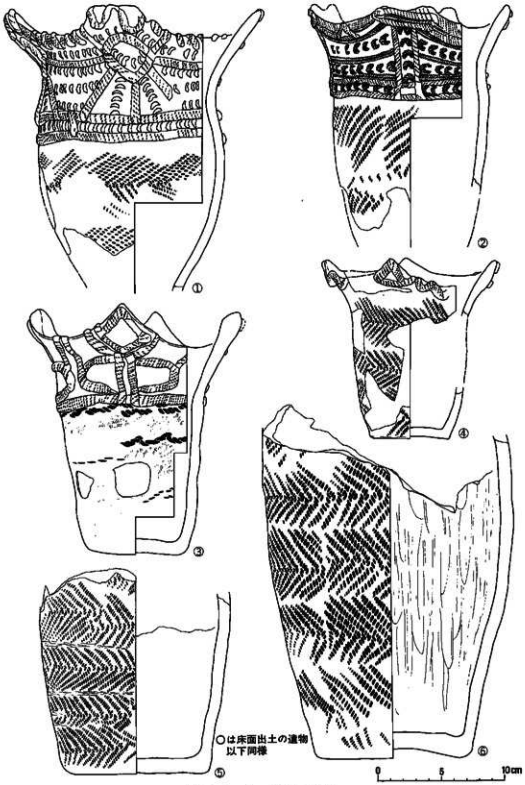
図Ⅲ－3－⑥



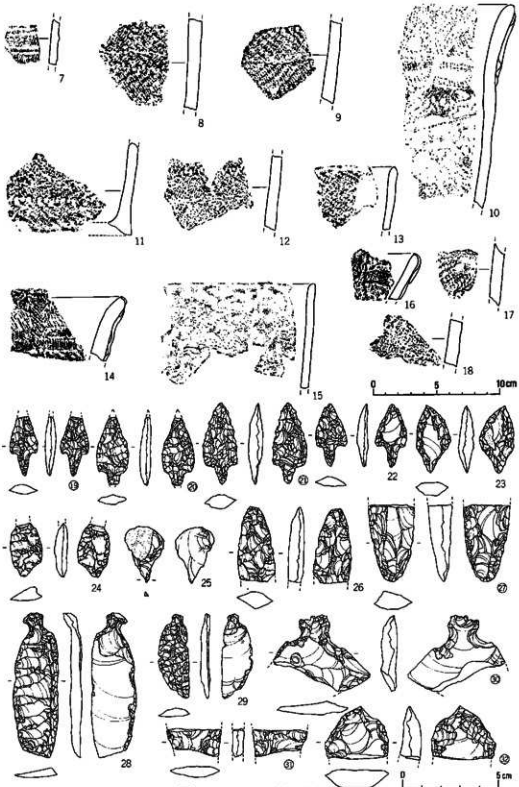
図Ⅲ－3－④



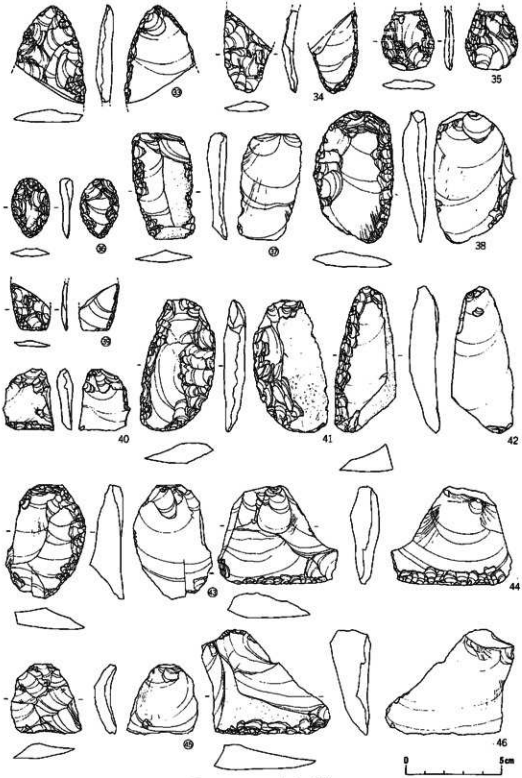
図Ⅲ－2　H－I遺物出土状況図



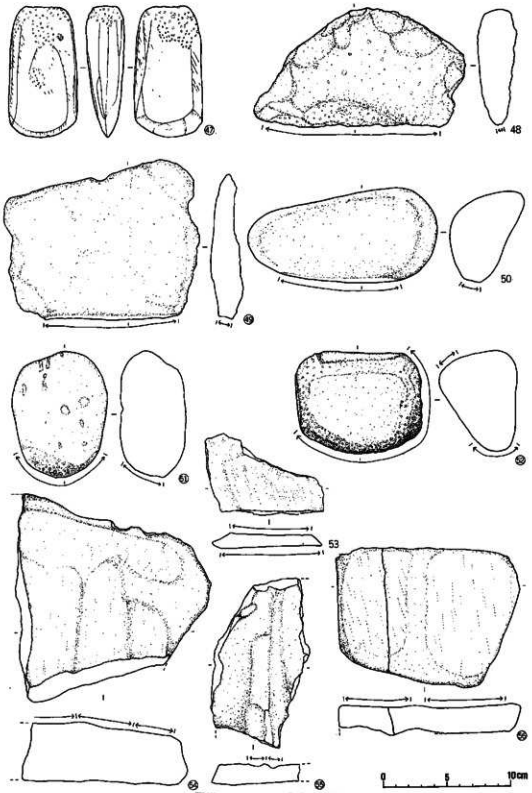
図Ⅲ－3　H－Ⅰ出土の遺物


7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
0
5
10cm
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
0
5cm

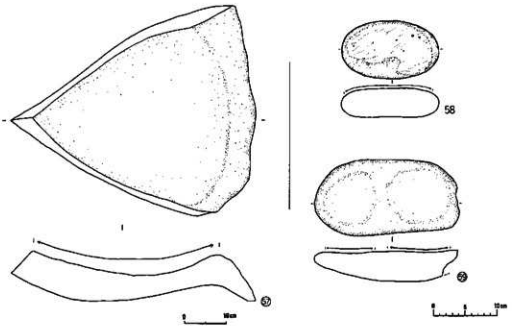
図Ⅲ－4　H－Ⅰ出土の遺物



図Ⅲ－5　H－1出土の遺物



図Ⅲ－6　H－1出土の遺物



図Ⅲ－7　H－1出土の遺物

表Ⅲ－2　H－1掲載遺物一覧表

番号	名称	分類	層位	重量(g)	材質	写真図版
1	土器	Ⅲa	床			6－1－1
2	〃	〃	〃			6－2－2
3	〃	〃	〃			6－3－3
4	〃	〃	〃			6－4－4
5	〃	〃	〃			6－5－5
6	〃	〃	〃			6－6－6
7	〃	Ⅰb－3	覆土			5－3－1
8	〃	Ⅲa	〃			5－3－2
9	〃	〃	〃			5－3－3
10	〃	〃	〃			5－3－8
11	〃	〃	〃			5－3－6
12	〃	〃	〃			5－3－7
13	〃	Ⅳa	〃			5－3－5
14	〃	Ⅲa	〃			5－3－4
15	〃	Ⅳa	〃			5－3－9
16	〃	Ⅲa	〃			
17	〃	〃	〃			
18	〃	〃	〃			
19	石鏃	ⅠD1	床	(1.6)	頁岩	7－1－1
20	〃	〃	〃	(2.6)	〃	7－1－2
21	〃	〃	〃	3.9	〃	7－1－3
22	〃	〃	覆土	1.9	〃	
23	〃	ⅠC2	〃	3.6	〃	5－4－1
24	石錐	ⅡC	〃	(2.7)	〃	
25	〃	ⅡB	〃	5.5	〃	5－4－4
26	石槍	ⅠC	〃	(6.2)	〃	
27	スクレイパー	ⅢD4b	床	(9.8)	〃	
28	つまみ付ナイフ	ⅢA1b	覆土	10.4	〃	5－4－6
29	〃	〃	〃	3.5	〃	5－4－5
30	〃	ⅢA1e	床	8.5	〃	7－1－5
31	不明剥片石器	ⅣZ	床	(2.3)	頁岩	
32	スクレイパー	ⅢD1a	床	(10.1)	〃	
33	〃	ⅢD4a	床直	(12.4)	〃	
34	つまみ付ナイフ	ⅢA1b	覆土	(5.2)	〃	
35	スクレイパー	ⅢD1b	覆土	3.5	〃	
36	〃	ⅢD3b	床	3.0	〃	7－1－4
37	〃	ⅢD1a	床直	13.4	〃	7－1－7
38	〃	ⅢD1b	覆土	29.7	〃	5－4－8
39	つまみ付ナイフ	ⅢA1Z	床直	(1.2)	〃	
40	スクレイパー	ⅢD1b	覆土	6.0	〃	5－4－12
41	〃	〃	〃	27.8	〃	5－4－7
42	〃	ⅢD1a	〃	33.3	〃	5－4－9
43	〃	ⅢD1b	床直	27.8	〃	7－1－8
44	〃	ⅢD2a	覆土	34.4	〃	5－4－11
45	〃	ⅢD1e	床	9.4	〃	7－1－6
46	〃	ⅢD2a	覆土	40.9	〃	5－4－10
47	石斧	ⅥA1b	床	240	砂岩	7－2－1
48	すり石	ⅥA2d	覆土	500	安山岩	5－5－2
49	〃	ⅥA3d	床	650	砂岩	7－2－4
50	〃	ⅥA1	覆土	760	安山岩	5－5－3
51	たたき石	ⅥC1	床	540	頁岩	7－2－2
52	〃	〃	〃	710	安山岩	5－5－1
53	磨石	ⅨA3	覆土	(73.5)	砂岩	
54	〃	〃	床	(1145)	〃	7－2－5
55	〃	〃	〃	(160)	砂岩	7－4
56	石皿	ⅩA	床	650	安山岩	7－2－3
57	〃	〃	床	21500	〃	7－4
58	すり石	ⅥA4	覆土	940	安山岩	7－4
59	石皿	ⅩA	床	(1900)	〃	5－5－4

H－2

位　置　チー3・チー4・リー3・リー4

規　模　4.10（未掘）×6.38／5.90×0.60 m

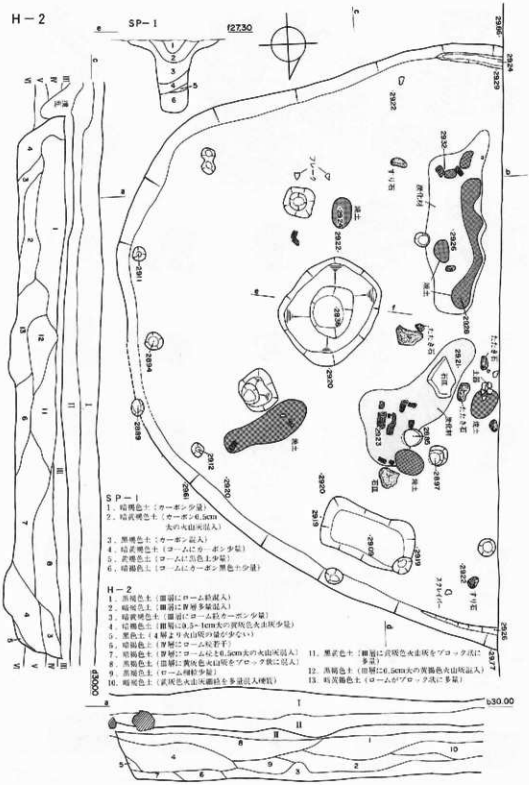
平面形　長円形

縄文時代後期初頭の住居跡と考えられる。Ⅲ層上面において黄灰色火山灰が皿状に堆積していたため，トレンチ調査を行ったところ，住居跡であることを確認した。掘り込み面はⅢ層上位である。プランは長円形と思われるが，西半部が調査区外に続いており，また東端は攪乱をうけているために全体の規模は明らかではない。床面は平坦で，壁ぎわには溝状の掘り込みがみとめられる部分がある。住居の中央には深さ 0.80 m のピットがある。平面形は 1.10×0.96 m の隅丸方形で，断面形は漏斗状である。覆土には炭化物が混入していた。このピットの北側には，1.00×0.50 m の隅丸方形の浅い掘り込みがある。両者とも住居の床面から掘り込まれており，この住居にともなう施設と考えられる。主柱穴と考えられるピットは 4 個を検出。壁ぎわにも数個柱穴状のピットが確認された。炉跡は検出されていないが，調査区外にある可能性もあろう。

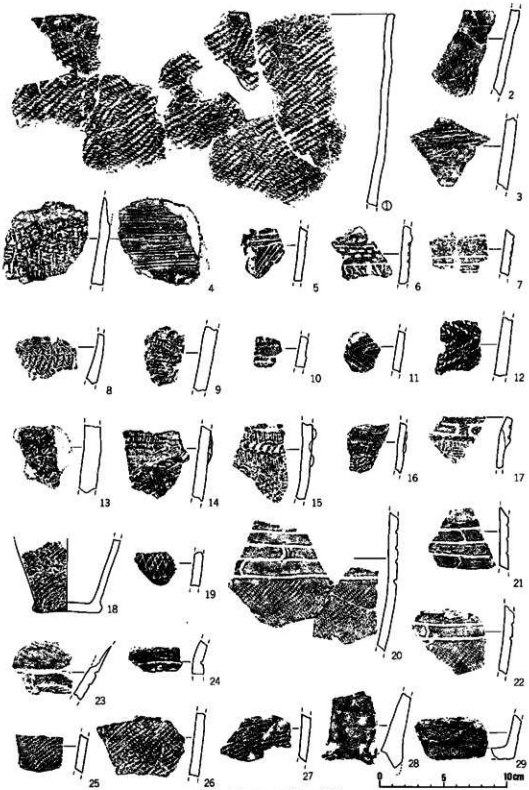
床面からは，縄文時代後期初頭（Ⅳ群ａ類）の土器片 21 点が出土している。図Ⅲ－９－①は口唇断面が角形で，RL の斜行縄文が施文された土器である。涌元式，大津Ｂ遺跡あるいは鳥崎遺跡出土資料中の縄文の地文のみの土器に類似するものである。このほかに，石鏃1点，つまみ付ナイフ１点，スクレイパー３点，すり石３点，たたき石４点，砥石１点，石皿３点が床面から出土している。

表Ⅲ－３　Ｈ－２出土遺物一覧表

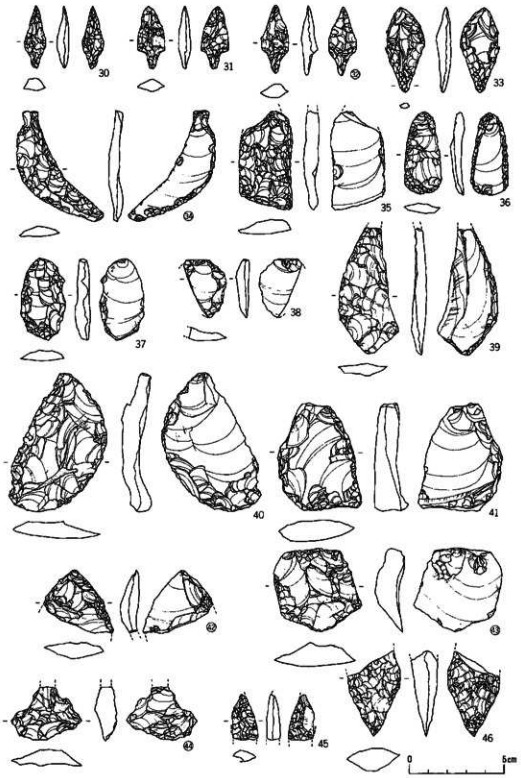
名称	分類	数量 覆土	数量 床	名称	分類	数量 覆土	数量 床
土器	Ｉａ	8		フレイク	ＶＡ２	20	3
〃	Ｉｂ－１	1		〃	3	278	37
〃	－３	8		コア	ＶＢ１	5	
〃	－４	2		原石	2	1	
〃	ⅡＡ	2		石斧	ⅥＡ１ｂ	1	
〃	ⅢＡ	26	2	〃	Ｚ	1	
〃	ⅣＡ	10	21	すり石	ⅦＡ１		2
〃	ⅣＢ	9		〃	4	1	1
	不明	3		たたき石	ⅦＣ１	2	1
土器計		69	23	〃	2	3	3
石鏃・石槍	ＩＤ１	2	1	くぼみ石	3	1	
石錐	ⅡＢ	1		石鉞	ⅦＡ１	2	
つまみ付ナイフ	ⅢＡ１ｂ	1	1	砥石	ⅨＡ２		1
箆状石器	ⅢＢ１	1		〃	3		
スクレイパー	ⅢＤ１ａ	2		石皿	ⅩＡ	1	3
〃	ｂ	8	1	〃	Ｂ	1	
〃	ｃ	1		不明礫	ⅪＡ	1	
〃	２ｂ	1	1	〃	Ｂ	2	1
〃	ｄ		1	礫	Ⅻ	47	24
〃	４ｂ	2		軽石		2	
フレイク	ＶＡ１	7	1	石器計		398	82


H－2
SP－1
f2730
SP－1
1．暗褐色土（カーボン少量）
2．暗黄褐色土（カーボン＋5.5cm大の火山灰混入）
3．黒褐色土（カーボン混入）
4．暗黄褐色土（ローム＋カーボン少量）
5．黄褐色土（ローム＋黒色土少量）
6．暗褐色土（ローム＋カーボン＋黒色土少量）
H－2
1．黒褐色土（層厚にローム粒混入）
2．暗褐色土（層厚に焼土多量混入）
3．暗黄褐色土（層厚にローム粒＋カーボン少量）
4．暗褐色土（層厚に0.5～1cm大の黄褐色火山灰少量）
5．黒色土（4層より火山灰の量が少ない）
6．暗褐色土（7層にローム粒若干）
7．暗褐色土（7層にローム粒と0.5cm大の火山灰混入）
8．黒褐色土（層厚に黄褐色火山灰をブロック状に混入）
9．黒褐色土（ローム粒若少量）
10．暗褐色土（武蔵色火山灰細粒を多量混入硬質）
11．黒武色土（層厚に武蔵色火山灰をブロック状に多量）
12．黒褐色土（層厚に0.5cm大の黄褐色火山灰混入）
13．暗黄褐色土（ローム粒がブロック状に多量）
69000
630.00

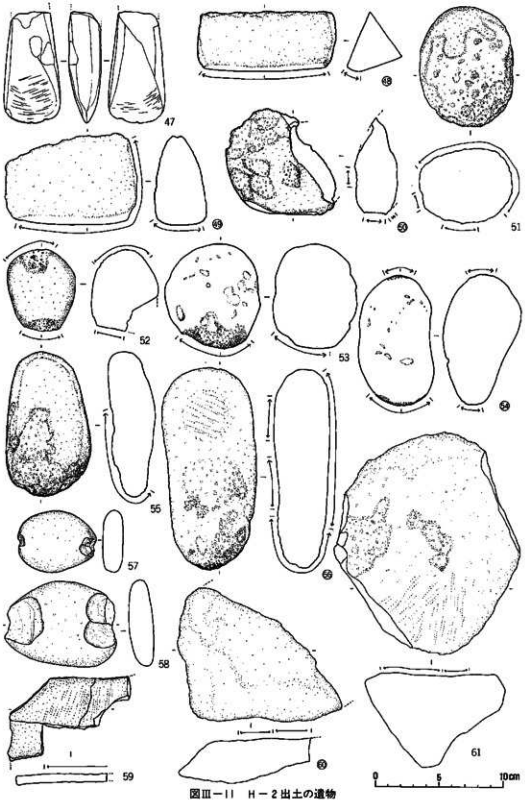
図Ⅲ－8　H－2実測図


①
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
5
10cm

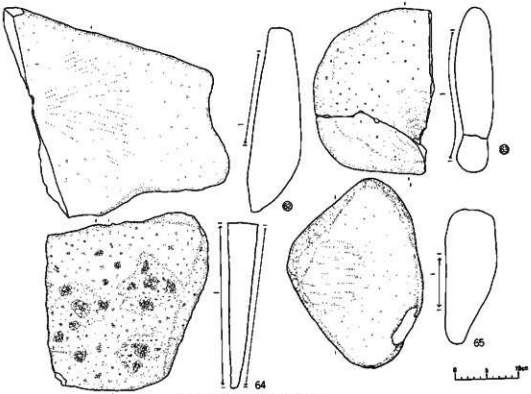
図Ⅲ－9　H－2出土の遺物



図Ⅲ－10　H－2出土の遺物



図Ⅲ－11　H－2出土の遺物



図Ⅲ－12 H－2出土の遺物

表Ⅲ－4 H－2掲載遺物一覧表

番号	名称	分類	層位	重量(g)	材質	写真図版
1	土師	Ⅳa	床			
2	〃	Ⅰa				
3	〃	〃				
4	〃	〃				
5	〃	〃				
6	〃	〃				
7	〃	〃				
8	〃	Ⅱa	覆土			
9	〃	Ⅰb－1	〃			
10	〃	Ⅰb－3	〃			
11	〃	Ⅰb－4	〃			
12	〃	〃	〃			
13	〃	Ⅱa	〃			
14	〃	Ⅲa	〃			
15	〃	〃	〃			
16	〃	〃	〃			
17	〃	Ⅳa	〃			
18	〃	Ⅲa	〃			
19	〃	Ⅳa	〃			
20	〃	Ⅳb	〃			
21	〃	〃	〃			
22	〃	〃	〃			
23	〃	〃	〃			
24	〃	〃	〃			
25	〃	〃	〃			
26	〃	〃	〃			
27	〃	〃	〃			
28	〃	〃	〃			
29	〃	〃	〃			
30	石錘	ⅠD1	〃	1.3	頁岩	8－2－1
31	〃	〃	P-1覆土	2.2	〃	9－2－1
32	〃	〃	床	2.3	粘板頁岩	9－2－2
33	石錘	ⅢB	覆土	(4.8)	頁砂	8－2－3
34	つまみ付ナイフ	ⅢA1b	床直	7.2	〃	9－2－4
35	〃	ⅢA1b	覆土	(11.1)	頁岩	8－2－7
36	扁平石器	ⅢB1	〃	5.4	〃	8－2－9
37	スクレイパー	ⅢD1b	〃	6.8	〃	8－2－10
38	〃	〃	〃	(3.2)	〃	8－2－4
39	〃	〃	〃	12	〃	8－2－6
40	〃	〃	〃	33.6	〃	8－2－12
41	〃	〃	〃	35	〃	8－2－11
42	〃	ⅢD2a	F2溝	(7.8)	〃	8－2－8
43	〃	ⅢD2b	床	22.4	〃	9－2－5
44	〃	〃	〃	(5.8)	粘板岩	9－2－3
45	〃	ⅢD4b	覆土	(1.85)	頁岩	8－2－2
46	〃	〃	〃	(10.9)	粘板岩	8－2－5
47	石斧	ⅣA1b	〃	125	砂岩	8－3－1
48	すり石	ⅦA1	F2溝	275	〃	9－3－2
49	〃	〃	床	459	安山岩	9－3－1
50	たたき石	ⅦC3	〃	(230)	〃	9－3－5
51	〃	ⅦC2	覆土	550	〃	8－3－3
52	〃	ⅦC1	〃	220	頁岩	8－3－2
53	〃	〃	〃	475	粘岩	9－3－6
54	〃	〃	床	420	〃	
55	〃	ⅦC2	覆土	360	安山岩	8－3－6
56	〃	ⅦC3	床直	700	〃	9－3－7
57	石錘	ⅦA1	覆土	537	砂岩	8－3－4
58	〃	〃	〃	150	安山岩	8－3－5
59	砥石	ⅨA2	〃	(38.3)	砂岩	
60	〃	〃	床直	(365)	〃	9－3－4
61	たたき石	ⅦC3	覆土	1660	安山岩	8－3－7
62	石鼎	ⅩA	床	10450	〃	9－4－1
63	〃	〃	〃	4800	〃	9－4－2
64	台石	ⅩB	覆土	50000	〃	
65	石鼎	ⅩA	〃	50300	〃	

2　土壙

検出された土壙は4ヵ所である。いづれも掘られた目的，およびその用途は明らかではない。このうちP－2はⅢ層上位から掘りこまれているが，ほかの3ヵ所の掘りこみ面は，明確ではない。

P－1

位　置　リ－8

規　模　1.09／0.88×0.76／0.68×0.38 m

平面形　長円形

Ⅴ層上面で確認された。壁はほぼ垂直に立ち上がり，壙底はほぼ水平である。径10～25 cmの角礫34個が壙底に置かれた状態で出土した。

P－2

位　置　リ－5

規　模　0.60／0.44×（不明）×0.66 m

平面形　長円形

掘り込み面はⅢ層上面である。西半部が攪乱を受けており，全体の規模は明らかでない。覆土上層より礫が出土している。

P－3

位　置　ト－3

規　模　1.54／1.36×1.40／1.19×0.34 m

平面形　円形

Ⅴ層上面で確認された。覆土には炭化物が混在している。壙底には深さ約8 cmの十文字状の溝が検出された。壙底からわずかに炭化木片が出土した。

P－4

位　置　チ－8

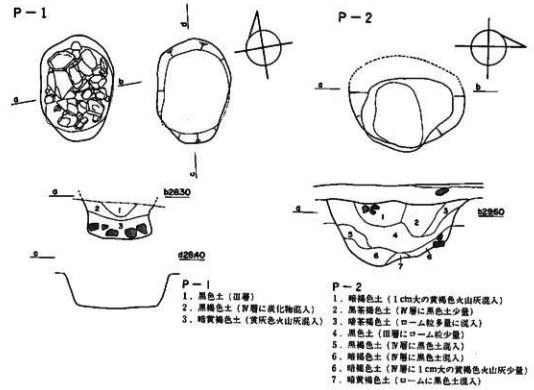
規　模　1.25／0.34×0.94／0.23×0.68 m

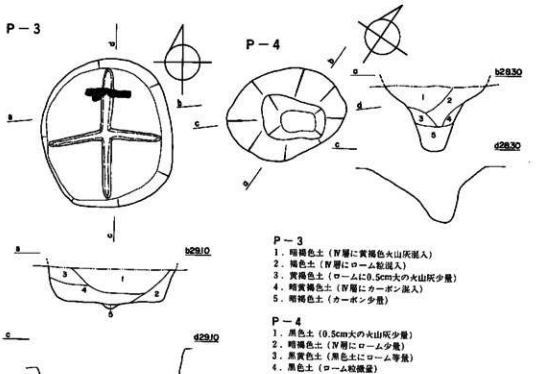
平面形　楕円形

Ⅴ層上面で確認された。プランは楕円形で，断面は漏斗状である。壙口部から石皿2点が出土した。

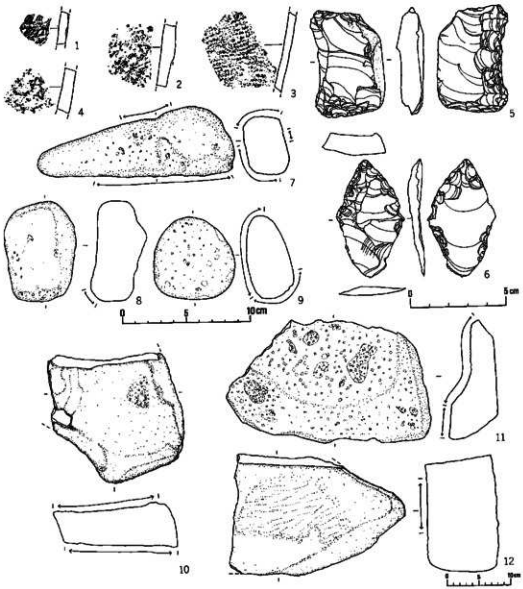
表Ⅲ－5　土壙出土遺物一覧表（P－1～P－4）

遺構名	名　称	分　類	数　量（覆土）	遺構名	名　称	分　類	数　量（覆土）	遺構名	名　称	分　類	数　量（覆土）
P－1	土　器	Ⅰa	1	P－2	土　器	Ⅱa	5	P－2	土　器	Ⅲ	3
	土器計		1		土器計		5		石器計		25
	フレイク	ⅤA2	1		スクレイパー	ⅢD2C	1	P－3	土　器	Ⅳa	13
	〃	3	1		〃	4b	1		土器計		13
	台　石	ⅩB	1		フレイク	ⅤA1	1		フレイク	ⅤA3	11
	不明礫	ⅢA	2		〃	3	16		石器計		11
	〃	Ⅲ	1		たたき石	ⅧC1	2	P－4	石　皿	ⅩA	2
	石器計		6		〃	2	1		石器計		2





図Ⅲ－13　土壙実測図（P－1～P－4）



図Ⅲ－14　土壌出土の遺物（P－1～P－4）

表Ⅲ－6　P－1～P－4掲載遺物一覧表

番号	名称	分類	層位	重量(g)	材質	写真図版	備考
1	土器	Ⅰa	覆土			11－2－1	P－1出土
2	〃	Ⅱa	〃			11－2－2	P－2 〃
3	〃	Ⅳa	〃			11－2－3	P－3 〃
4	〃	Ⅱa	〃			11－2－4	P－2 〃
5	スクレイパー	ⅢD2C	〃	32.8	頁岩	11－2－5	P－2 〃
6	〃	ⅢD4b	〃	8.3	〃	11－2－6	P－2 〃
7	たたき石	ⅦC1	〃	370	安山岩	11－2－7	P－2 〃
8	〃	〃	〃	260	珪質	11－2－8	P－2 〃
9	〃	ⅦC2	〃	190	安山岩	11－2－9	P－2 〃
10	台石	ⅩB	〃	4000	〃	11－2－10	P－1 〃
11	石臼	ⅩA	〃	5000	〃	11－2－11	P－4 〃
12	〃	〃	〃	9000	〃	11－2－12	P－4 〃

3 Tピット

検出されたTピットは11ヵ所である。幅が狭い溝状のものと，細長い長円形のものがある。確認面はⅢ層・Ⅳ層・Ⅴ層に分かれているが，断面の形状・覆土のセクションから判断すると，いずれもⅢ層中に掘り込み面があったものと考えられる。覆土中から遺物が出土しているが，Tピットにともなうものではない。

TP－1

位　置　ヨ－7・タ－7

規　模　3.12／3.00×0.70／0.13×1.34 m

トレンチ調査によって確認した。掘り込み面はⅢ層下位である。

TP－2

位　置　ヲ－5

規　模　2.24／1.99×0.58／0.12×0.76 m

Ⅳ層上面で確認された。検出されたTピットの中でもっとも浅いものである。

TP－3

位　置　ヲ－5・ヲ－6

規　模　1.96（現存）×0.48／0.20×0.54 m

工事道路法面に遺構断面が確認され，西半部が残存していた。掘り込み面はⅢ層中位である。壙底には礫2点があった。

TP－4

位　置　ル－5

規　模　1.45（現存）×0.59／0.23×1.02 m

農道法面に遺構断面が確認され，北半部が残存していた。掘り込み面はⅢ層中位である。

TP－5

位　置　ト－4

規　模　1.58／1.54×0.67／0.28×1.06 m

Ⅳ層上面で確認された。覆土のセクションには，ひとまわり小さなU状の線が見られる。覆土下部から炭化した笹[8]が検出された。

TP－6

位　置　ワ－5

規　模　2.57／2.28×0.53／0.20×1.20 m

Ⅳ層上面でTP－7と重複していることが確認された。覆土を掘り下げたところ，TP－7を切ってつくられていることが判明した。

TP－7

位　置　ワ－5

規　模　3.30／2.77×0.50／0.17×1.63 m

TP－6によって，ほぼ中程が切られている。長さ，深さともに検出されたTピットの中でもっとも規模が大きい。

TP－8

位　置　ヨ－4

規　模　0.90（未掘）×0.30／0.12×1.17 m

範囲確認調査のテストピット内で確認された。西半分が調査区外に続いている。掘り込み面はⅢ層中位である。

TP－9

位　置　ト－3

規　模　2.85／2.45×0.58／0.17×0.98 m

Ⅴ層上面で確認された。壙口上に焼土F－3がある。

TP－10

位　置　ヲ－4・ワ－4

規　模　2.72／2.86×0.58／0.14×0.80 m

Ⅴ層上面で確認された。中央部にある角礫は壙底から約30 cmの高さにある。角礫の下は地山であり，掘り込まれていない。

TP－11

位　置　ヨ－4・ヨ－5

規　模　2.62／2.80×0.65／0.10×0.97 m

Ⅴ層上面で確認された。壁は両端の下部がえぐられたようにつくられている。

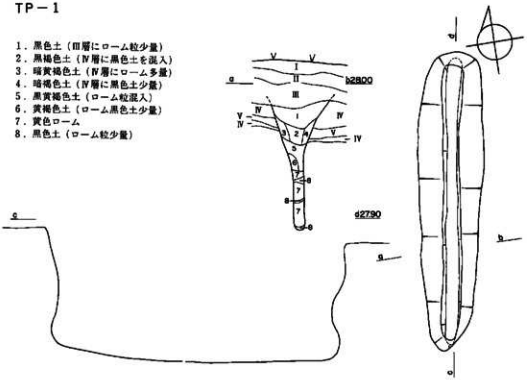
4　焼土

焼土は舌状の微高地の縁辺で5ヵ所が確認された。F－2とF－3は，それぞれTP－10，9の壙口上にあり，これらのピットより新しいことは明らかである。これらの焼土のサンプルについてフローティングを行った結果，F－4からはⅠ群a類に属する土器1点と，フレーク2点が検出された。

注）北海道開拓記念館矢野牧夫氏の教示による。

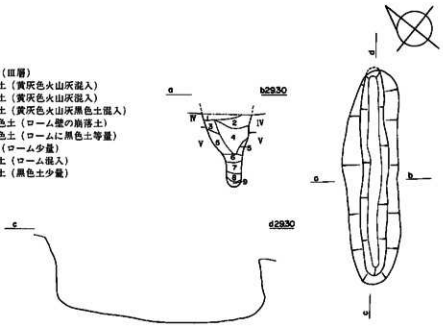
TP－1

1．黒色土（Ⅲ層にローム粒少量）
2．黒褐色土（Ⅳ層に黒色土を混入）
3．暗黄褐色土（Ⅳ層にローム多量）
4．暗褐色土（Ⅳ層に黒色土少量）
5．黒黄褐色土（ローム粒混入）
6．黄褐色土（ローム黒色土少量）
7．黄色ローム
8．黒色土（ローム粒少量）

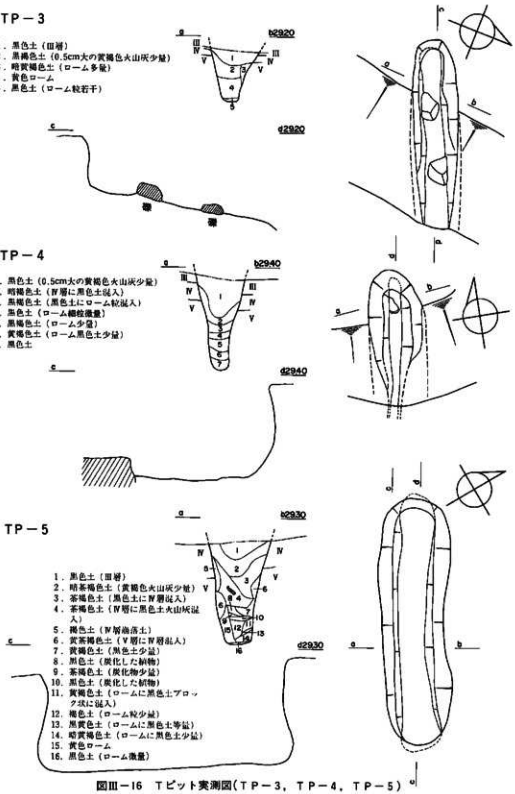


TP－2

1．黒色土（Ⅲ層）
2．黒褐色土（黄灰色火山灰混入）
3．暗褐色土（黄灰色火山灰混入）
4．暗褐色土（黄灰色火山灰黒色土混入）
5．暗黄褐色土（ローム壁の崩落土）
6．黒黄褐色土（ロームに黒色土等量）
7．黒色土（ローム少量）
8．黒褐色土（ローム混入）
9．黄褐色土（黒色土少量）

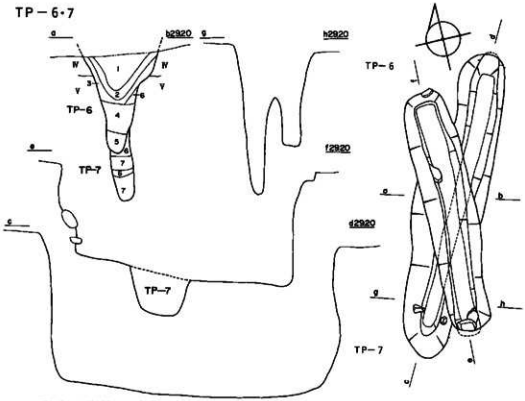


図Ⅲ－15　Ｔピット実測図（ＴＰ－１，ＴＰ－２）



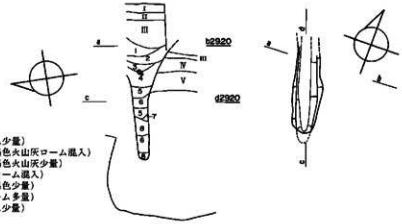
図Ⅲ－16　Ｔピット実測図（ＴＰ－３，ＴＰ－４，ＴＰ－５）

TP－6・7



1．黒褐色土（黄褐色火山灰少量混入）
2．黒褐色土（黄褐色火山灰微量混入）
3．黒褐色土（Ⅱ層より褐色がつよい）
4．黒褐色土（黄褐色火山灰混入）
5．黒褐色土（黒色土多量）
6．黄色ローム（壁崩落）
7．黒色土

TP－8

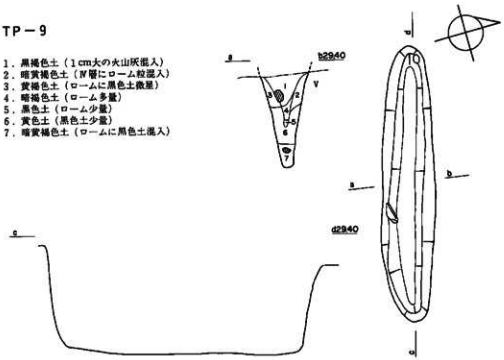


1．黄色ローム
2．黒色土（ローム少量）
3．暗褐色土（黄褐色火山灰ローム混入）
4．黒褐色土（黄褐色火山灰少量）
5．暗黄褐色土（ローム混入）
6．黄色ローム（黒色少量）
7．黄褐色土（ローム多量）
8．黒色土（ローム少量）

図Ⅲ－17　Ｔピット実測図（ＴＰ－6・7，ＴＰ－８）

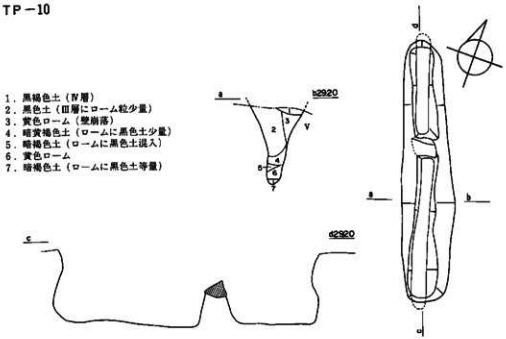
TP－9

1．黒褐色土（1cm大の火山灰混入）
2．暗黄褐色土（Ⅳ層にローム粒混入）
3．黄褐色土（ロームに黒色土微量）
4．暗褐色土（ローム多量）
5．黒色土（ローム少量）
6．黄色土（黒色土少量）
7．暗黄褐色土（ロームに黒色土混入）

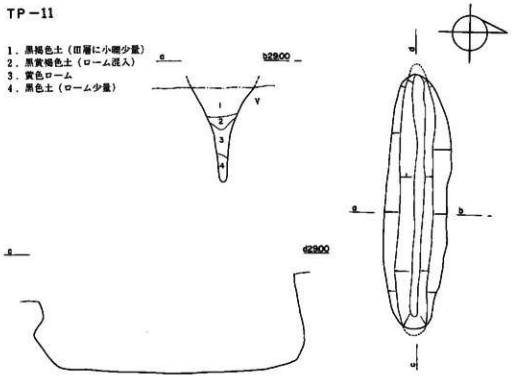


TP－10

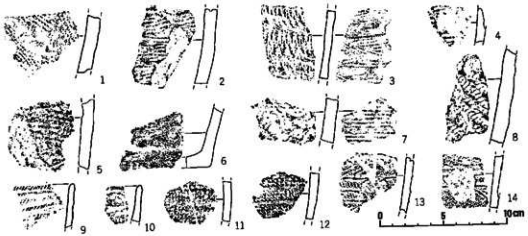
1．黒褐色土（Ⅳ層）
2．黒色土（Ⅲ層にローム粒少量）
3．黄色ローム（壁崩落）
4．暗黄褐色土（ロームに黒色土少量）
5．暗褐色土（ロームに黒色土混入）
6．黄色ローム
7．暗褐色土（ロームに黒色土等量）



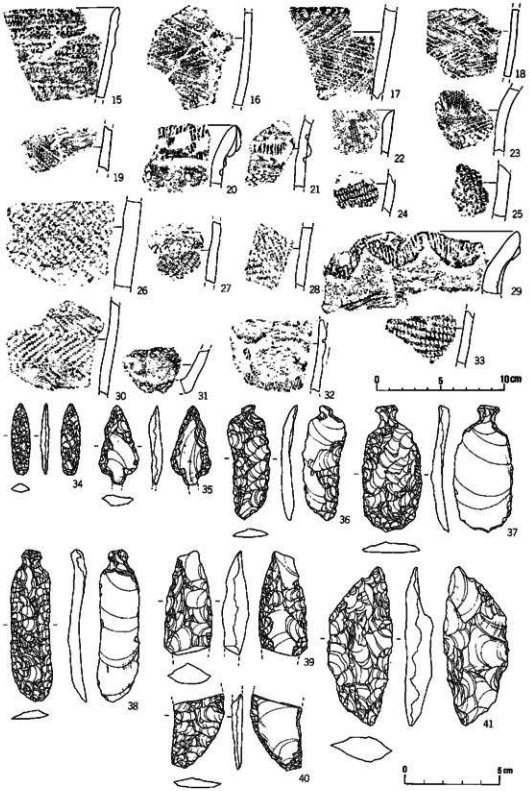
図Ⅲ－18　Tピット実測図（TP－9，TP－10）



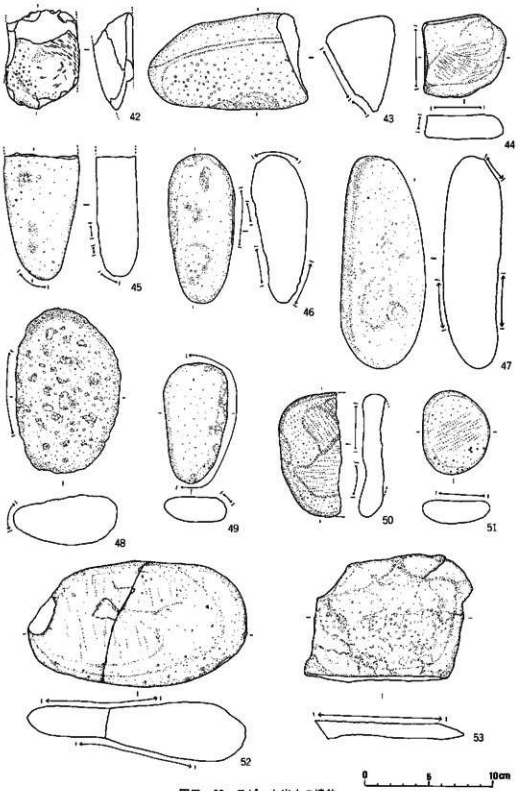
図Ⅲ－19　Ｔピット実測図（ＴＰ－11）



図Ⅲ－20　Ｔピット出土の遺物



図Ⅲ－21　Ｔピット出土の遺物



図Ⅲ－22　Ｔピット出土の遺物

表Ⅲ－7　Ｔピット出土遺物一覧表

遺構名	名　称	分　類	数量	数量
			覆	土
TP－1	石　鏃	ⅠC1		1
	石器計			1
TP－2	土　器	Ⅰb－3	1	
	〃	〃－4	4	
	〃	Ⅲa	5	
	土器計			10
	フレイク	ⅤA2	1	
	〃	〃 3	42	
	原　石	ⅥB2	1	
	不明礫	ⅩA	1	
	〃　礫	Ⅻ	2	
	石器計			47
TP－3	土　器	Ⅰb－3	5	
	〃	Ⅲa	1	
	〃	Ⅳa	5	
	土器計			11
	フレイク	ⅤA3	2	
	石器計			2
TP－4	土　器	Ⅰa	2	
	〃	Ⅰb－3	1	
	〃	Ⅱa	1	
	〃	Ⅲa	2	
	〃	Ⅳa	2	
	土器計			8
	スクレイパー	ⅢD1a	1	
	フレイク	ⅤA2	2	
	〃	〃 3	22	
	石器計			25
TP－5	土　器	Ⅰa	1	
	〃	Ⅲa	8	

遺構名	名　称	分　類	数量	数量
			覆	土
TP－5	土　器	Ⅳa		1
	土器計			10
	つまみ付ナイフ	ⅢA1b		1
	フレイク	ⅤA1		1
	〃	〃 2		1
	〃	〃 3		7
	すり石	ⅥA2b		1
	たたき石	ⅥC3		3
	不明礫	ⅩA		2
	〃　礫	Ⅻ		1
	石器計			17
TP－6	土　器	Ⅰb－4		4
	〃	Ⅲa		2
	土器計			6
	フレイク	ⅤA2		1
	〃	〃 3		13
	コ　ア	ⅤB1		1
	たたき石	ⅥC1		1
	石　皿	ⅩA		2
	〃　礫	Ⅻ		3
	石器計			21
TP－7	土　器	Ⅰb－4		2
	土器計			2
	フレイク	ⅤA2		1
	〃	〃 3		2
	石器計			3
TP－6・7	つまみ付ナイフ	ⅢA1b		1
	フレイク	ⅤA3		2
	石器計			3
TP－8	土　器	Ⅰb－3		9

遺構名	名　称	分　類	数量	数量
			覆	土
TP－8	土器計			9
	フレイク	ⅤA3		3
	石器計			3
TP－9	土　器	Ⅰa		7
	〃	Ⅰb－1		8
	〃	〃－3		1
	〃	〃－4		5
	〃	Ⅲa		3
	土器計			24
	石　鏃	ⅠD1		1
	つまみ付ナイフ	ⅢA1Z		1
	スクレイパー	ⅢD1b		1
	フレイク	ⅤA2		5
	〃	〃 3		10
	石　斧	ⅥA1b		1
	すり石	ⅥA1		1
	たたき石	ⅥC1		1
	石　皿	ⅩA2		1
	〃　礫	Ⅻ		4
	石器計			26
TP－10	土　器	Ⅰb－3		2
	〃	〃－4		28
	〃	Ⅱa		1
	〃	Ⅲa		6
	土器計			37
	つまみ付ナイフ	ⅢA1b		1
	フレイク	ⅤA2		3
	〃	〃 3		9
	砥　石	ⅩA3		1
	〃　礫	Ⅻ		2
	石器計			16

表Ⅲ－8　Ｔピット掲載遺物一覧表

番号	名　称	分　類	層位	重量(g)	材質	備　考
1	土　器	Ⅰa	覆土			TP－9
2	〃	〃	〃			TP－4
3	〃	〃	〃			TP－9
4	〃	〃	〃			TP－5
5	〃	〃	〃			TP－4
6	〃	〃	〃			TP－4
7	〃	〃	〃			TP－10
8	〃	〃	〃			TP－4
9	〃	Ⅰb－3	〃			TP－9
10	〃	〃	〃			TP－10
11	〃	〃	〃			TP－11
12	〃	〃	〃			TP－4
13	〃	〃	〃			TP－3
14	〃	〃	〃			TP－2
15	〃	〃	〃			TP－11
16	〃	Ⅰb－4	〃			TP－10
17	〃	〃	〃			TP－7
18	〃	〃	〃			TP－6
19	〃	〃	〃			TP－2
20	〃	Ⅲa	〃			TP－6
21	〃	〃	〃			TP－10
22	〃	〃	〃			TP－3
23	〃	〃	〃			TP－4
24	〃	〃	〃			TP－4
25	〃	〃	〃			TP－9
26	〃	〃	〃			TP－5
27	〃	〃	〃			TP－2

番号	名　称	分　類	層位	重量(g)	材質	備　考
28	土　器	Ⅲa	覆土			TP－6
29	〃	〃	〃			TP－10
30	〃	〃	〃			TP－10
31	〃	〃	〃			TP－10
32	〃	Ⅳa	〃			TP－3
33	〃	〃	〃			TP－4
34	石　鏃	ⅠC1	〃	1.3	頁　岩	TP－1
35	〃	ⅠD1	〃	(3.8)	〃	TP－9
36	つまみ付ナイフ	ⅢA1b	〃	6.2	〃	TP－5
37	〃	〃	〃	12.0	〃	TP－6・7
38	〃	〃	〃	10.9	〃	TP－10
39	スクレイパー	ⅢD1a	〃	(16.5)	〃	TP－4
40	つまみ付ナイフ	ⅢA1b	〃	(4.8)	〃	TP－9
41	スクレイパー	ⅢD1b	〃	32.8	〃	TP－9
42	石　斧	ⅥA1b	〃	(165)	緑色片岩	TP－9
43	すり石	ⅥA1	〃	(580)	安山岩	TP－9
44	〃	ⅥA2b	〃	90	砂　岩	TP－5
45	たたき石	ⅥC1	〃	(250)	安山岩	TP－6
46	〃	ⅥC3	〃	340	〃	TP－5
47	〃	〃	〃	680	〃	TP－5
48	〃	〃	〃	530	〃	TP－5
49	〃	ⅥC1	〃	130	〃	TP－9
50	砥　石	ⅩA	〃	(79.4)	砂　岩	TP－10
51	〃	〃	〃	100	安山岩	TP－5
52	石　皿	ⅩA	〃	7400	〃	TP－6
53	〃	〃	〃	290000	〃	TP－6

Ⅳ　包含層出土の遺物

包含層からは縄文時代早期から後期の遺物が約47,000点出土した。このうち土器片は約7,000点，石器はフレイク，コア，原石を含めて約40,000点である。土器は早期および中期のものが全体の90%を越える。しかし小破片のため，器形を復原できたものはない。石器の種類には石鏃・槍先類，石錐，つまみ付ナイフ，笧状石器，スクレイパー，石斧，すり石，たたき石（くぼみ石を含む），石錘，砥石，石皿，台石等がある。（遺物の分類についてはⅡ章の6を参照）

1　土器（図Ⅳ－1～7，図版15～29）

出土した約7,000点の土器の分類別の割合は，Ⅰ群（縄文時代早期）48%，Ⅱ群（早期末ないし前期初頭）4%，Ⅲ群（中期）41%，Ⅳ群（後期）7%である。Ⅰ群・Ⅱ群とⅢ群の一部については，拓本あるいは実測図を掲載し，それぞれに説明を加えた。Ⅲ群とⅣ群については，写真を掲載して，説明を加えた。

Ⅰ群

a類（図Ⅳ－1－1～図Ⅳ－5－89，図版15－1～図版17－1）

すべて小破片で，器形を推定することは困難である。土器文様から1～9に細分して，以下に特徴を記述する。

① 無文の土器（1～6）：口縁部がわずかに外反するものが多い。口唇断面は丸形である。

1・2は器厚が薄く器面は内外ともなめらかである。3・4は器厚が厚く，胎土に砂粒を多く含んでいる。5・6は内面に指頭を押しつけた跡があり，凹凸がみとめられる。

② 貝殻腹縁圧痕文が施された土器（7・8・12～14）：胎土に砂粒を含むものが多い。横位・縦位・斜位に貝殻腹縁文が施されている。内面には横位の擦痕がみとめられる。

7は口唇部に絡条体圧痕文が施され，口縁から頸部には逆くの字形に絡条体圧痕文が押捺されている。8は網目状に貝殻腹縁文が施文されている。

③ 爪形文が施された土器（9～11）

9は口唇断面が丸形で爪形文が縦位に施文されている。10・11は2本単位の沈線の左右に斜位の爪形文が連続施文されている。

④ 貝殻腹縁連続波状文が施されている土器（15～21）：貝殻腹縁を縦位に使用し移動させている。内面には横位の貝殻条痕文が施されている。胎土には砂粒が多く含まれている。

15は口唇断面が角形で，器表面はなめらかに整形されており，浅い貝殻条痕文が施されている。16は口縁が肥厚し，わずかに外反する口唇部に縦位の絡条体圧痕文が施されている。口唇部は笧状の工具で平らに整形されている。21は底部の破片であるが，尖底・平底のいずれかは不明である。

⑤ 貝殻腹縁押引き文が施されている土器（23～25・30～32）：口縁は波状で，口唇断面は角

形のものが多い。内面には横走する貝殻条痕文が施されている。胎土には砂粒を多く含んでいるものが多い。

25の口唇上には貝殻腹縁圧痕文が連続施文されている。

⑥ 貝殻条痕文が施されている土器（22・26～29・34～39）：貝殻文土器の中で最も出土量が多い。器表面の条痕は横走するものが多い。内面にも貝殻条痕が施されているものがある。口唇断面は丸形のものと角形のものがあり，後者は口縁部がわずかに外反するものが多い。大部分のものが胎土に砂粒を多く含んでいる。

22は口縁部に貝殻腹縁圧痕文が施されている。26は口唇上に貝殻腹縁圧痕文がある。29は波状口縁で，わずかに外反している。

⑦ 貝殻腹縁圧痕文と波状沈線が施されている土器（40～44）：

44の口唇断面は角形で，口唇上には斜位に，口縁部には縦位に貝殻腹縁圧痕が連続施文されている。胎土には砂粒を多く含んでいる。

⑧ 沈線と刺突により文様が構成されている土器(45～75)：文様構成には基本的に次の3種がある。沈線のみ（45～48・50～61），沈線と短刻線（62～64），沈線と刺突文（49・65～75）。内面はなめらかに整形されており，炭化物が付着しているものが多い。胎土には細かい砂粒をわずかに含んでいる。

45は波状口縁。口唇側縁に小さな刺突がめぐっている。46・47も同様に口唇側縁に刻文が施文されている。48の口唇断面は角形。口縁部はわずかに外反し，器表面には刺突文と細い沈線が施されている。49は外反する波状口縁。口唇側縁には刻文が施されている。横走する沈線の間に連続刺突文がめぐっている。表裏より穿たれた補修孔がある。67は縄端による刺突文。70・71は半截竹管状工具による刺突文がある。72・73は同一個体である。底部には張り出しがあり，刻文が刻まれている。

⑨ 隆帯（貼付）文，絡条体圧痕文，刺突文，沈線文が施文されている土器（76～89）：隆帯上に刻文があるもの（76・79・80・82・84・85），隆帯上に絡条体圧痕文が施されているもの（77・78・81・86）がある。胎土には細かい砂粒を少量含んでいるが緻密である。

76は口唇側縁部に刻文がめぐっている。78は口縁部がわずかに外反し，口唇には刻文が施されている。79・80・89は同一個体である。やや外反するゆるい波状口縁にそって波状の絡条体圧痕文が施文されている。隆帯直下にも絡条体圧痕文がある。胴部には細い沈線が縦位・横位に施文され，この下には刺突文がある。底部は無文で外側に張り出しをもつ。83は平らな繊維質のものを原体として使用した絡条体圧痕文が施されている。84・85は同一個体。ほかのものと比べて隆帯が太い。胴部には網目状の細い沈線が施されている。

以上のⅠ群a類の土器をほかの遺跡の出土資料と比較すると次のようになろう。②・③は，縄文がみとめられるものは出土していないが，ノダップⅠ式に類似するものと考えられる。類例には函館空港第6地点（吉崎　1968），白坂遺跡第6・7地点（久保他　1983）の資料がある。

④・⑤は吹切沢式系統の土器である。類例には住吉町下層B4～B9（大場他　1955）および

函館空港中野Ｂ遺跡Ⅰ群などの資料がある。⑥は大洞遺跡出土の資料に類似する沈線文および貝殻条痕文が施された平底土器と考えられる。ほかの類例としては，白坂第８地点の資料がある。⑦は住吉町下層Ａ１～Ａ４（函館市梁川町遺跡），鳴川遺跡（高橋　1966）の資料に類似するものである。ほかの類例には函館空港中野Ｂ遺跡出土の資料がある。⑧・⑨はアルトリ式土器系統の薄手の平底土器群と考えられる。道南地方では住吉町式土器（梁川町式上層）４類とされているものに類似している。これはしばしばムシリⅠ式・早稲田３類と対比される。

このほかの類例には函館空港中野遺跡・白坂遺跡第８地点・臼尻Ｂ遺跡（小笠原　1981）出土の資料などがある。

ｂ類（図Ⅳ－５－90～図Ⅳ－７－161・図版 17－２～図版 19）

縄文，絡条体圧痕文，組紐圧痕文，貼付文，隆起線文などが施文された土器群。

ｂ－１類（90～100）：短縄文が縦位に施されているもの（90・92～94・100），組紐圧痕文が施されているもの（93・95～98），絡条体圧痕文が施されているもの（99）がある。

90 の口唇断面は丸形で，口縁部はわずかに外反している。91 は口唇断面が隅丸の角形で，口唇上にも組紐圧痕文がめぐっている。99 は細長い板状のものを軸として用いたものと考えられる。100 は底部破片である。

以上のⅠ群ｂ－１類は東釧路Ⅲ式土器に相当するものである。

ｂ－２類（101～107）：細い貼付帯上に縄の圧痕が施されている土器。

101・102 は組紐圧痕文，103 は絡条体圧痕文，104 は短縄文，105～107 は撚りが異なる縄文がそれぞれ施文されている。これらはコツタロ式土器に相当するものである。

ｂ－３類（108～128・159）：口唇断面は鋭角をなす。微隆起線文が施され，文様がこの上にまでおよんで施文されている例が多い。

108～117・121・123・124 は短縄文，118・119 は絡条体圧痕文，120・122・125・126 は斜行縄文，127 は綾絡文がそれぞれ施文されている。128 は撚糸の側面圧痕により文様が構成されている。これらは中茶路式土器に相当するものである。

ｂ－４類（129～158・160・161）：口縁部から口唇にかけて器厚が薄くなり，口唇断面は角形をなすものが多い。口縁はゆるい波状を呈するものが多数ある。魚骨回転文土器もこの類に含めた。

132・134・137～139 は撚糸文が羽状に施文されたもの。133・135・136 は撚糸の側面圧痕文が口縁にめぐっている。140・142 は短縄文，145～147・149 は絡条体圧痕文，141・143・144・148 はループ状の縄端圧痕，151～158 は綾絡文，130・131 は魚骨回転文がそれぞれ施文されている。150 は２軸の絡条体が用いられている。154 は綾絡文のみが施文され，口縁部に豆瘤状の突起が貼付されている。130・131 はニシンあるいはマイワシの類の脊椎骨を回転させたものであろう。160・161 は底部である。これらのｂ－４類の土器は東釧路Ⅳ式土器に相当するものである。

以上のⅠ群ｂ類土器は函館空港中野遺跡，元和遺跡，オカシナイ遺跡，梁川町遺跡，聶石遺

跡などに類例がある。遺構にともなって出土した例が少なくない。しかしb－1・b－2類に相当する土器は各遺跡とも出土量が少ないようである。

II群a類（図IV－8－161～183，図版20－1）

尖底と平底の2種類があるものと思われるが，小破片のみで識別は困難である。尖底とわかる底部が1点だけ出土した。胎土に繊維を含む土器が多い。

163・167・168・171～180は内面に縄文が施されている。181・182は貝殻条痕文が内面にある。165は口縁部に短縄文と撚糸の側面圧痕文が施され，指頭の圧痕と思われる円形の文様がある。174・175・179は撚りの異なる原体を用いて羽状の文様を描いている。171・172は組紐圧痕文が施されている。173は組紐回転文。183は底部，繊維の痕跡がある。丸底に近い尖底土器と考えられる。

以上のII群a類とした土器は早稲田5・6類，春日町式に相当する土器を一括したものである。類似する資料としては，梁川町遺跡3群1類A・B類、春日町遺跡3群1類・2類，建石遺跡3群，長七谷地2号遺跡の出土土器などがある。

III群a類（図IV－7－1～5，図版22－1－1～18・図版22－2－19～40）

サイベ沢V～VII式土器に属する土器が出土している。これは円筒上層b式からd式に相当するものである。文様は貼付文，撚糸圧痕文，馬蹄形圧痕文，半截竹管あるいは棒状工具による刺突文などが複合施文されたものである。

図IV－7－1～4，図版22－1－1～12・14・15～17，図版22－2－6・8～22は，サイベ沢V式に相当するもの。図版22－1－18，図版22－2－3・5・7はサイベ沢VI式に相当するものである。図版22－2－13～16は，サイベ沢VII式に相当するものである。図版22－2－18～20は胴部破片である。18には綾絡文がある。21・22は底部である。図IV－7－3は深鉢で底部が三叉になっている。図IV－7－4は脚の一部で、円筒土器上層式が盛行したb式のものである。

IV群a類（図版23－1～23）

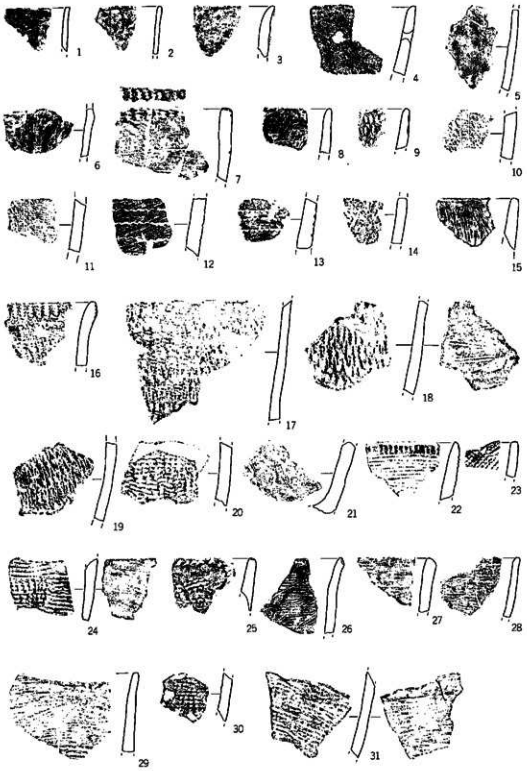
1は口縁部の貼付帯上に撚糸の圧痕文が施文されたもので涌元式土器（千代　1972）に類似する資料である。9～13は口縁に貼付帯がめぐり，平行沈線・網目状文が施された土器で，鳥崎遺跡出土の資料に類似している。16～23は曲線をなす沈線文で文様が構成されているもので入江式土器あるいは鳥崎遺跡出土の資料に類似するものである。

IV群b類（図版23－24～38）

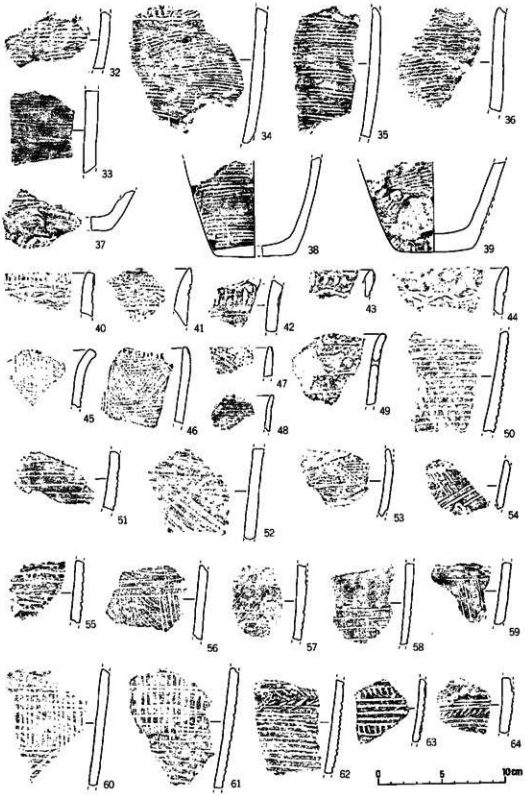
24・25は沈線で区画された内側に磨消縄文が施されており，手稲式土器に相当するものである。

有孔円盤（図IV－7－190～192，図版17－1－17～19）

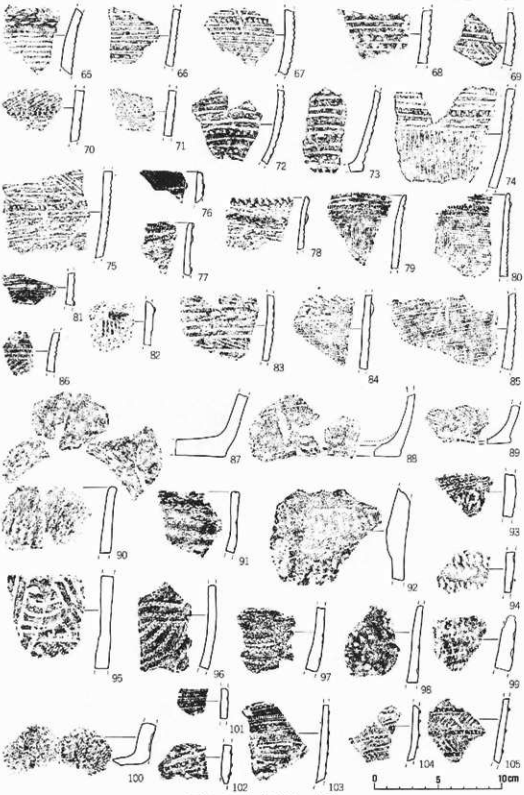
3点ともI群a類の土器片を使用し，表裏から穿孔している。



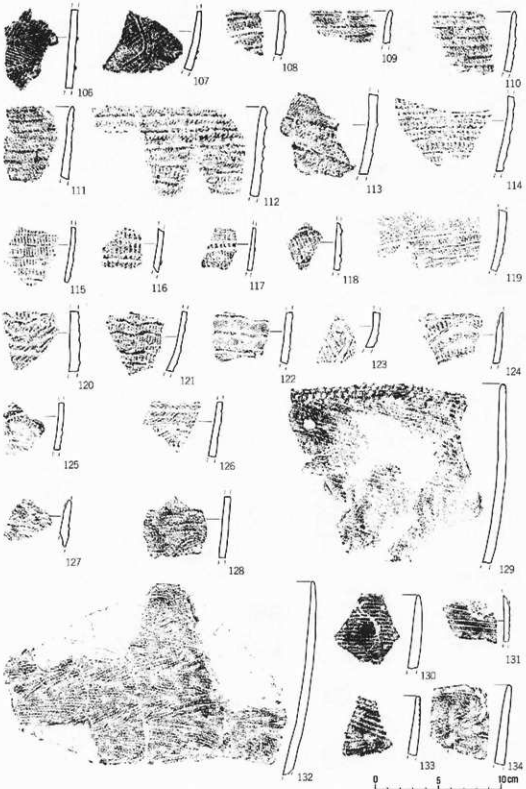
図Ⅳ－1　包含層出土の土器



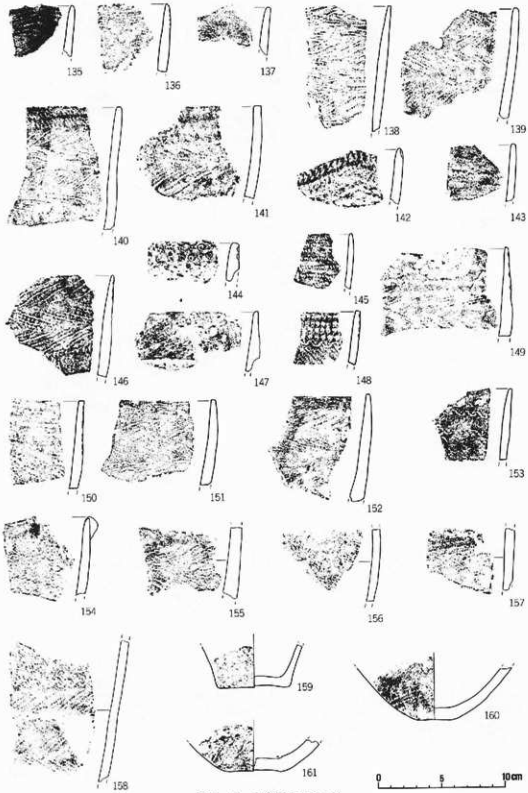
図Ⅳ－2　包含層出土の土器



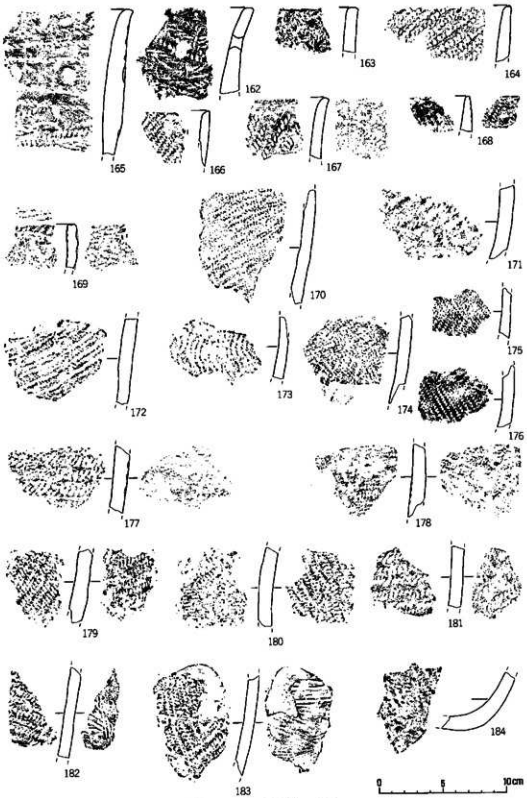
図Ⅳ－3　包含層出土の土器



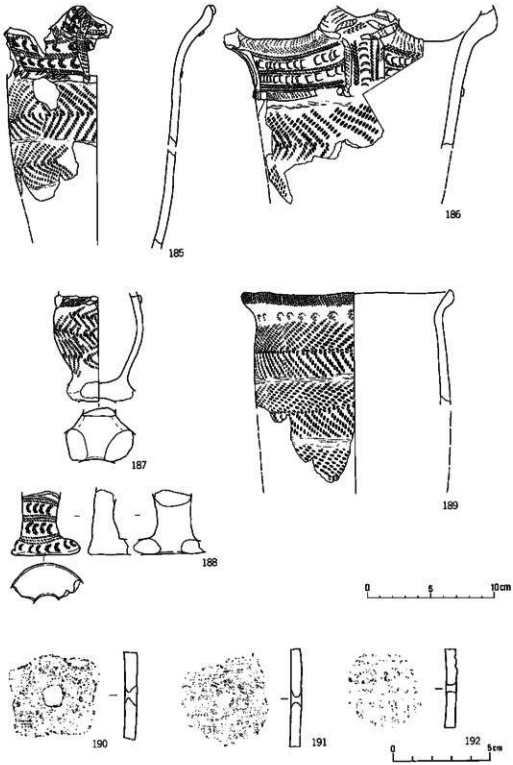
図Ⅳ－4　包含層出土の土器



図Ⅳ－5　包含層出土の土器



図Ⅳ－6　包含層出土の土器



図Ⅳ－7　包含層出土の土器・有孔円盤

表Ⅳ－1　包含層掲載土器一覧表

掲図番号	分類	発掘区	写真図版	備考
図Ⅳ－1－ 1	Ⅰa	チ－4－7	15－1－1	
2	〃	ヲ－5－11	15－1－2	
3	〃	リ－5	15－1－3	
4	〃	ヘ－4－16	15－1－4	
5	〃	ヨ－4－10	15－1－5	
6	〃	ル－7－12	15－1－6	
7	〃	ヘ－10－4	17－1－1	
8	〃	ヌ－9	19－1－2	
9	〃	ヲ－5－9	16－1－23	
10	〃	ヲ－4－13	16－1－24	
11	〃	リ－8－11	16－1－25	
12	〃	ル－8－12	15－1－9	
13	〃	ト－8－4	15－1－7	
14	〃	ト－8－7	15－1－8	
15	〃	ﾃ-ﾗ-13－16	15－1－10	
16	〃	ト－4	17－1－2	
17	〃	ト－3－10	15－1－14	ト－3－13 ト－3－14接合
18	〃	ト－3－8	15－1－12	
19	〃		15－1－11	
20	〃			
21	〃	ト－4－11	15－1－13	
22	〃	リ－5－3	15－1－22	
23	〃	チ－9－12	15－1－15	
24	〃	リ－9－11	15－1－17	
25	〃	チ－9－12	15－1－16	
26	〃	ホ－7	15－1－23	
27	〃	ヲ－9	15－1－24	
28	〃	ヲ－9－8	15－1－25	
29	〃	ヘ－3－14	15－1－26	ヘ－3－15接合
30	〃	ヲ－9	15－1－18	
31	〃	カ－8－16	15－1－20	
図Ⅳ－2－ 32	〃		15－1－19	
33	〃	ワ－8－5	15－1－28	
34	〃	ヘ－7－15	15－1－29	
35	〃	ヘ－9－9	15－1－27	
36	〃	リ－9－6	16－1－7	
37	〃	ヲ－8－7	15－1－32	底部
38	〃	ヘ－9－6	15－1－30	
39	〃	ヘ－4－11	15－1－31	
40	〃	ヘ－8－3	16－1－1	
41	〃	ヲ－7－12	16－1－2	
42	〃	ワ－8－1	16－1－3	
43	〃	ヲ－8－10	16－1－4	
44	〃	ル－9－8	16－1－5	ル－8－12接合
45	〃	チ－5	16－1－14	注面
46	〃	ホ－4－8	16－1－15	
47	〃	ヌ－5	16－1－6	注面
48	〃	ﾃ－7－13	16－1－32	
49	〃	ル－7－2	16－1－29	
50	〃		16－1－8	

掲図番号	分類	発掘区	写真図版	備考
図Ⅳ－2－ 51	Ⅰa	ヘ－4－15	16－1－10	
52	〃	チ－4－8	16－1－9	
53	〃	ホ－8－12	16－1－13	
54	〃	ホ－8－8	16－1－11	
55	〃	リ－4－15	16－1－12	
56	〃	リ－4－12	16－1－18	
57	〃	ヲ－5－10	16－1－19	
58	〃	カ－4－12	16－1－21	
59	〃	チ－7－15	16－1－20	
60	〃	リ－5－3	16－1－16	
61	〃	ヘ－4－1	16－1－17	ホ－5－3接合
62	〃	ヲ－7－13	16－1－31	
63	〃	ヨ－4－10	16－1－27	
64	〃	カ－5－9	16－1－28	
図Ⅳ－3－ 65	〃	ヲ－7－11	16－1－26	
66	〃	ヲ－8－13	16－1－33	
67	〃	カ－4	16－1－30	
68	〃	ワ－8－11	16－1－34	
69	〃	カ－9	16－1－35	
70	〃	ワ－9－10	16－1－36	
71	〃	ヲ－9－12	16－1－37	
72	〃	ヨ－5－7	16－1－38	
73	〃	〃	16－1－39	
74	〃	リ－4－14	16－1－40	
75	〃	ヨ－4－10	16－1－41	
76	〃	ル－8－16	17－1－6	
77	〃	ヲ－7－11	17－1－8	
78	〃	リ－7－16	17－1－9	
79	〃	ヲ－9－8	17－1－10	
80	〃	〃	17－1－11	
81	〃	ヨ－5－12	17－1－7	トレンチAL
82	〃	ヨ－4－7	17－1－5	
83	〃	ル－8－3	17－1－3	
84	〃	ル－5－2	17－1－13	
85	〃	チ－4－1	17－1－14	チ－4－7接合
86	〃	ヘ－4－4	17－1－4	注面
87	〃	ル－4－7	17－1－15	
88	〃	ﾃ-ﾗ-12－16	17－1－16	
89	〃	ヲ－7－10	17－1－12	
90	Ⅰb－1	リ－5－3	17－2－1	
91	〃	ル－5	17－2－5	
92	〃	カ－8－6	17－2－2	
93	〃	ト－9	17－2－3	
94	〃	チ－5－3	17－2－4	
95	〃	ヲ－7－12	17－2－9	
96	〃	ワ－8－2	17－2－7	
97	〃	ヲ－8－3	17－2－6	
98	〃	ワ－7－14	17－2－10	
99	〃	ヌ－8－8	17－2－13	
100	〃	ワ－9－11	17－2－11	

検図番号	分　類	発掘区	写真図版	備　　考
図W－3－101	Ⅰb－2	ヨ－8－4	17－2－20	トレンチAR
102	〃	ヨ－7－14	17－2－19	
103	〃	カ－4－6	17－2－21	
104	〃	タ－7－12	17－2－18	
105	〃	ト－4－7	17－2－16	
図W－4－106	〃	カ－7－15	17－2－12	
107	〃	カ－8－4	17－2－17	
108	Ⅰb－3	カ－9－2	18－1－1	
109	〃	ヨ－9－1	18－1－2	ヨ－4－15検合
110	〃	ヨ－5	18－1－3	ヨ－4－10検合
111	〃	ヨ－4－13	18－1－4	
112	〃	ヨ－4－10	18－1－5	ヨ－4－13 カ－5－3検合
113	〃	タ－4－6	18－1－6	
114	〃	チ－4	18－1－7	タ－5－5検合
115	〃	ヲ－4－14	18－1－12	
116	〃	〃	18－1－8	
117	〃	ヲ－4－10	18－1－9	
118	〃	ヲ－5－15	18－1－10	
119	〃	タ－4－6	18－1－11	
120	〃	ホ－3－7	18－1－16	
121	〃	カ－4－12	18－1－13	
122	〃	タ－5－6	18－1－14	
123	〃	ホ－3－7	18－1－13	
124	〃	ホ－8－4	18－1－18	
125	〃	ホ－3－7	18－1－19	
126	〃	ヨ－5－4	18－1－20	
127	〃		18－1－21	トレンチAL
128	〃	カ－8－4	17－2－8	
129	Ⅰb－4	タ－4－14	18－2－1	
130	〃	タ－5－5	18－3－1	
131	〃	ワ－8	18－3－2	
132	〃	ヨ－8－13	18－2－2	ワ-11 ワ-9 チ-1 ワ-11 ワ-9 ヲ-11 検合
133	〃	ヨ－7－9	19－1－1	
134	〃	カ－8－13	19－1－3	
135	〃	ヨ－7－7	19－1－4	
図W－5－136	〃	カ－9	19－1－5	
137	〃	B－4	19－1－6	
138	〃	ホ－9	19－1－7	テストピット
139	〃	ワ－8－16	19－1－8	
140	〃	ヨ－5－1	19－1－11	トレンチBR
141	〃	ヨ－8－15	19－1－12	
142	〃	タ－9	19－1－9	
143	〃	タ－4－3	19－1－10	
144	〃	チ－4－7	19－1－14	
145	〃	カ－7－16	19－1－16	
146	〃	カ－7－16	19－1－13	
147	〃	カ－9－2	19－1－15	カ－9－3検合
148	〃	ワ－7－13	19－1－17	
149	〃	ヨ－8－13	19－1－18	
150	〃	オ－5－7	19－1－19	

検図番号	分　類	発掘区	写真図版	備　　考
図W－5－151	Ⅰb－4	カ－9－7	19－1－20	
152	〃	ワ－8－4	19－1－21	ワ－8－4検合 トレンチBR
153	〃	カ－8－8	19－1－22	
154	〃	カ－4－8	19－1－23	
155	〃	ワ－9－4	19－1－24	トレンチBR
156	〃	カ－5－13	19－1－25	
157	〃	カ－7－13	19－1－26	
158	〃	ワ－7－19	19－1－27	ワ－7－15 ワ－7－16検合
159	〃	ト－9－16	19－1－28	
160	〃	ヨ－8－19	19－1－29	
161	〃	ホ－8－16	19－1－30	
図W－6－162	Ⅱa	ル－8－16	20－1－2	
163	〃	ホ－5	20－1－5	法面
164	〃	カ－9－12	20－1－4	ヨ－7－14検合
165	〃	ル－5－8	20－1－1	
166	〃	ワ－9－6	20－1－3	
167	〃	リ－5－6	20－1－6	
168	〃		20－1－13	
169	〃	タ－8－7	20－1－12	
170	〃	タ－7－15	20－1－9	
171	〃		20－1－7	
172	〃	ヘ－3－8	20－1－19	
173	〃	ル－5	20－1－8	法面
174	〃	タ－7－12	20－1－11	
175	〃	タ－8－2	17－2－15	
176	〃	タ－5－7	17－2－14	
177	〃	タ－8－11	20－1－14	
178	〃	タ－9－3	20－1－18	
179	〃	ワ－9－7	20－1－16	
180	〃	〃	20－1－15	
181	〃	タ－8－4	20－1－17	
182	〃	ト－8－6	20－1－20	
183	〃	リ－7－16	20－1－19	
184	〃	タ－7－12	20－1－21	
185	Ⅲa	タ－4－14	21－3	
186	〃	ヨ－4－5	21－5	
187	〃	ヌ－9－5	21－2	
188	〃	ヘ－4－3	21－1	
189	〃	リ－5－7	21－4	
190	Ⅰa	オ－9－3	17－1－17	
191	Ⅰa	B－3	17－1－18	テストピット
192	Ⅰa	タ－4－7	17－1－19	

表Ⅵ－2　包含層写真掲載土器一覧表

写真図版	番号	分類	発掘区	備考	写真図版	番号	分類	発掘区	備考
22－1	1	Ⅲa	チ－9－11		22－2	40	Ⅲa	チ－4－10	
〃	2	〃	へ－4－4		23－1	1	Ⅳa	カ－5	
〃	3	〃	ヲ－4－11		〃	2	〃	へ－4－7	
〃	4	〃	カ－5－2		〃	3	〃	ル－5－8	
〃	5	〃	へ－3－15		〃	4	〃	ワ－8－3	
〃	6	〃	ト－3－9	へ－3－12接合	〃	5	〃	タ－4－6	タ－4－6接合
〃	7	〃	カ－4－8		〃	6	〃		
〃	8	〃	ヨ－4－11		〃	7	〃	ワ－5－12	トレンチBR
〃	9	〃	リ－9－10	ヌ－9－13接合	〃	8	〃	ワ－9－13	
〃	10	〃	カ－4－12		〃	9	〃	タ－8－10	
〃	11	〃	ヨ－5－6		〃	10	〃	ル－5	法面
〃	12	〃	へ－3－2	へ－3－11接合	〃	11	〃	カ－4－9	
〃	13	〃	へ－4－4		〃	12	〃	ル－4－3	
〃	14	〃	リ－8－4		〃	13	〃	チ－8－5	
〃	15	〃	ル－9－11		〃	14	〃		
〃	16	〃	B－3	テストピット	〃	15	〃	カ－8－3	
〃	17	〃	へ－5－3		〃	16	〃	へ－3－16	
〃	18	〃	チ－5－11		〃	17	〃	ル－5－6	
22－2	19	〃	へ－7－9	トレンチCR	〃	18	〃	ル－4－10	
〃	20	〃	カ－4－11		〃	19	〃	リ－4－6	
〃	21	〃	ト－4－4	ト－4－5 ト－4－1 接合	〃	20	〃	チ－8－6	
〃	22	〃	チ－5－6	チ－4－13接合	〃	21	〃	ヲ－5－4	オ－5－3接合
〃	23	〃	ヲ－4－15		〃	22	〃	ル－4－14	
〃	24	〃	ヌ－8－1		〃	23	〃	ル－4－16	
〃	25	〃	カ－4－11		〃	24	〃	ト－8－4	
〃	26	〃	ル－8－13		〃	25	〃	ル－5－4	
〃	27	〃	へ－3－7		〃	26	〃	ヨ－4－13	ヨ－4－14接合
〃	28	〃	チ－4－14		〃	27	〃	カ－5－16	
〃	29	〃	ト－4－8		〃	28	〃	ル－4－16	
〃	30	〃	チ－4－14		23－1	29	〃	チ－8－2	
〃	31	〃	へ－3－7		〃	30	〃	ホ－7－6	
〃	32	〃	ヲ－4－13		〃	31	〃	へ－3－1	
〃	33	〃			〃	32	〃	カ－8－9	
〃	34	〃	へ－3－5		〃	33	〃	ル－5－7	
〃	35	〃	ヌ－4－5	ヌ－4－2接合	〃	34	〃	ル－4－7	
〃	36	〃	B－3	テストピット	〃	35	〃	ル－4－11	
〃	37	〃	チ－5－1		〃	36	〃		
〃	38	〃			〃	37	〃	ヲ－4－9	
〃	39	〃			〃	38	〃	カ－5－8	

2 石器（図Ⅳ－8～25，表Ⅳ－2，図版30～42）

剥片石器には，石鏃・槍先類，石錐，つまみ付ナイフ，篦状石器，スクレイパー，不定形剥片石器類などの種類がある。このほかにフレイク，コア，原石（剥片石器の素材）なども多数出土しており，その数は約28,000点である。これらの石器のうち，定形的なもの（Ⅰ～Ⅲ群に分類されるもの）は約1,000点である。

礫石器には，石斧，すり石，たたき石（くぼみ石を含む），石錘，砥石，石皿，台石，不定形礫石器などがあり，原石（礫石器の素材），礫を含めると約12,000点が出土した。そのうち，定形的なもの（Ⅵ～Ⅹ群に分類されるもの）は約500点である。

器種別ではスクレイパーが全体の40%を占める。ついで石鏃，つまみ付ナイフの順である。すり石，たたき石もほぼこれと同数出土している。石質は，剥片石器では90%以上が頁岩および珪質頁岩製であり，黒曜石はごくわずかである。黒曜石製のものは，調整加工が比較的に入念である。礫石器では安山岩製のものが大多数を占めるが，器種によりこれ以外の石材も使用されている。出土層位はⅢ層下位～Ⅳ層が多く，縄文時代早期の石器の占める割合が高いものと考えられる。

ここでは，形態・調整・加工などから石器を分類した。以下器種別に代表的なものを図示し，その概略を述べる。（分類記号は第Ⅱ章4，出土地区・計測値・石質等は表Ⅳ－3を参照）

石鏃・槍先類（図Ⅳ－8－1～図Ⅳ－11－99，図版30）

163点出土した。このうち99点を掲載した。

ＩＡ１：1～5は三角形で基部が平らなものである。2・3・5は裏面に一次剥離面をのこしている。4・5はやや狭長である。

ＩＡ２：8～14は三角形で基部が内湾している。8～10は基部が深く内湾しており，尖頭部側縁は直線的である。14は表裏面に一次剥離面をのこしている。

ＩＢ：6・15～18・45は五角形のものである。15は基部の両側縁が，リタッチを加えずに折損したままの状態であることから，何かの理由でこのように再利用したものと思われる。17は表裏面に一次剥離面をのこしている。

ＩＣ１：19～40・88～93は柳葉形のものである。89～93は槍先である。19・21～24は基部が内湾している。89は基部が平らである。21～24・32・34～38・40は入念な二次加工が施されており比較的厚さは薄い。20・25～31・33・39は表裏面に一次剥離面をのこしている。88・89・91はやや粗い二次加工が施されており，表裏面に一次剥離面・原石面をこのしている。93の左右の側縁は，非対称であり，ナイフとしての機能も考えられる。

ＩＣ２：41～43・45～48・94・99はひし形のものである。94・99は槍先である。43・48は狭長で厚さも薄い。42・43は表裏に一次剥離面をのこしている。94は尖頭部側縁がややふくらんでいる。

ＩＣ３：44・49は基部が丸く，尖頭部側縁がふくらむものである。44は表面に原石面，49は表裏に一次剥離面をのこしている。

ＩＤ１：72・96～98は最大幅が鏃長の中央より上にあるものである。96～98は槍先である。72は茎部にアスファルト様のものが付着し，それが剥れた部分は脱色されたように白っぽい。95・96は入念な二次加工が施されており，かえしがほとんどなく尖頭部から茎部末端へとゆるやかにすぼまる。

ＩＤ２：50～71・73～87は有茎で最大幅が鏃長の中央より下にあるものである。二次加工が比較的粗雑で表裏に原石面・一次剥離面をのこしているものが多く，厚さもやや厚いものが多い。50～71は尖頭部から茎部へのかえしがゆるやかな曲線をえがくものである。73～87は尖頭部から茎部へのかえしが屈曲するもので，厚さの薄いものが多い。73は尖頭部が三角形で，側縁がやや外反している。74・75は二次加工が粗雑で尖頭部が丸い。67・87の茎部にはアスファルト様のものの付着がみとめられる。53～55・57～60・62～63・69・76・78・80は表裏に原石面，一次剥離面をのこしている。

石質は３・11・14・32・36・73の６点が黒曜石製である。

石錐（図Ⅳ－12－100～図版Ⅳ－13－120，図版31－１）

35点出土した。ここでは，このうち21点を掲載した。

ⅡＡ１：100・101は棒状のものである。101は原石面，一次剥離面をのこしている。

ⅡＡ２：102～108はつまみ部があるものである。すべて一次剥離面をのこしている。104は尖頭部の加工が入念で，尖頭の磨耗が著しい。

ⅡＢ：111～114・117・119は逆三角状の剥片の一端を尖端として用いている。111・117・119の尖端は著しく磨耗している。

ⅡＣ：115・116・118は石鏃・楮先の形態をもち，尖頭の磨耗が著しいものである。115は表裏に原石面，一次剥離面をのこしている。

ⅡＤ：109・110・120は刺突部をつくり出したものである。109・110は上下に刺突部がある。120はつまみ付ナイフのつまみ部に再加工を施して刺突部としたものである。

つまみ付ナイフ（図Ⅳ－13－121～図Ⅳ－17－176，図版31－２～図版33－１）

158点出土した。ここでは56点を掲載した。縦長剥片のもの（ⅢＡ１）と横長剥片のもの（ⅢＡ２）とに分けた。縦長剥片のものではⅢＡ１ｂが多く全体の65.8％にあたる。横長剥片のものは図示した３点のみである。縦長剥片では，裏面右側縁に剥離調整を施したものがほとんどである。

ⅢＡ１ａ：160・168・169・172は二次加工が片面の周縁に施されているものである。つまみ部の幅が広く，大型のものが多い。剥片そのものの形を大きく変えずに刃部としている。

ⅢＡ１ｂ：122～138・142～152・154～158・162～167・176は二次加工が片面の全面に施されているものである。この類は刃部の形態，つまみ部，基部，末端部，断面の形態によりさらに５つに分類される。①切り出しナイフ状の幅が広い末端部をもち基部がすぼまっているもの（122～125・127・128）。②切り出しナイフ状の幅が狭い末端部をもち基部が末端部より幅広いもの（129～135）。134・135は末端部の厚みをとるための加工が施されている。③基部がすぼま

り，撥形のもの（136～138）。④末端部が丸形あるいは隅丸のもの（142～144・146～151。）これには断面が三角形で厚みのあるものが多い。148 以外はすべて表面の右側縁寄りに被縁がある。⑤つまみ部の幅が広く，厚さが薄いもの（152・154・155）。⑥刃部が半月形，三日月形のもの（156～158・176）。176 はつまみ部のつくり出しが不明瞭で裏石側縁に打点がある。⑦狭長で尖端部をもつもの（162～167）。断面が三角形で厚いものが多い。164 は幅が広いつまみ部をもつ。

ⅢＡ１Ｃ：126・153・159・170・171 は二次加工が両面の周縁に施されている。153・170 はつまみ部の幅が広い。

ⅢＡ１ｄ：121・145・161・173 は二次加工が両面の全面に施されているものである。121 は尖端をもち，断面は厚い。145 は丸形の末端部をもち厚さは薄い。161 は狭長で尖端をもつ。171 は基部にはわずかにノッチがある。

ⅢＡ１ｅ：174・175 はつまみ部のみ作り出されたものである。未成品であろうか。

ⅢＡ２ｂ：139 は二次加工が片面の全面に施されたものである。末端部はやや張り出している。

ⅢＡ２ｄ：140・141 は二次加工が両面の周縁に施されているものである。

石質は 121 のみが黒曜石製である。

笹状石器（図Ⅳ－17－177～図Ⅳ－19－197，図版 33－２）

54 点出土した。このうち 21 点を掲載した。縦長剥片を用い，基端の位置に打面があるものが大部分を占める。表面には粗い二次加工が施され，二次加工の重点がむしろ裏面両側縁の整形にあることが特徴である。したがって，刃部の断面形も片刃状をなしているものが多い。

ⅢＢ１：178・179・182～187・191・193・196 は刃部の裏面に加工がないもの。195 の刃部は，切り出しナイフ状である。

ⅢＢ２：177・180・181・188～190・197 は刃部の裏面に調整加工があるものである。190・197 は切り出しナイフ状の刃部である。197 は接合破片である。

ⅢＢ３：192・194・195 は刃部および表面の調整加工が粗雑なものである。

石質は 177 のみが黒曜石製である。

スクレイパー（図Ⅳ－20－198～図版Ⅳ－25－251，図版 34～36）

576 点出土した。このうち 53 点を掲載した。縦長剥片を調整加工したもの（ⅢＤ１）と横長剥片を調整加工したもの（ⅢＤ２）との２つに分類して，さらに刃部の形状，調整加工の位置で細分した。このなかで特徴的なものは半月形あるいは楕円形のもので，調整加工が比較的入念に施されている。これと石鏃・槍先の形態をもつもののほかは，剥片自体の形状を変えずにわずかな調整加工により刃部をつくり出している。

ⅢＤ１ａ：198～203・209・214・217 は刃部が側縁にあり直線的なものである。198 は錯向剥離の刃部をもつ。199 は両面加工で棒状のものである。209・214・217 は形状が半月形である。

ⅢＤ１ｂ：204～208・210～213・215・216 は刃部が側縁にあり張り出しているものである。

212・213・215・216は半月形・楕円形のものである。

ⅢD１ｃ：218～220は刃部が側縁にあり内湾しているものである。剥片の形状を大きく変えずに刃部をつくり出しているものが多い。

ⅢD１ｅ：221～223・248は刃部が末端部から側縁にかけてあるものである。248は末端部が内湾し，その刃角は急斜度である。

ⅢD２ａ：224・225・227・228・230は刃部が末端にあり，直線的なものである。224・225・227は形状が半月形で打瘤部を薄くするための調整加工が施されている。柄などに装着するための加工であろうか。225・227は裏面に刃部がつくり出されている。

ⅢD２ｂ：232は刃部が張り出しているものである。

ⅢD２ｅ：249は刃部が末端にあり，内湾しているものである。

ⅢD３ａ：233は円形あるいは楕円形のもので片面の全面に二次加工が施されている。

ⅢD３ｂ：229・231・234・235は円形あるいは楕円形のもので両面の全面に二次加工が施されているものである。

ⅢD４ｂ：236～238・241は尖端部をもち，両面に二次加工が施されている。

ⅢD５：239～240・242～247・251は石鏃・槍先に似た形態をもっている。239～240・242～245・251は柳葉形。251は加工が粗雑である。246・247はひし形のものである。246は横長剥片を調整加工したものである。

石質は，249のみが黒曜石製である。

石斧（図Ⅳ－26－252～262，図版37－１）

23点出土した。このうち11点を掲載した。基部の破片が多く，刃部の破片は少ない。完形のものは刃部の破損，刃つぶれが著しい。

ⅦＡ１ａ①：252～254・256・259は全面磨製で擦切痕がみとめられるものである。252・253・259は表面に細い溝状の擦痕が刻まれている。

ⅦＡ１ａ②：255・257は全面磨製で擦切痕がないものである。255は刃部のつぶれが著しい。

ⅦＡ１ｃ：258・260は剥離調整がみられるものである。

ⅦＡ２ｂ：261には敲打調整痕がみとめられ，表面には平滑に擦られた面がある。刃部のつぶれが著しい。

ⅦＡ３：262は素材自体を大きく変形することなく，刃部・基部のみ剥離調整により つくり出している。刃部がまるくつぶれ鋭利さを失っている。

石質は252～256は蛇紋岩，257は緑色片岩，258～260緑色泥岩，261・262は安山岩製である。

すり石（図Ⅳ－27－263～図Ⅳ－30－299，図版37－２～図版39－２）

143点出土した。このうち23点を掲載した。ⅦＡ１に分類したものが多く出土した。

ⅦＡ１：263～273・275～277は，断面が三角形状の礫の稜を擦ったものである。265は３稜とも擦られている。267・273は稜に敲打痕がみとめられる。擦面の幅は広いものが多い。

ⅦＡ２ａ：274・278～281は偏平な半円状礫を使用したもので，擦面を打ち欠いていないもの

である。擦面の幅は狭いものが多い。274は表面を打ち欠き厚さを薄くしている。

ⅦA 2 c：285は偏平な半円状礫の擦面と側縁を打ち欠いたものである。擦面の幅は狭い。

ⅦA 2 d：282・283は偏平な半円状礫の全周を打ち欠いたもの。擦面の幅は狭いものが多い。

ⅦA 3 d：284は偏平な短冊状礫の全周および両面を粗く打ち欠いたものである。擦面の幅は広い。

ⅦA 4：286～288は偏平礫の側縁を擦ったものである。287は表面も擦られている。

ⅦA 5：289～297は円礫・亜円礫の表裏面を擦ったものである。

ⅦB：298・299は北海道式石冠である。298の片側は，ほとんど加工痕が認められない。

石質は296が，珪岩と鑑定された。このほかは安山岩製である。

たたき石（図Ⅳ－30－300～図Ⅳ－32－330，図版40）

121点出土した。このうち31点を掲載した。

ⅦC 1：300～311は棒状の礫の一端もしくは両端にたたき痕のあるものである。

ⅦC 2：312～318は偏平礫・亜円礫の周縁にたたき痕がみられる。322・323は断面形が三角形状の礫の稜をたたいている。

ⅦC 3：324～330は偏平礫の表裏面にたたき痕がみられる。

石質は305・307・309・315・317・322が珪岩，306・308が頁岩，311が蛇紋岩，327が凝灰岩である。このほかはすべて安山岩製である。

石錘（図Ⅳ－32－331～343，図版41－1）

42点出土した。このうち13点を掲載した。表面に擦痕，たたき痕のあるものもある。

ⅦA 1：340は4ヵ所に打ち欠きがあるもので，表面にたたき痕がある。

ⅦA 2：331～337・342は長軸の両端に打ち欠きがあるもの。小型のものと大型のものがある。

ⅦA 4：338・339・341・343は3ヵ所に打ち欠きがある。

石質は，338が泥岩製で，このほかは安山岩製である。

砥石（図Ⅳ－33－344～357，図版42－2）

48点出土した。このうち14点を掲載した。完形品は少ない。厚さの薄い板状のものが多い。

ⅨA 2：344～348・350・352～354・356・357は研磨面が平滑なものである。

ⅨA 3：349・351・355は研磨面がくぼんでいるものである。

石質は355が安山岩製で，このほかはすべて砂岩製である。

石皿・台石（図Ⅳ－92－358～361，図版42）

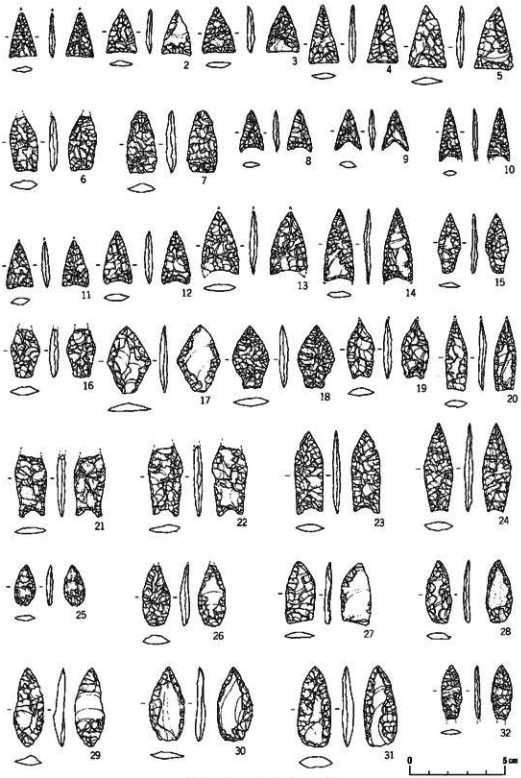
石皿は45点，台石は26点出土した。このうち各2点ずつを掲載した。

ⅩA：360はくぼんだ擦面のある破損品である。361は平滑な擦面のものである。

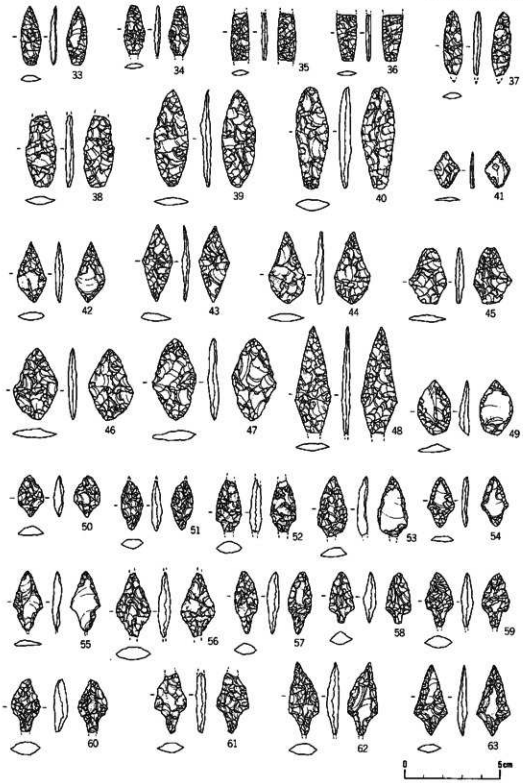
ⅩB：358は大型の亜円礫の表面にたたき痕があるものである。359は平らの礫の表面にたたき痕があるものである。

石質はすべて安山岩製である。

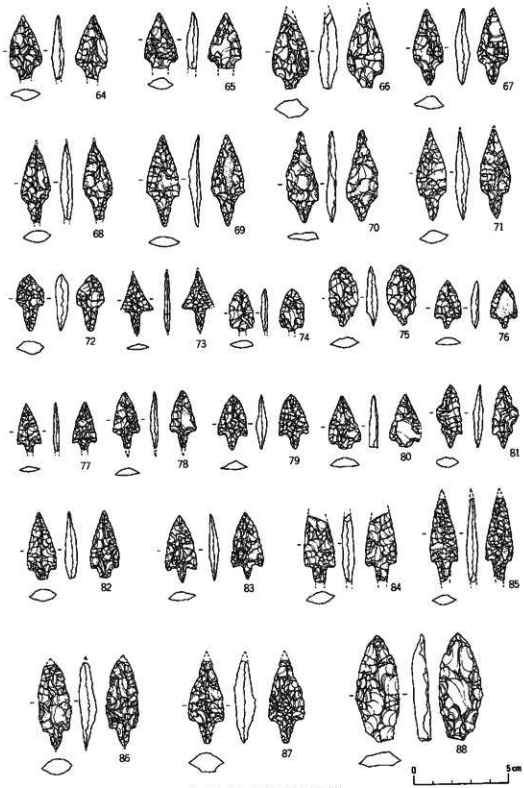
注）石質については，赤松守雄氏の教示を受けた。



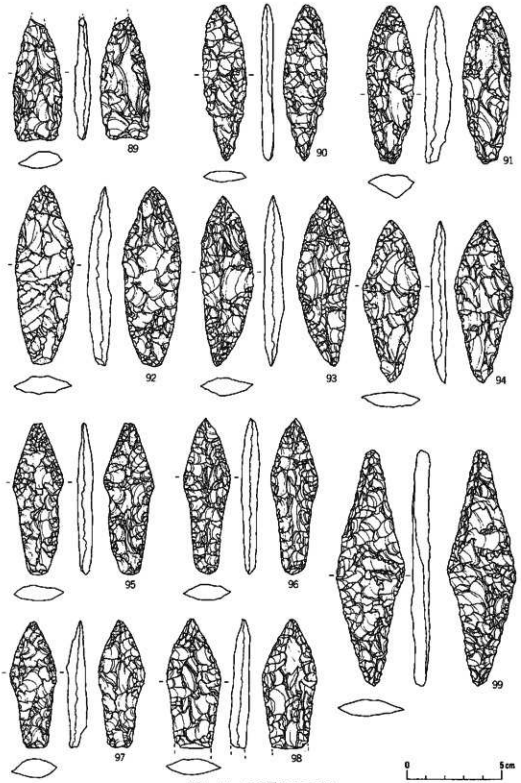
図Ⅳ－8　包含層出土の石器



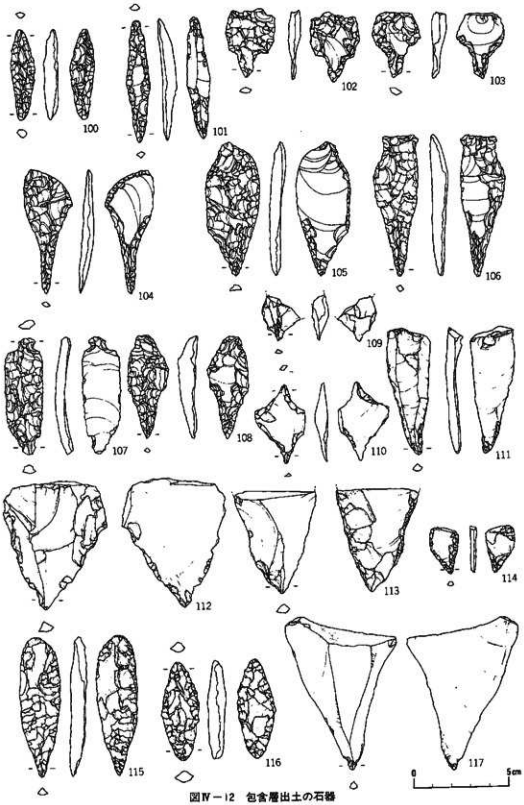
図Ⅳ－9　包含層出土の石器



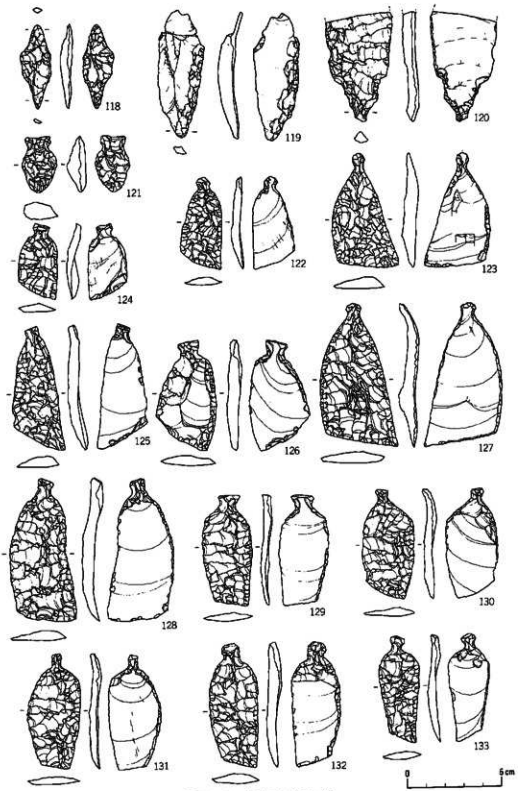
図Ⅳ－10　包含層出土の石器



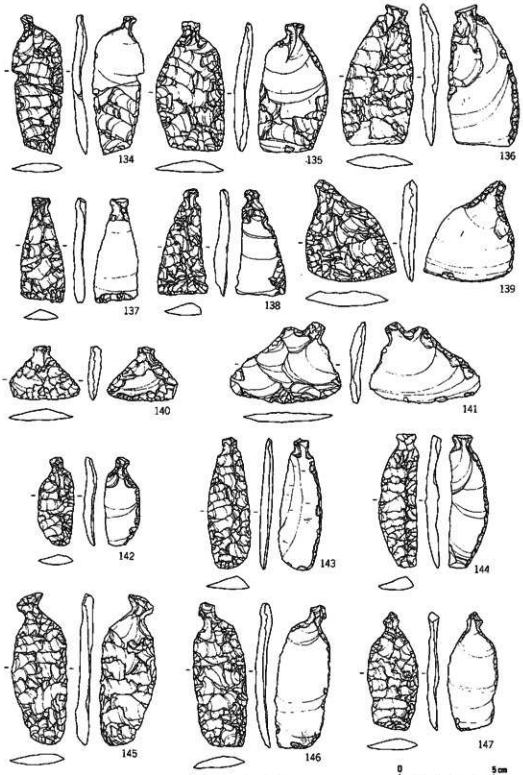
図Ⅳ－11　包含層出土の石器



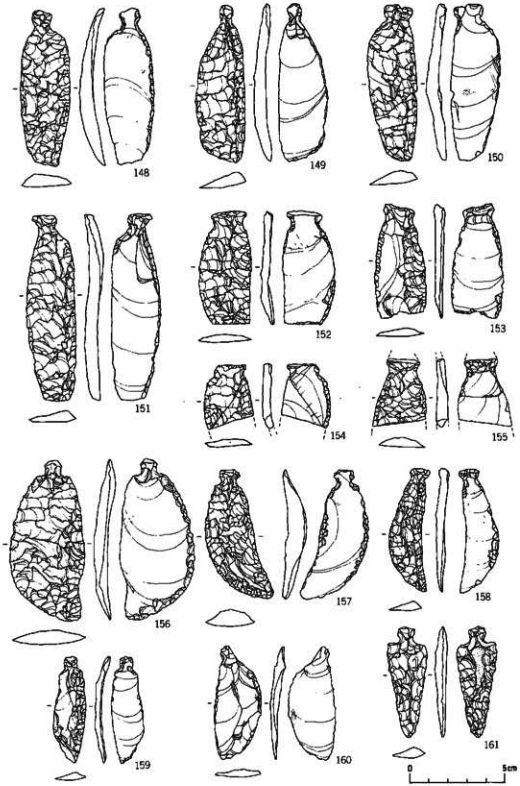
図Ⅳ－12　包含層出土の石器



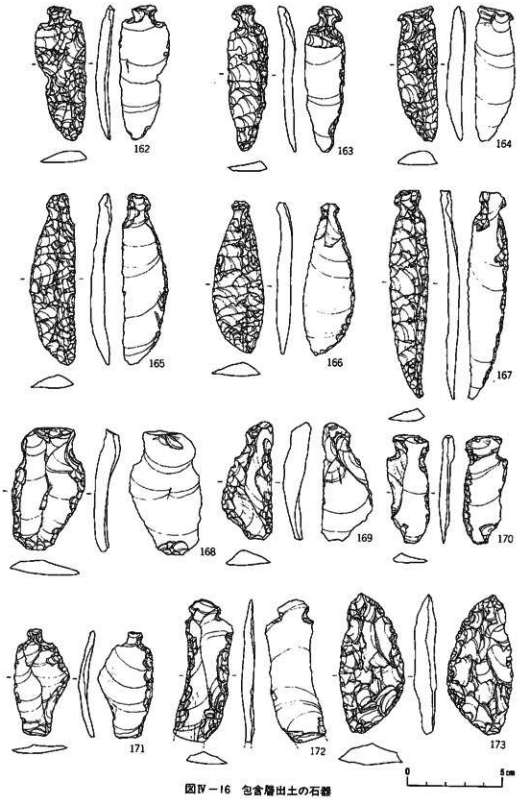
図Ⅳ－13　包含層出土の石器



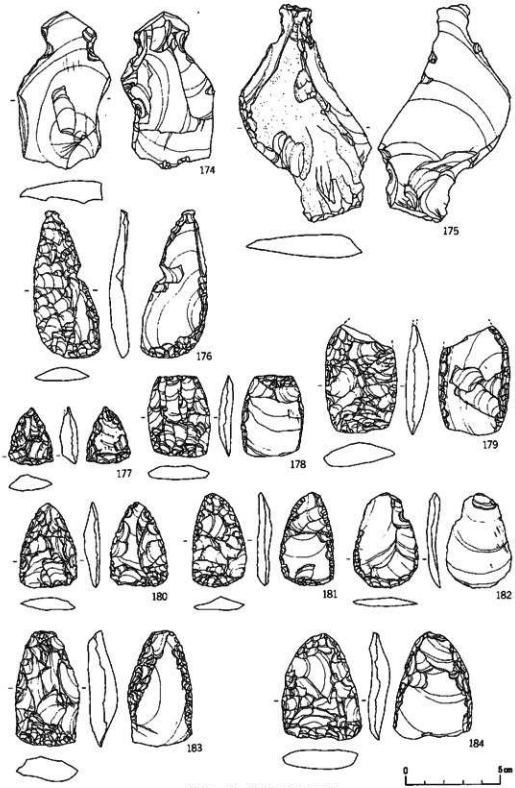
図Ⅳ－14　包含層出土の石器



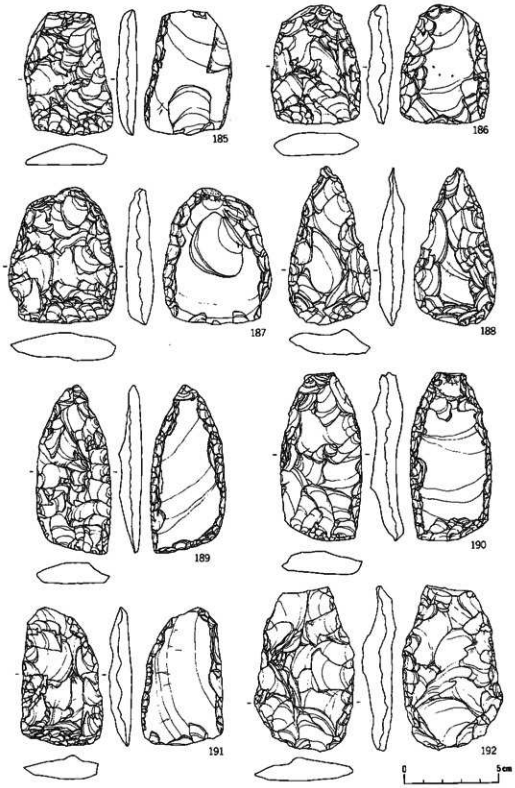
図Ⅳ－15　包含層出土の石器



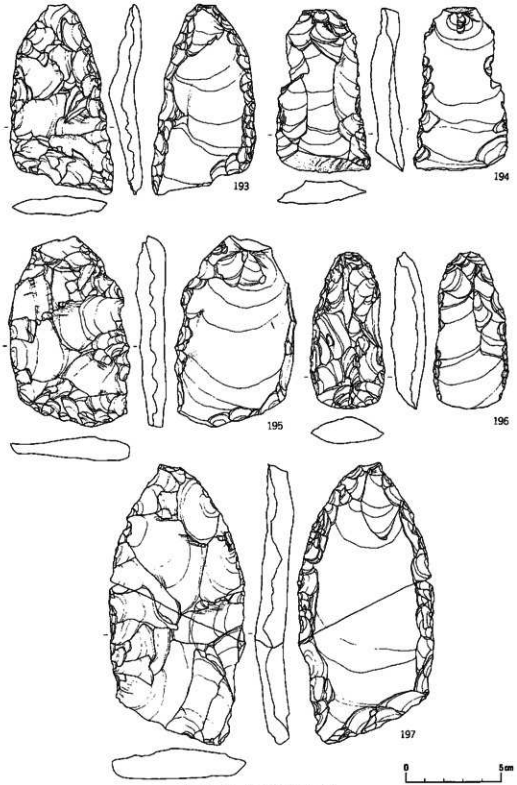
図Ⅳ－16　包含層出土の石器



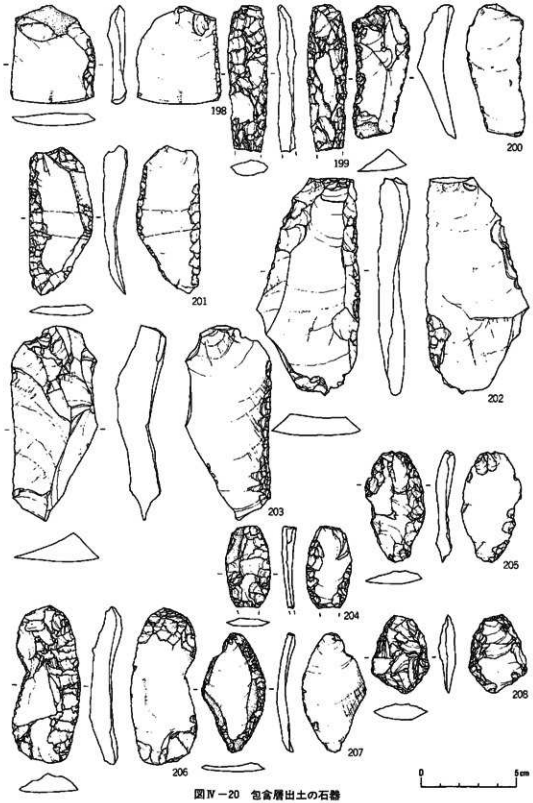
図Ⅳ－17　包含層出土の石器



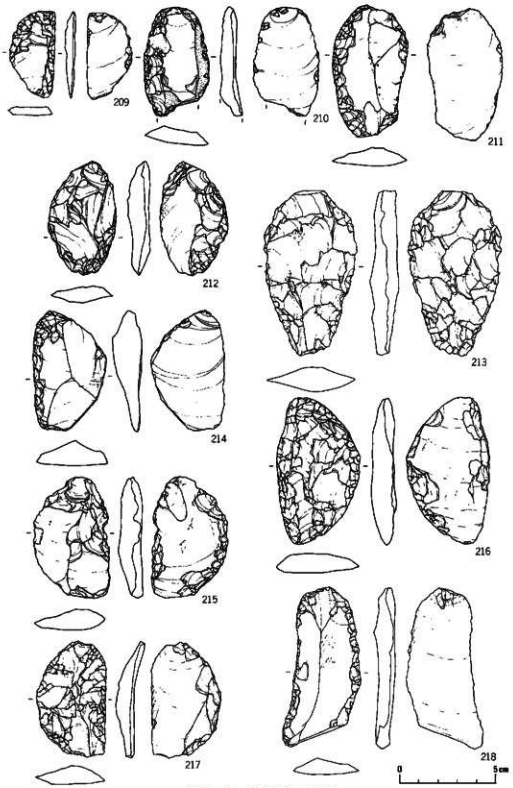
図Ⅳ－18　包含層出土の石器



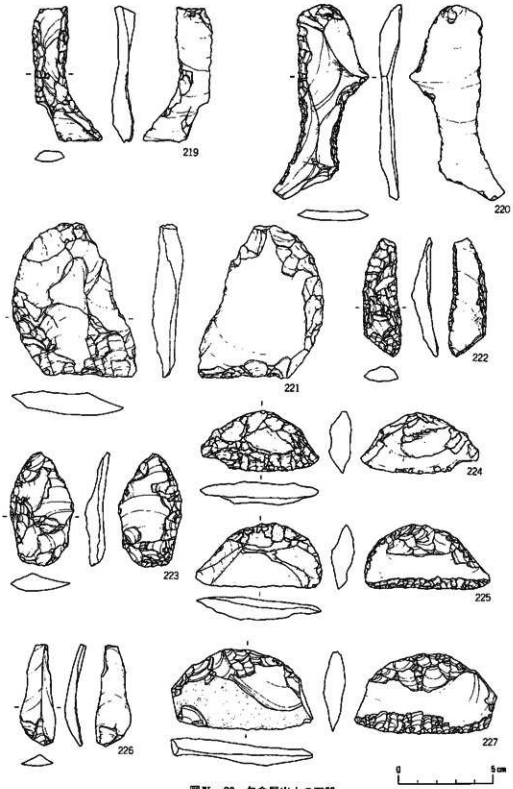
図Ⅳ－19　包含層出土の石器



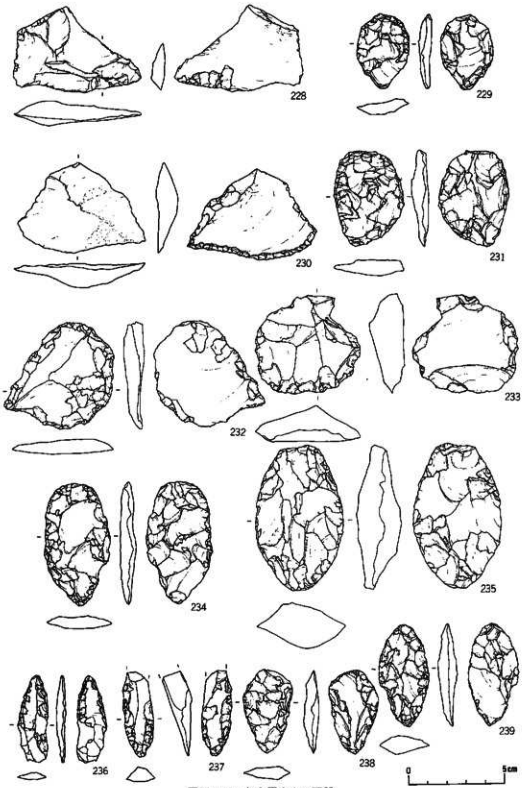
図Ⅳ－20　包含層出土の石器



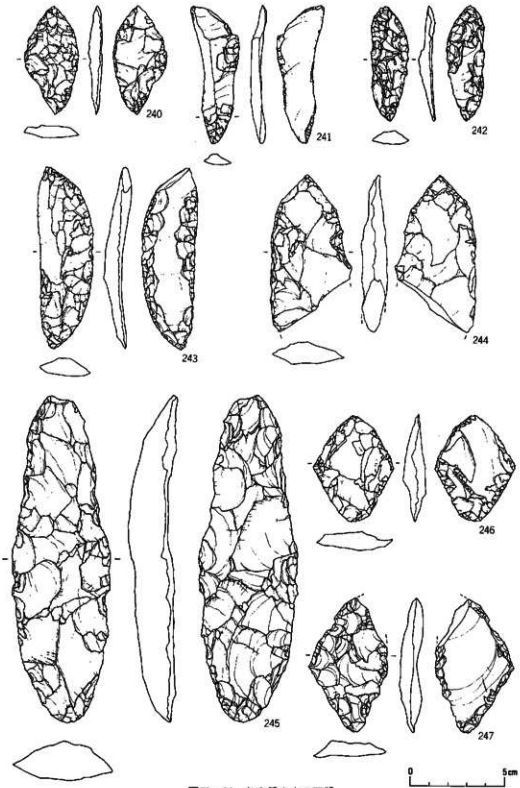
図Ⅳ－21　包含層出土の石器



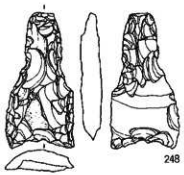
図Ⅳ－22　包含層出土の石器

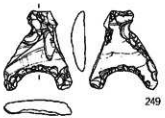


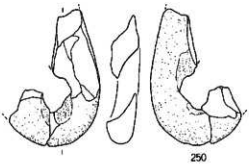
図Ⅳ－23　包含層出土の石器

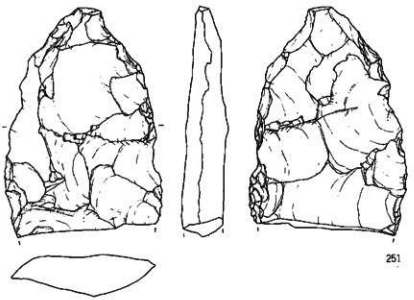


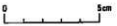
図Ⅳ－24　包含層出土の石器



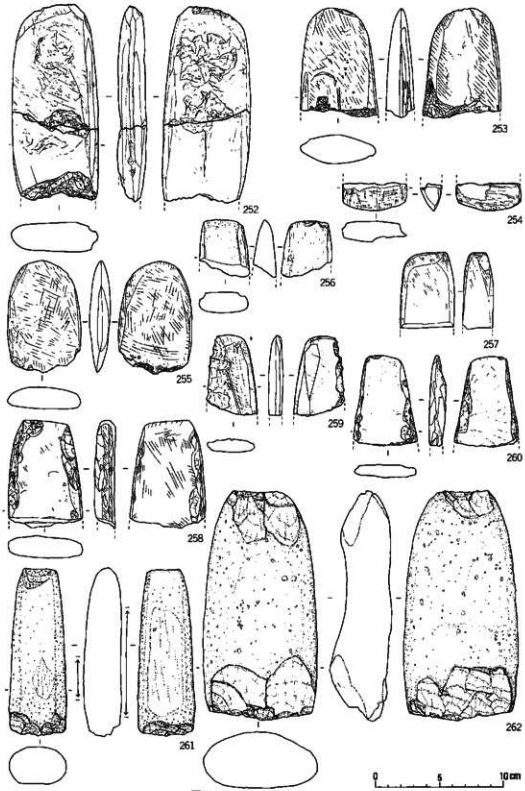




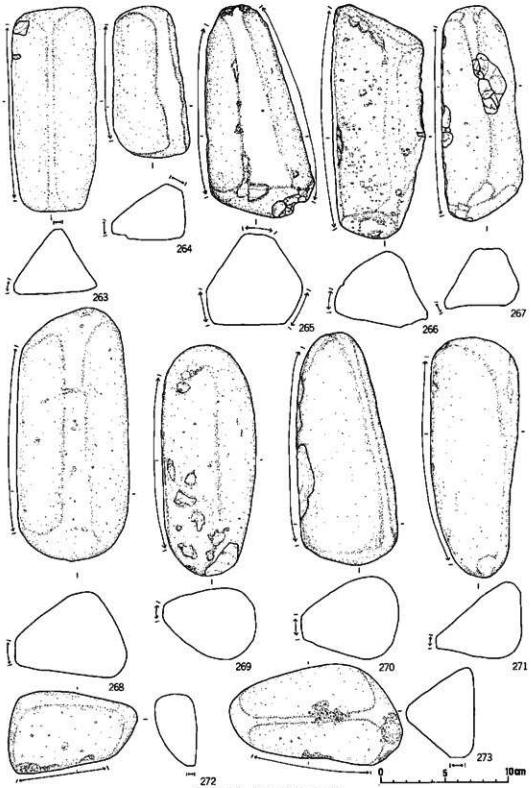




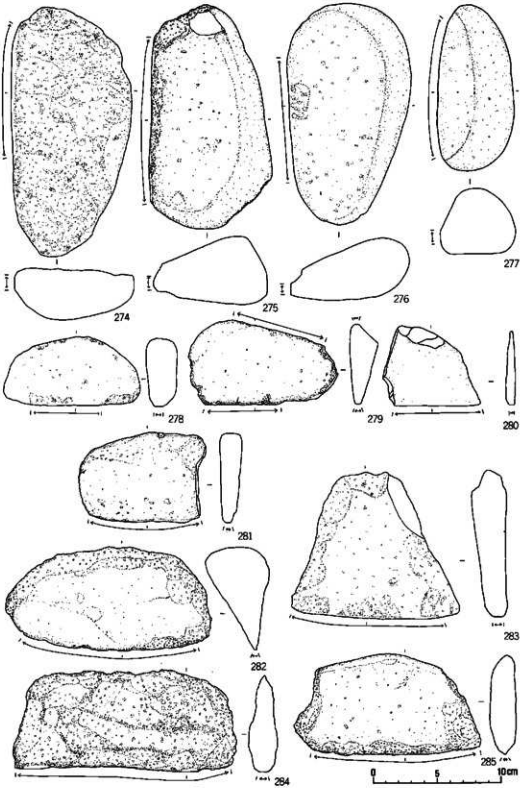
図Ⅳ－25　包含層出土の石器



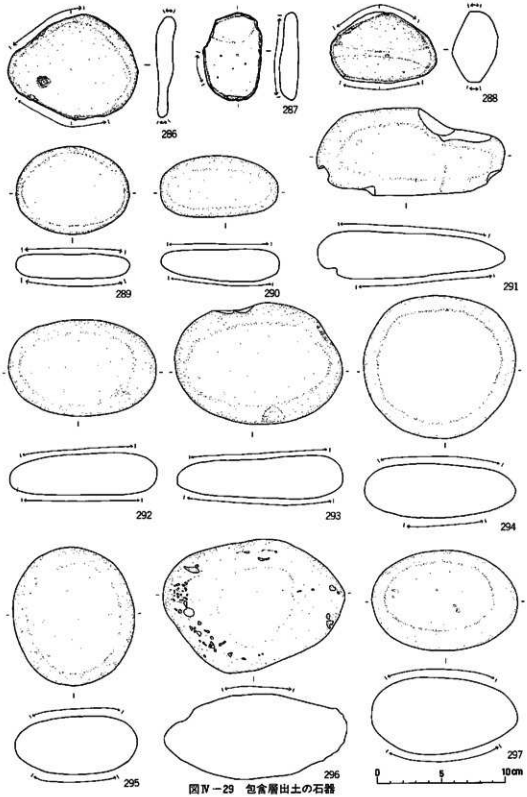
図Ⅳ－26　包含層出土の石器



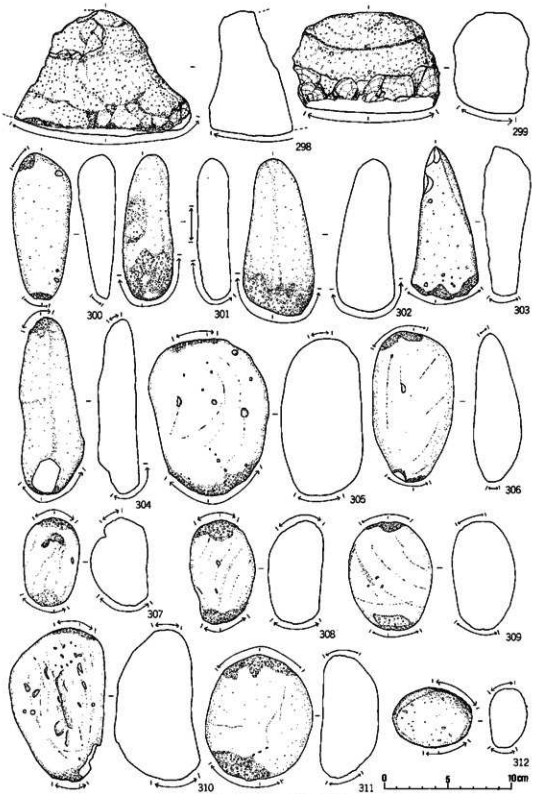
図Ⅳ－27 包含層出土の石器



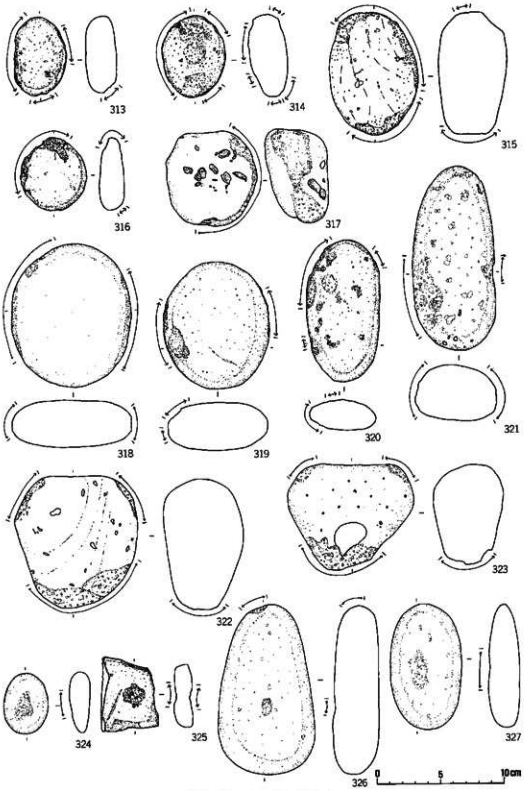
図Ⅳ－28　包含層出土の石器



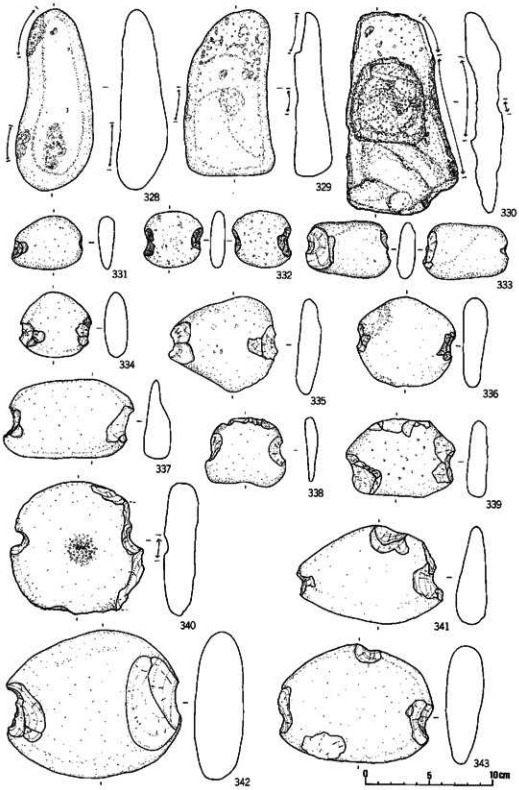
図Ⅳ－29　包含層出土の石器



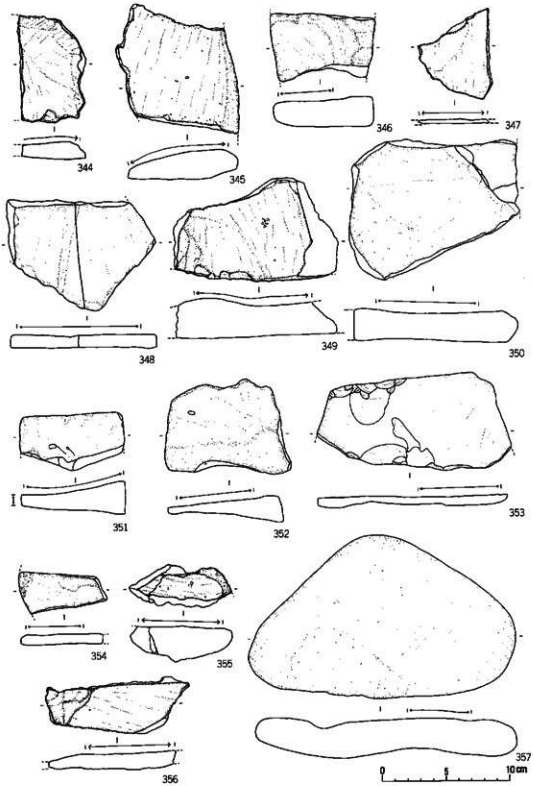
図Ⅳ－30　包含層出土の石器



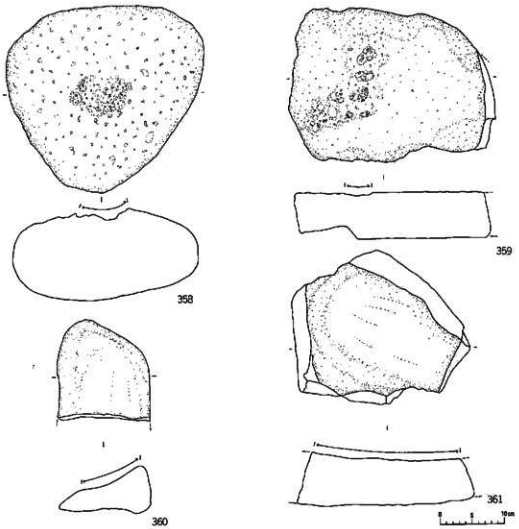
図Ⅳ－31　包含層出土の石器



図Ⅳ－32　包含層出土の石器



図Ⅳ－33　包含層出土の石器



図Ⅳ－34　包含層出土の石器

表Ⅳ－3　包含層掲載石器一覧

挿図番号	名称	分類	発掘区	重量(g)	材質	写真図版	備考
図Ⅳ－8－ 1	石鏃	ⅠA1	チ－9－6	0.8	珪質頁岩	30－1－1	早期？
2	〃	〃	ヌ－9－6	0.8	頁岩	2	早期？
3	〃	〃	チ－9	1.1	黒曜石	3	早期
4	〃	〃	ワ－9－6	1.2	頁岩	4	
5	〃	〃	カ－4－11	1.0	〃	5	
6	〃	ⅠB	ワ－8－16	(1.8)	〃	6	尖端部破損
7	〃	ⅠA1	ヘ－9－7	2.5	〃	7	早期
8	〃	ⅠA2	ヘ－9－11	0.5	〃	8	
9	〃	〃	ト－3－5	0.5	メノウ	9	早期
10	〃	〃	チ－9－14	(0.6)	頁岩	10	基部破損
11	〃	〃	リ－5	1.0	黒曜石	11	
12	〃	〃	チ－5－1	1.1	頁岩	12	早期？
13	〃	〃	ホ－9－8	2.0	〃	13	
14	〃	〃	ホ－4－16	2.0	黒曜石	14	
15	〃	ⅠB	テストピット8-5	6.0	〃	15	
16	〃	〃	ヌ－4－1	1.2	頁岩	16	尖端部破損
17	〃	〃	ル－8－8	3.0	〃	17	早期
18	〃	〃	ト－8－11	2.3	〃	18	
19	〃	ⅠC1	ワ－9－2	3.0	〃	19	
20	〃	〃	ワ－5－13	1.3	〃	20	早期
21	〃	〃	ワ－9－8	(2.2)	珪質頁岩	21	尖端部破損・早期
22	〃	〃	カ－9－4	(3.0)	〃	22	〃　・〃
23	〃	〃	ヲ－5－7	2.2	頁岩	23	早期？
24	〃	〃	ホ－8	2.5	〃	24	早期？
25	〃	〃	ト－3－7	0.7	〃	25	
26	〃	〃	ヲ－8－8	2.5	〃	26	早期？
27	〃	〃	ル－7－16	2.1	〃	27	早期
28	〃	〃	ヲ－9－8	1.3	〃	28	
29	〃	〃	ヌ－8	2.5	〃	29	(被焼礫埋土)
30	〃	〃	ヲ－9－4	2.6	〃	30	
31	〃	〃	ル－8－7	4.8	〃	31	
32	〃	〃	ト－9－2	0.6	黒曜石	32	早期？
図Ⅳ－9－ 33	〃	〃	ヌ－9－6	0.8	頁岩	33	早期？
34	〃	〃	ホ－8－8	(1.0)	〃	34	基部破損
35	〃	〃	ト－9	(0.7)	〃	35	尖端・基部破損・早期
36	〃	〃	ヌ－9－16	(0.7)	黒曜石	36	尖端部破損・早期
37	〃	〃	ト－8－6	(0.6)	頁岩	37	基部破損・早期
38	〃	〃	ヲ－8－11	(3.0)	〃	38	尖端部破損・早期
39	〃	〃	ヌ－7－15	4.0	〃	39	早期
40	〃	〃	ル－5－10	6.0	〃	40	早期
41	〃	ⅠC2	ワ－8－4	4.0	〃	41	
42	〃	〃	リ－9－7	1.0	〃	42	
43	〃	〃	ヲ－7－9	1.5	〃	43	早期
44	〃	ⅠC3	ヨ－4－13	2.5	〃	44	早期
45	〃	ⅠB	ト－4－1	1.45	〃	45	
46	〃	ⅠC2	ヌ－5	2.95	〃	46	早期
47	〃	〃	ト－4－6	3.6	〃	47	早期
48	〃	〃	ル－5－7	(3.7)	〃	48	基部破損・早期
49	〃	ⅠC3	ヲ－8－10	2.0	〃	49	
50	〃	ⅠD2	ヲ－4－15	1.1	〃	50	
51	〃	〃	ヘ－4－11	(2.0)	〃	51	尖端部破損
52	〃	〃	ヘ－5－2	(2.0)	〃	52	尖端・基部破損

挿図番号	名称	分類	発掘区	重量(g)	材質	写真図版	備考
図Ⅳ－9－53	石鏃	ⅠD2	チ－8－14	(2.0)	頁岩	30－1－53	基部破損
54	〃	〃	ヌ－5－14	0.9	〃	54	
55	〃	〃	ト－3－15	1.3	〃	55	
56	〃	〃	ワ－4－9	(4.0)	〃	56	尖端・基部破損
57	〃	〃	リ－8－11	2.0	〃	57	中期
58	〃	〃	ワ－5	2.0	〃	58	
59	〃	〃	チ－8－16	1.7	〃	59	中期
60	〃	〃	チ－5－2	(2.8)	〃	60	基部破損・中期
61	〃	〃	リ－9－3	(2.0)	〃	61	尖端部破損・中期
62	〃	〃	ヘ－4－2	(3.0)	〃	62	基部破損・中期
63	〃	〃	チ－8－5	1.8	〃	63	
図Ⅳ－10－64	〃	〃	ヲ－8－11	(3.5)	〃	64	基部破損
65	〃	〃	チ－9	(2.5)	〃	65	基部破損
66	〃	〃	チ－4－2	(5.5)	〃	66	尖端部破損
67	〃	〃	チ－5－8	3.0	珪質頁岩	67	中期
68	〃	〃	ヨ－4－5	3.0	頁岩	68	中期
69	〃	〃	メ－4	4.0	〃	69	中期
70	〃	〃	ト－4－1	1.45	〃	70	中期
71	〃	〃	リ－5	3.5	〃	71	中期
72	〃	ⅠD1	チ－9－9	1.9	黒曜石	72	
73	〃	ⅠD2	ル－8－10	(0.8)	頁岩	73	側縁部破損・後期
74	〃	〃	ワ－5－3	(0.9)	〃	74	基部破損
75	〃	〃	ヲ－5－3	2.1	〃	75	
76	〃	〃	ヲ－5－1	0.9	〃	76	後期
77	〃	〃	ヘ－10－6	(0.6)	〃	77	基部破損・後期
78	〃	〃	リ－5－5	(1.0)	〃	78	基部破損・後期
79	〃	〃	ヲ－5－4	1.2	〃	79	後期
80	〃	〃	ヲ－4－14	(1.6)	〃	80	基部破損
81	〃	〃	ヲ－4－10	1.0	〃	81	
82	〃	〃	ル－9－11	2.1	〃	82	
83	〃	〃	カ－5－1	1.8	〃	83	後期
84	〃	〃	ヘ－3－8	(2.5)	〃	84	尖端・基部破損
85	〃	〃	ト－3－10	(3.2)	〃	85	尖端・基部破損
86	〃	〃	ヘ－3－7	(5.6)	〃	86	尖端・基部破損
87	〃	〃	チ－9－6	(6.1)	〃	87	尖端部破損
88	〃	ⅠC1	チ－7	10.4	〃	88	尖端部破損
図Ⅳ－11－89	〃	〃	ヲ－3－12	(13.5)	〃	89	
90	〃	〃	ワ－8－2	15.0	〃	90	尖端部破損・早期
91	〃	〃	ト－4－6	23.5	〃	91	早期
92	〃	〃	チ－4－14	28.5	〃	93	
93	〃	〃	ト－4－6	22.6	〃	94	早期
94	〃	ⅠC2	ル－4－11	18.0	〃	95	早期
95	〃	ⅠD1	リ－5－1	14.0	〃	96	早期
96	〃	〃	ホ－3－21	15.0	〃	97	早期
97	〃	〃	リ－5－4	14.0	〃	98	早期
98	〃	〃	リ－5－3	(18.1)	〃	99	早期
99	〃	〃	カ－5	36.5	〃	92	基部破損・早期
図Ⅳ－12－100	石錐	ⅡA1	ヘ－3－9	4.6	〃	31－1－1	早期
101	〃	〃	ワ－4－9	6.1	〃	2	
102	〃	ⅡA2	ト－4－9	3.5	〃	9	
103	〃	〃	ト－9－14	5.5	〃	8	早期
104	〃	〃	ヌ－8	7.5	〃	3	

挿図番号	名称	分類	発掘区	重量(g)	材質	写真図版	備考
図Ⅳ－12－105	石鏃	ⅡA2	ヘ－10－1	14.0	頁岩	31－1－4	
106	〃	〃	ヌ－8－9	13.5	〃	5	
107	〃	〃	ヲ－8－15	9.0	〃	6	早期
108	〃	〃	リ－4－15	7.7	〃	7	
109	〃	ⅡD	チ－5－8	2.9	〃	23	早期？
110	〃	〃	チ－4－14	5.0	〃	22	
111	〃	ⅡB	ヲ－9	10.0	珪質頁岩	11	早期
112	〃	〃	ヌ－9－6	39.5	頁岩	13	早期？
113	〃	〃	ヨ－9－13	22.0	〃	12	早期
114	〃	ⅡD	ワ－8－16	1.2	〃	16	
115	〃	ⅡC	ホ－8－12	13.0	〃	19	早期？
116	〃	〃	ト－8－15	9.0	〃	17	
117	〃	ⅡB	チ－5－3	45.2	〃	14	
図Ⅳ－13－118	〃	ⅡC	ヌ－8－9	2.0	〃	20	
119	〃	ⅡB	ワ－8－3	14.0	〃	21	
120	〃	ⅡD	ワ－8－1	14.5	珪質頁岩	24	
121	つまみ付ナイフ	ⅢA1d	チ－5－4	3.9	黒曜石		後期
122	〃	ⅢA1b	ル－5－3	3.6	頁岩	31－2－1	早期
123	〃	〃	チ－4－9	5.6	〃	2	早期
124	〃	〃	ヲ－7－11	12.1	〃	5	
125	〃	〃	〃	10.1	〃	6	早期
126	〃	ⅢA1c	ル－5－10	11.0	〃	4	
127	〃	ⅢA1b	ホ－8－7	17.0	〃	8	早期
128	〃	〃	ヲ－5－9	5.1	〃	7	早期
129	〃	〃	ワ－4－7	8.0	〃	12	早期
130	〃	〃	ヲ－9－2	7.3	〃	10	
131	〃	〃	ヲ－7－12	8.0	〃	11	早期
132	〃	〃	ヲ－5－10	10.0	〃	13	早期
133	〃	〃	ル－8－14	5.1	〃	9	早期
図Ⅳ－14－134	〃	〃	ワ－4－8	12.0	〃	14	早期
135	〃	〃	ワ－8－24	18.5	〃	15	風倒木痕
136	〃	〃	ト－10	19.0	〃	17	
137	〃	〃	ヨ－5－5	6.6	〃	18	早期？
138	〃	〃	ワ－5－16	8.0	〃	19	早期
139	〃	ⅢA2b	ホ－10－3	17.3	〃	20	早期
140	〃	ⅢA2d	ル－4－11	5.0	〃	22	
141	〃	〃	ヨ－4	13.0	〃	21	早期
142	〃	ⅢA1b	チ－4－14	4.4	珪質頁岩	32	早期？
143	〃	〃	ヲ－9－3	10.0	頁岩	34	早期？
144	〃	〃	ワ－7－13	10.0	〃	35	早期
145	〃	ⅢA1d	チ－5－11	14.0	〃	31	早期
146	〃	ⅢA1b	ワ－5－15	13.5	〃	30	早期？
147	〃	〃	ワ－8－16	8.3	〃	26	早期？
図Ⅳ－15－148	〃	〃	カ－8－13	16.0	〃	36	
149	〃	〃	ヘ－10－8	15.0	〃	37	
150	〃	〃	ヘ－5－3	14.0	珪質頁岩	38	早期？
151	〃	〃	カ－4－16	19.5	頁岩	41	早期？
152	〃	〃	ト－9	9.0	〃	46	早期
153	〃	ⅢA1c	ル－8－5	8.0	〃	47	早期
154	〃	ⅢA1b	ル－9－1	(4.5)	〃	48	末端部破損・早期
155	〃	〃	ワ－5	(5.0)	〃	49	末端部破損・早期
156	〃	〃	ト－9－12	22.0	〃	42	早期

挿図番号	名　　称	分　類	発 掘 区	重量(g)	材　質	写真図版	備　　考
図Ⅳ−15−157	つまみ付ナイフ	ⅢＡ１ｂ	ワ−５−１	14.4	頁　岩	32−２−51	
158	〃	〃	ヲ−８−６	6.0	〃	50	早期
159	〃	ⅢＡ１ｃ	ワ−８−11	4.5	〃	52	
160	〃	ⅢＡ１ａ	ト−８−11	5.0	〃	44	
161	〃	〃	カ−９−10	5.5	〃	53	
図Ⅳ−16−162	〃	ⅢＡ１ｂ	タ−８−７	12.0	〃	32−１−54	早期
163	〃	〃	ワ−８−４	9.1	〃	56	
164	〃	〃	ヲ−５−16	12.0	〃	55	早期
165	〃	〃	ヘ−９−10	15.0	〃	58	早期
166	〃	〃	チ−４−４	15.0	〃	57	
167	〃	〃	ヲ−８−２	4.0	〃	59	早期？
168	〃	ⅢＡ１ａ	ト−４	20.8	〃	68	中期？
169	〃	〃	タ−８−11	12.0	〃	67	中期？
170	〃	ⅢＡ１ｃ	ﾃｽﾄﾋﾟｯﾄA-1	6.3	〃	66	中期？
171	〃	〃	カ−４−16	6.0	〃	72	
172	〃	ⅢＡ１ａ	ワ−８−12	(10.7)	〃	33−１−64	(風倒木痕)
173	〃	ⅢＡ１ｄ	ﾃｽﾄﾋﾟｯﾄA-3	24.6	〃	69	
図Ⅳ−17−174	〃	ⅢＡ１ｅ	カ−５−９	50.5	〃	62	早期
175	〃	〃	ル−５−14	83.0	〃	61	早期
176	〃	ⅢＡ１ｂ	ト−９−12	16.0	珪質頁岩	70	早期
177	箆　状　石　器	ⅢＢ２	ホ−８−７	5.8	黒 曜 石	33−２−１	
178	〃	ⅢＢ１	ワ−８−１	13.0	頁　岩	5	
179	〃	〃	ト−９−７	(32.0)	〃	7	基端部破損
180	〃	ⅢＢ２	ヨ−９−９	10.4	〃	2	早期？
181	〃	〃	ワ−５−９	9.8	珪質頁岩	3	
182	〃	ⅢＢ１	ヌ−７−13	9.1	頁　岩	4	早期
183	〃	〃	ヌ−４−７	26.8	〃	9	早期？
184	〃	〃	ヌ−８−16	30.0	〃	8	早期
図Ⅳ−18−185	〃	〃	ヲ−７−15	37.5	〃	11	早期
186	〃	〃	ワ−８−１	47.0	〃	10	早期？
187	〃	〃	ワ−７−13	77.0	〃	12	早期
188	〃	ⅢＢ２	チ−９−31	39.0	〃	13	早期
189	〃	〃	カ−８−11	45.0	〃	14	
190	〃	〃	リ−５−12	56.6	〃	15	
191	〃	〃	ル−９−12−16	42.0	〃	16	早期
192	〃	ⅢＢ３	ワ−７−14	82.0	〃	19	早期
図Ⅳ−19−193	〃	ⅢＢ１	ヨ−７−５	64.0	〃	18	早期
194	〃	ⅢＢ３	ヘ−５−３	85.0	〃	21	早期
195	〃	ⅢＢ２	ト−４−５	85.0	〃	20	早期
196	〃	ⅢＢ１	ル−９−12	56.0	〃	17	早期
197	〃	ⅢＢ２	ヲ−７−14	97.5	〃	22	
図Ⅳ−20−198	ス　ク　レ　イ　パ　ー	ⅢＤ１ａ	ワ−８−12	21.0	〃	34−１−１	トレンチＢＲ
199	〃	〃	ト−５−６	(15.0)	〃	3	末端部破損
200	〃	〃	リ−５−３	23.4	〃	4	
201	〃	〃	ル−８−８	20.0	〃	6	早期
202	〃	〃	ル−４−11	84.0	〃	7	
203	〃	〃	ル−５−８	79.0	〃	8	早期
204	〃	ⅢＤ１ｂ	チ−４−16	(6.2)	〃	12	末端部破損
205	〃	〃	リ−４−13	12.0	珪質頁岩	13	
206	〃	〃	チ−４−14	34.6	頁　岩	11	早期？
207	〃	〃	ト−４−12	8.4	珪質頁岩	15	早期？
208	〃	〃	チ−５−12	8.7	頁　岩	18	

挿図番号	名称	分類	発掘区	重量(g)	材質	写真図版	備考
図Ⅳ−21−209	スクレイパー	ⅢD1a	ワ−4−10	6.5	頁岩	34−1−19	早期?
210	〃	〃	チ−4−10	17.9	〃	16	
211	〃	ⅢD1b	チ−4−13	25.4	〃	17	早期?
212	〃	〃	へ−8−13	21.9	〃	21	トレンチCR
213	〃	〃	リ−9−8	53.0	〃	27	早期
214	〃	ⅢD1a	ヌ−8	25.6	〃	22	
215	〃	ⅢD1b	ル−4−7	39.5	〃	25	
216	〃	〃	ヲ−5	29.1	〃	24	
217	〃	ⅢD1a	ト−8−12	23.0	〃	23	
218	〃	ⅢD1c	へ−8−14	33.0	〃	35−1−28	早期?
図Ⅳ−22−219	〃	〃	ト−3−14	13.6	〃	29	
220	〃	〃	チ−4−5	25.3	〃	30	早期?
221	〃	ⅢD1e	カ−7−16	68.0	〃	44	
222	〃	〃	ワ−9−10	9.7	〃	40	早期?
223	〃	〃	ヲ−4−7	16.0	〃	38	早期
224	〃	ⅢD2a	チ・リ−8	20.0	〃	46	農道
225	〃	〃	ヨ−4−14	18.0	〃	47	早期?
226	〃	ⅢD1d	ヲ−5−5	5.0	〃	33	早期
227	〃	ⅢD2a	ト−3−13	35.5	〃	48	早期?
図Ⅳ−23−228	〃	〃	へ−9−11	26.0	〃	50	早期?
229	〃	ⅢD3b	チ−4−7	5.7	〃	36−1−54	早期?
230	〃	ⅢD2a	チ−4−6	26.0	〃	51	早期?
231	〃	ⅢD3b	チ−4−11	14.6	〃	60	早期?
232	〃	〃	ワ−8−4	28.7	〃	52	トレンチBR
233	〃	ⅢD3a	リ−5	42.0	〃	58	早期
234	〃	ⅢD3b	ヲ−9−11	15.8	〃	63	
235	〃	〃	へ−7−10	68.0	〃	64	早期
236	〃	ⅢD4b	カ−5−15	4.0	〃	65	
237	〃	〃	チ−4−2	4.5	〃	66	早期?
238	〃	〃	チ−4−16	6.6	〃	67	
239	〃	ⅢD5	カ−9−9	11.5	〃	73	早期?
図Ⅳ−24−240	〃	〃	カ−9−8	107.0	〃	74	早期?
241	〃	ⅢD4b	チ−4−15	6.9	〃	70	早期?
242	〃	ⅢD5	チ−4−14	5.2	〃	75	早期?
243	〃	〃	へ−4−15	27.0	〃	76	早期
244	〃	〃	カ−5−4	(38.0)	〃	81	早期?
245	〃	〃	ル−9−3	165.0	〃	79	早期?
246	〃	〃	リ−4−11	17.8	〃	77	
247	〃	〃	ワ−5−14	(19.9)	〃	78	早期?
図Ⅳ−25−248	〃	ⅢD1d	ト−5−2	24.5	〃	82	早期
249	〃	ⅢD2c	ト−3−9	7.0	黒曜石	83	早期?
250	不明礫	ⅡA	カ−4−11	(28.4)	珪藻土	84	
251	スクレイパー	ⅣA	ワ−8−12	20.7	頁岩	80	トレンチBR
図Ⅳ−26−252	石斧	ⅥA1a①	ワ−5−4 ワ−4−10	(160.0) (225.0)	蛇紋岩	37−1−1	
253	〃	〃	ト−9−8	(139.0)	〃	2	早期
254	〃	〃	ト−3−13	(20.0)	〃	3	早期
255	〃	ⅥA1a②	カ−8−9	110.0	〃	4	早期?
256	〃	ⅥA1a①	ヲ−5−7	(32.0)	〃	5	早期?
257	〃	ⅥA1a②	ヲ−4−15	(100.0)	緑色片岩	6	早期?
258	〃	ⅥA1c	ヌ−8−5	(126.0)	緑色泥岩	7	早期?
259	〃	ⅥA1a①	ヲ−9−10	(38.0)	〃	8	早期?
260	〃	ⅥA1c	へ−3−2	(62.0)	〃	9	早期?

挿図番号	名称	分類	発掘区	重量(g)	材質	写真図版	備考
図Ⅳ－26－261	石斧	Ⅵ A 2 b	ル－9－12	289.0	安山岩	37－1－10	早期？
262	〃	Ⅵ A 3	カ－7－13	1,010.5	〃	11	
図Ⅳ－27－263	すり石	Ⅶ A 1	ヨ－5－5	840	〃	37－2－1	早期
264	〃	〃	カ－5	460	〃	2	早期？
265	〃	〃	ヲ－5－15	1,100	〃	3	早期
266	〃	〃	ワ－9－14	1,200	〃	4	
267	〃	〃	ワ－4－12	800	〃	5	
268	〃	〃	カ－8－7	1,700	〃	8	早期？
269	〃	〃	ヨ－9－15	1,050	〃	6	早期
270	〃	〃	カ－4－11	1,130	〃	7	早期
271	〃	〃	ル－4－14	1,000	〃	9	
272	〃	〃	ル－8－10	340.0	〃	38－1－10	早期
273	〃	〃	ワ－9－7	860	〃	15	早期？
図Ⅳ－28－274	〃	Ⅶ A 2 a	ワ－9－11	1,100	〃	21	
275	〃	Ⅶ A 1	ト－9－11	1,170	〃	16	早期
276	〃	〃	ヲ－8	1,000	〃	20	早期
277	〃	〃	カ－4－5	610	〃	38－2－13	早期？
278	〃	Ⅶ A 2 a	ト－3－15	220	〃	22	中・後期
279	〃	〃	へ－3－12	(198.3)	〃	23	中・後期
280	〃	〃	カ－4－15	40.0	〃	25	早期
281	〃	〃	へ－3－11	(167.0)	〃	24	
282	〃	Ⅶ A 2 d	へ－7－11	550.0	〃	26	
283	〃	〃	ワ－4－15	467.0	〃	28	
284	〃	Ⅶ A 3 d	へ－3－10	450.0	〃	31	
285	〃	Ⅶ A 2 c	ヌ－8－16	350.0	〃	30	
図Ⅳ－29－286	〃	Ⅶ A 4	タ－4－11	147.0	〃	39－1－32	
287	〃	〃	タ－9	57.0	〃	39	
288	たたき石	〃	ホ－3－15	162.0	〃	40	中・後期
289	〃	Ⅶ A 5	カ－4－12	208.0	〃	38	早期
290	〃	〃	へ－5－4	190	〃	37	早期？
291	〃	〃	ル－4－14	501	〃	44	
292	〃	〃	ル－4－10	460	〃	43	早期？
293	〃	〃	タ－4－1	680	〃	41	早期？
294	〃	〃	カ－8	950	〃	39－2－52	早期
295	〃	〃	ル－8－15	750	〃	50	早期
296	〃	〃	リ－9－5	1,250	珪岩	55	早期
297	〃	〃	ホ－7－16	800	安山岩	56	早期？
図Ⅳ－30－298	〃	Ⅶ B	ト－9	710	〃	57	中期
299	〃	〃	ワ－8	800	〃	58	中期
300	〃	Ⅶ C 1	タ－8	169	〃	40－1－1	早期
301	〃	〃	ト－9－10	176	〃	2	早期
302	〃	〃	へ－3－12	379	〃	4	中・後期
303	〃	〃	カ－9－1	260	〃	5	中・後期
304	〃	〃	チ－8－1	210	〃	6	早期？
305	〃	〃	チ－8－10	920	珪岩	17	早期？
306	〃	〃	オ－4	450	頁岩	7	
307	〃	〃	チ－4－4	170	珪岩	8	早期？
308	〃	〃	へ－7－14	223	頁岩	10	早期？
309	〃	〃	ヲ－5－8	365	珪岩	13	早期？
310	〃	〃	ト－3	750	〃	16	早期
311	〃	〃	ト－9－12	550	〃	15	早期
312	〃	Ⅶ C 2	へ－9－8	124	安山岩	4－2－20	

挿図番号	名称	分類	発掘区	重量(g)	材質	写真図版	備考
図Ⅳ−31−313	たたき石	Ⅷ C 2	ワ−9−10	84.0	安山岩	4−2−21	早期?
314	〃	〃	ヨ−8−3	117.0	〃	23	
315	〃	〃	ト−8−12	420	珪岩	25	
316	〃	〃	チ−8−16	74	安山岩	22	早期?
317	〃	〃	チ−4−4	345	珪岩	12	早期?
318	〃	〃	ト−9−11	610	安山岩	30	早期
319	〃	〃	ワ−8−8	469	〃	29	(風倒木痕)
320	〃	〃	ト・ヨ−15	242	〃	28	
321	〃	〃	ル−4−11	600	〃	27	
322	〃	〃	チ−9−2	790	珪岩	19	早期?
323	〃	〃	チ−9	650	〃	18	早期
324	〃	Ⅷ C 3	ヨ−9−9	39.0	安山岩	32	早期
325	〃	〃	ワ−9−5	54.0	〃	33	
326	〃	〃	チ−8	570	〃	37	
327	〃	〃	カ−5−13	210	凝灰岩	34	早期
図Ⅳ−32−328	〃	〃	ヘ−9−6	451	安山岩	36	
329	〃	〃	チ−8−1	320	〃	38	早期?
330	〃	〃	ワ−8	373	〃	39	(風倒木痕)
331	石錐	Ⅷ A 2	ホ−9−7	45.0	〃	41−1−2	早期?
332	〃	〃	ト−5−2	28.7	〃	1	早期?
333	〃	〃	ヨ−4−7	52.0	〃	4	
334	〃	〃	ト−9−5	67.0	〃	3	早期?
335	〃	〃	ヲ−8−12	166.0	〃	7	
336	〃	〃	チ−4−7	118.0	〃	9	早期?
337	〃	〃	ヨ−9−7	189.0		10	早期
338	〃	Ⅷ A 4	ヌ−4−8	38.0	黒色片岩	5	早期
339	〃	〃	ル−4−4	130.0	安山岩	6	
340	〃	Ⅷ A 1	ワ−8−1	311.0	〃	11	早期
341	たたき石	Ⅷ A 4	ヘ−9−16	275.0	〃	8	早期
342	〃	Ⅷ A 2	ヌ−14	950.0	〃	12	中期
343	〃	Ⅷ A 4	リ−8	450.0	〃	13	中期
図Ⅳ−33−344	砥石	Ⅺ A 2	ト−7−11	(82.0)	砂岩	41−2−2	破損・早期?
345	〃	〃	カ−4−8	(231.0)	〃	4	破損
346	〃	〃	ワ−4−5	(133.0)	〃	15	破損
347	〃	〃	ワ−4−16	(20.1)	〃	11	破損・早期?
348	〃	〃	ヘ−4−10	(121.0)	〃	14	破損
349	〃	Ⅺ A 3	リ−9−3	(350.0)	〃	17	破損
350	〃	Ⅺ A 2	リ−5−1	(66.5)	〃	18	破損
351	〃	Ⅺ A 3	タ−8	(119.0)	〃	13	破損
352	〃	Ⅺ A 2	ル−8	(162.0)	〃	16	破損
353	〃	〃	カ−4−6	(120.0)	〃	9	破損・早期
354	〃	〃	ワ−8−3	(315.0)	〃	7	破損・早期
355	〃	Ⅺ A 3	ヘ−7−9	(435.0)	安山岩	12	破損
356	〃	Ⅺ A 2	ル−9−10	(63.0)	砂岩	8	破損・早期
357	〃	〃	ヘ−8−4	920.0	〃	5	早期
図Ⅳ−34−358	台石	Ⅸ B	カ−4	14,000	凝灰岩	42−1−1	
359	〃	〃	ル−4	9,500	安山岩	2	
360	石皿	Ⅸ A	ホ−9−4	(1,360)	砂岩	3	破損・早期?
361	〃	〃	チ−8	(8,000)	安山岩	4	破損・早期

V まとめ

1 遺構

構築時期について

今回の調査で発見された遺構のうち，遺物の出土状態などから，つくられた時期を推定できるものは二ヵ所の竪穴住居跡である。H－1は縄文時代中期前葉に，H－2は後期初頭に構築されたものと考えられる。掘りこみ面はH－1がⅢ層下位に，H－2がⅢ層上位にある。

このほかの遺構については，それぞれの掘りこみ面および覆土中から出土した遺物を，二つの竪穴住居跡と比較することによって，おおよその時期を推定し得るにすぎない。

検出された11ヵ所のTピットのうち，掘りこみ面が確認できたのは，TP－1・3・4・8である。いずれもⅢ層の中位から掘りこまれている。このほかのTピットは壙底の深さ，あるいは覆土中にⅢ層の黒色腐植土が入っていることから，TP－1などとほぼ同時期に掘られたものと思われる。これらのこととTピットの覆土中から出土した遺物のうち，もっとも新しいものが縄文時代後期初頭の土器片であることを総合すると，発見された11ヵ所のTピットは住居跡H－1とH－2の構築時期の間，すなわち縄文時代中期後半に掘りこまれた可能性があろう。

4ヵ所の土壙のうち，掘りこみ面が確認できたものは，P－2のみである。この土壙はⅢ層上面から掘りこまれており，住居跡H－2の構築時期に近い頃に掘りこまれたものと推定される。P－1とP－4は覆土上部の黒色腐植土のセクションをみると，Ⅲ層中位あるいは下位に掘りこみ面があったものと考えられる。P－3の覆土下層は意図的に埋め戻されたものと推定され，この覆土中からは縄文時代後期初頭のものと考えられる土器片が出土していることから，掘りこまれた時期が，これより遡らないことが推定できる。

焼土は5ヵ所検出されている。このうちF－2と3は，それぞれTP－10と9の上部の黒色土中にあることから，住居跡H－2の構築時期に近いものと考えられる。

遺構の分布について

二つの竪穴住居跡は構築の時期が異なっているが，いずれも調査区内の舌状の微高地上を占地しており，ここが竪穴住居構築に適した場所であったことが推定される。土壙と焼土跡もそれぞれ，この微高地上に分布している。

Tピットは舌状微高地の周辺から住居跡H－2を囲むように分布している。Tピットは，その配列が問題とされる遺構であるが，11ヵ所のうち幅が広いタイプTP－3・5・6は，ほぼ29.2mの等高線に沿って検出されている。この配列をみると工事用道路で削平された部分にも，これと同様のTピットが存在した可能性も考えられる。このほかの細い溝状のTピットは，等高線29.4mに沿うTP－9・4・10と，これの東側に並ぶTP－2・7・11の二つのグループに分けられるようにみえる。TP－1は調査区北東部の低い部分にあり，ほかのTピットと

は異なるグループの一つと考えられる。

土構の性格について

P－1とP－3は壁がほぼ垂直に近く，壙底は平らである。またそれぞれ覆土の下層がいくつかの土層が混じり合った土であることから，意図的に埋め戻された土壙と考えられる。これらのことから，人骨などは検出されなかったが，この二つの土壙は墓壙として掘りこまれたものとも考えられる。しかしP－1の壙底に置かれた34個の角礫，P－3の壙底に検出された十文字状の細い溝跡および炭化した木片などが，どのような意図をもつものか判断するのは困難である。P－2とP－4の覆土は，周囲から流れこんだものと考えられる。掘りこみ面，検出位置からみて，それぞれ住居跡H－2，H－1に関連する遺構の可能性があろう。

2　遺物

包含層出土遺物の分布について

遺物包含層（Ⅲ層・Ⅳ層）からは，土器片約7,000点，定形的石器約1,500点が出土した。このほかに，フレイク・コア・原石などが合計約38,500点ある。土器を層位別にみると，Ⅲ層上位・中位には縄文時代後期・中期，Ⅲ層下位とⅣ層には前期から早期のものが，出土する傾向があった。しかし，第Ⅱ章3でふれているが，Ⅲ層・Ⅳ層とも，ところどころで攪乱を受けており，層厚もところによって相違しているために，個々の遺物を層位的におさえることは困難であった。

上記のことから，ここでは1mグリッド単位の遺物を集計して，分布図とした。

遺物の分布状態をみると，調査区西側から南東に向って張り出す舌状の微高地とその周辺から多く出土している。調査区南端の急斜面および，北東の沢にあたる部分では，非常に少ない。南端部では，Ⅲ層の黒色土の上部が削平されていたことも影響しているものと思われる。また，調査区中央部を横切る農道の部分も，Ⅲ層上部が削られており出土遺物は少ない。

土器の分布（図Ⅴ－1・図Ⅴ－2）

Ⅰ群の土器は，調査区域の広い範囲から出土しているが，類別の分布状態は，それぞれにまとまった範囲の分布傾向を示している。

Ⅰ群a類の分布範囲は数ヵ所に分散している。もっとも密度が高い所は，ヲ－8グリッド周辺である。b－1類とb－2類は，北半部のヲからカのラインの間の狭い範囲に多く，さらに南半部にも散点的にみられ，両者は非常によく似た分布傾向を示している。

b－3類は調査区の西半部に多く，東へ行くにしたがって少なくなっている。

b－4類は調査区全域から出土した。しかし，分布密度は一定ではなく発掘区の北半部に集中して出土する傾向があった。南西部にも集中する範囲があるが，南東部では散点的であった。

Ⅱ群a類の分布は，Ⅰ群b－3類を除いたⅠ群b類全体の分布と同様の傾向にある。とくにヲ－8・9グリッド，ワ－8・9グリッド周辺では，Ⅰ群b－1・2類と分布範囲が重なっており，さらに，南西部の斜面ではb－4類とⅢ層下位で伴出する例が多かった。

Ⅲ群a類は，今回の調査で出土した土器片の中ではⅠ群の土器についで多く，その分布範囲は調査区全域に広がっている。全体でみると西側に多く，とくにTピットの周辺では，密度が高くなっている。

Ⅲ群b－1類からb－3類に相当する土器は，わずかに8点が出土した。

Ⅳ群の類は，大部分が調査区西半部に出土している。とくに竪穴住居跡H－2周辺とL－4・ヲ－4グリッド付近に多い。しかし全体の出土点数は少ない。調査区西側の畑地からは，耕作時，長さ50～70cmほどの自然石が10数個発見されている。ここには，縄文時代後期の土器が散布していることから，この時期の配石遺構に用いられた石の一部の可能性があろう。発掘区から出土した後期の遺物は，これと関係あるものかもしれない。

石器の分布（図Ⅴ－2～図Ⅴ－4）

石器のうち，40%にあたる約600点は，Ⅲ層上位とⅢ層中位から出土している。このほかの60%にあたる約900点は，Ⅲ層下位とⅣ層から出土した。Ⅲ層下位とⅣ層中位からは，ⅢA1bに分類したつまみ付ナイフ，擦切磨製石斧，断面が三角形状の柱状礫を用いたすり石，小型で河原石の両端を打ち欠いてつくられた石錘など縄文時代早期の遺跡にともなう石器が多数出土し，層位的に出土した型式土器との間には，おおよその対比が可能である。しかし，前述したように後世の攪乱等もあり層位を厳密に識別することができなかったため，出土層位によって個々の石器の時期を確定するのは困難であった。このため，ここではおもに形態によって分類した器種について，分布状態を示した。（実測図を掲載した石器のうち，層位，土器との伴出関係によって推定した時期は，表Ⅳ－2に記載した。）

石鏃・槍先類は，微高地上の全域に広がって出土した。このうち，IA1，IA2，IBとIC1，IC2に分類したものの多くは，早期のものと考えられる。ID2は，竪穴住居跡H－2およびTピットの周辺に多く分布しており，形態からみても，中期から後期のものと考えられる。

石錐のうちⅡA1，ⅡA2に分類したものは，7点である。すべてⅣ層から出土しており，とくに調査区東南部では，Ⅰ群a類の土器と共伴していることから，この石器は早期のものと考えられる。

つまみ付ナイフのⅢA1bに分類したものの多くは，Ⅲ層下位とⅣ層よりⅠ群の土器にともなって出土している。ⅢA1aに分類したものの多くはⅢ層上位とⅢ層中位より出土し，形態からも中期および後期のものと考えられる。

笹状石器は，Ⅲ層下位とⅣ層から出土したものが多い。とくにⅠ群b類にともなって出土したものが多いことから，早期のものと考えられる。

スクレイパーは，石器のうちで，もっとも出土点数が多い。形態によって時期を判断することは困難だが，このうち約60%がⅢ層下位・Ⅳ層から出土しており，これらのスクレイパーは早期のものが多いと思われる。とくに半月形のもの，ⅢD4，ⅢD5に分類したものは，Ⅰ群の土器にともなって出土した例が多い。

すり石は，微高地上のほぼ全域から出土しているが，このうちⅦA1・ⅦA5に分類したもの

はⅠ群の土器と共伴している例が多く，早期の石器と考えられる。

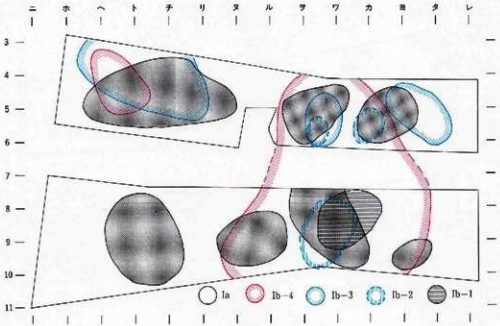
たたき石は，数ヵ所に分かれて分布しているが，フレイク・コアおよび台石の分布傾向と類似していることから，石器製作と関連するものと考えられる。

石鏃は，全域に散点的に分布している。早期の貝殻文土器にともなう例が多いことが知られているが，ここでは，早期・中期・後期のものが，混在している。小形のものは早期，大型のものは中期・後期のものとみられる。

砥石は，Ⅲ層下位では調査区西半部に，Ⅳ層では東側に多い。すべて薄い板状のものである。

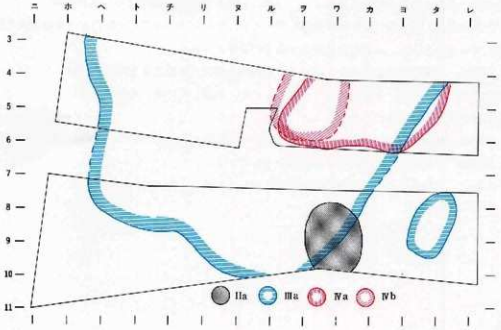
石皿は，すり石とほぼ同様の分布範囲を示している。

台石は，たたき石とほぼ同様の分布範囲を示している。

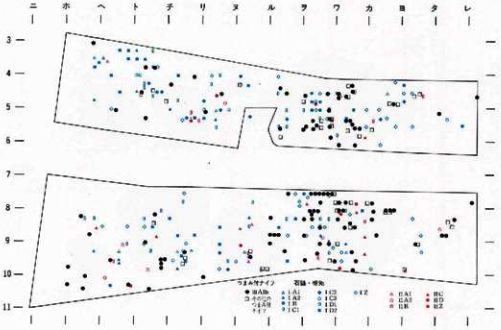


(1) 土器（Ⅰa～Ⅰb－4）

図Ⅴ－1　遺物分布図

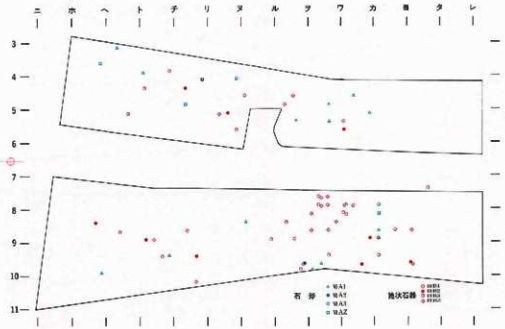


(2) 土器（IIa～IVb）

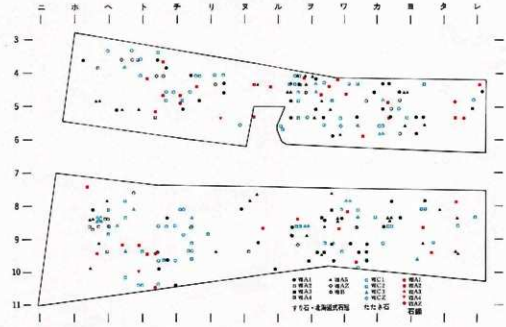


(1) つまみ付ナイフ・石鏃・槍先・石錐

図V－2 遺物分布図

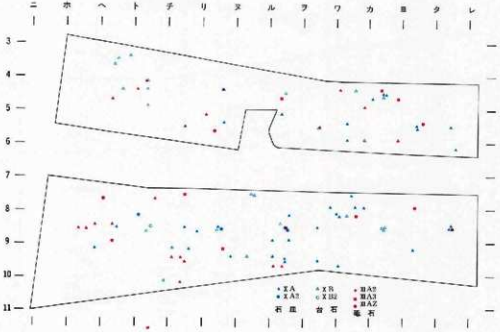


(2) 石斧，笠状石器



(3) すり石・北海道式石冠・たたき石・石錘

図V－3 遺物分布図



(4) 砥石・石皿・台石

図Ⅴ－4 遺物分布図

参考・引用文献

——— (1970) 『尻岸内町史』 尻岸内町役場
瀬川秀良 (1974) 『日本地形誌 北海道地方』 朝倉書店
——— (1971) 松浦武四郎 『三航艮爽日誌』 吉川弘文館刊
小笠原忠久 (1984) 『恵山貝塚』 尻岸内町教育委員会
小笠原忠久 (1984) 『古武井9遺跡』 尻岸内町教育委員会
——— (1978) 『北海道の文化財』 北海道教育委員会編
宮塚義人 (1984) 「縄文文化黎明期の北海道」『北海道の研究1』考古篇Ⅰ
小笠原忠久 (〃) 「北海道西南部における縄文時代前・中期の集落」『北海道の研究1』考古篇Ⅰ
森田知忠・遠藤香澄 「Tピット論」『北海道の研究1』考古篇Ⅰ
木村尚俊 (1980) 「3 縄文文化早期」『北海道考古学講座』 みやま書房
高橋正勝・小笠原忠久 (〃)「4 縄文文化前期・中期」『北海道考古学講座』 みやま書房
加藤邦雄 (〃) 「5 縄文文化後期・晩期」『北海道考古学講座』 みやま書房
後藤秀彦 (1982) 「4 早期の土器 平底土器」『縄文文化の研究3』 雄山閣
名久井文明 (1982) 「4 早期の土器 貝殻文尖底土器」『縄文文化の研究3』 雄山閣
加藤邦雄 (〃) 「5 前期の土器 縄文尖底土器」『縄文文化の研究3』 雄山閣
高橋正勝 (〃) 「2 中期の土器 北海道南部の土器」『縄文文化の研究4』 雄山閣
鹿野光行 (〃) 「3 後期の土器 北海道の土器」『縄文文化の研究4』 雄山閣
——— (1980) 『長七谷地貝塚遺跡発掘調査報告書』 青森県教育委員会
——— (1982) 『長七谷地遺跡発掘調査報告書』 八戸市教育委員会
松下 亘 (1974) 『西殿』 北海道第4紀研究会
児玉作左衛門・大場利夫 (1953)「函館市住吉町遺跡の発掘について」『北方文化研究報告』 8
児玉作左衛門・大場利夫 (1954)「函館市春日町出土の遺物について」『北方文化研究報告』 9
大場利夫他 (1955) 『函館市梁川町遺跡』 市立函館博物館
大場利夫他 (1955) 『桧山南部の遺跡』 上ノ国村教育委員会, 江差町教育委員会
大場利夫他 (1956) 『手稲遺跡』 札幌郡手稲町
竹田輝雄 (1955) 「豊浦アルトリ遺跡」『先史時代』 2
竹田輝雄 (1956) 「北海道豊浦町アルトリ遺跡について」『上代文化』 26
吉崎昌一他 (1969) 『函館空港整備事業の内遺跡発掘調査実績報告』 函館市教育委員会
横山英介他 (1979) 『函館空港 中野遺跡』
千代 肇 (1972) 『涌元遺跡』 知内町教育委員会
千代肇編 (1977) 『函館空港第4地点・中野遺跡』 函館市教育委員会
高橋正勝 (1974) 「知内町涌元遺跡出土の土器と北海道南西部の縄文時代後期前半について」『北海道の文化』 29
高橋正勝 (1966) 「北海道七飯町鳴川遺跡の尖底貝殻文土器について」『石器時代』 8
高橋正勝 (1966) 「函館市見晴町遺跡の資料」『北海道青年人類科学研究会誌』 8
高橋正勝 (1972) 「北海道における縄文中期の終末」『北海道青年人類科学研究会誌』 9・10
田原良信 (1979) 『見晴町B遺跡発掘調査報告書』 函館市教育委員会
名久井文明 (1974) 「北日本縄文時代早期編年に関する一試考 (II)－北海道早期後半の吟味」

『考古学雑誌』65－1
名取武光他　(1958)　「入江貝塚」『北方文化研究報告』13
林　謙作　(1982)　「北海道南部・東北地方」『縄文土器大成 1．早・前期』
沢　四郎　(1982)　「北海道東北部」『縄文土器大成 1．早・前期』
江坂輝弥　(1970)　『石神遺跡』森田村教育委員会
大場利夫他 (1965)　「函館郊外煉瓦台遺跡」「北方文化研究報告」20
――――　(1958)　『サイベ沢遺跡』　市立函館博物館
――――　(1976)　『元和』　乙部町教育委員会
大島直行　(1976)　『円筒土器上層式土器の認識に関する問題』『北海道考古学』12
――――　(1972)　『大安在 B 遺跡』　上ノ国町教育委員会
大場利夫他 (1962)　「白老町虎杖浜遺跡の発掘について」『北方文化研究報告』17
――――　(1979)　『有珠川 2．植苗 3 遺跡』　北海道教育委員会
――――　(1979)　『蛍沢遺跡』　青森県蛍沢遺跡発掘調査団
――――　(　　)　『小田野沢　下田代納屋 B 遺跡発掘調査報告書』
――――　(1981)　『宮井の沢の遺跡』　㈶　北海道埋蔵文化財センター
――――　(1982)　『川上 B 遺跡』　㈶　北海道埋蔵文化財センター
――――　(1982)　『虎杖浜 3 遺跡』　㈶　北海道埋蔵文化財センター
――――　(1978)　『美沢川流域の遺跡群II』　北海道教育委員会
――――　(1977)　『柴浜遺跡』　乙部町教育委員会
――――　(1983)　『白坂』　松前町教育委員会
――――　(1975)　『松前町地石遺跡』　松前町教育委員会
――――　(1979)　『札幌市文化財調査報告書　XXI』　札幌市教育委員会
――――　(1963)　「北海道に於ける石錘の研究(1)(2)」『宮崎大学学芸部紀要』17
大場利夫・竹田輝雄 (1961)「住吉町式土器をめぐる貝殻文土器文化の展開」『民族学研究』26－1
江坂輝弥　(1957)　「ムシリ I 式土器について」『先史時代』5
竹田輝雄　(1959)　「北海道出土貝殻文土器と絡条体圧痕文様ある土器の覚書」『ひだか』5
竹田輝雄　(1959)　「貝殻文土器文様の要素摘出」『先史時代』8
佐藤達夫他 (1960)　「早稲田貝塚」『上北考古報告』1
――――　(1975)　『森越』　知内町教育委員会
――――　(1980)　『白尻 B 遺跡』　南茅部町教育委員会
――――　(1981)　『発茶沢』　青森県教育委員会
――――　(1974)　『松前町大津遺跡発掘調査報告書』　松前町教育委員会
――――　(1975)　『鳥崎遺跡』　森町教育委員会
――――　(1980)　「オカシナイ・元和 15 遺跡」　乙部町教育委員会
村越　潔　(1974)　『円筒土器文化』　雄山閣
――――　(1967)　『サイベ沢 B 遺跡調査報告書』　市立函館博物館・亀田町教育委員会

中浜E遺跡の古植生について

北海道開拓記念館研究員　山田悟郎

1　試料および処理方法

ここで取扱った土壌試料は中浜E遺跡の発掘調査に際して，発掘担当者によって採取されたものである。

H－1号住居跡からは床面から出土した完形土器内を充塡していた腐植土が，H－2号住居跡では住居跡内のPit 壙底を埋積した腐植土と床面直上の腐植土が，Pit Ⅰでは壙底の腐植土24点がそれぞれ採取されている。

試料処理にあたっては土壌試料500 g を次のように処理して，各3枚のプレパラートを作成した。

アルカリ処理（24時間）－水洗（3週間）－沈澱法による砂・礫の除去－混酸処理－水洗－アルカリ処理－水洗－比重分離－水洗－アセトリシス処理－水洗－HF 処理－水洗

検鏡・写真撮影は位相差装置を併用して通常400倍で行ない，必要に応じて1,000倍で行った。

同定にあたっては，樹木花粉数が200個以上に達するまで順次出現した花粉，胞子を無作為に同定し計数するよう努めたが，全プレパラートを検鏡しても200個以上に達した試料はなかった。

尚，花粉，胞子の出現数は表に示した。

2　分析結果

各試料の花粉・胞子の含有数は少ないものの，4点の試料から樹木花粉17属2科，草本花粉2属15科，胞子2科，形態分類胞子2種類を検出した。

その内訳および想定される母植物は次のとおりである。

樹木：*Abies*（モミ属：トドマツ），*Salix*（ヤナギ属：ネコヤナギ・バッコヤナギ・オノエヤナギ他），*Juglans*（クルミ属：オニグルミ），*Alnus*（ハンノキ属：ハンノキ，ケヤマハンノキ），*Betula*（カバノキ属：シラカンバ・ウダイカンバ），*Carpinus*（クマシデ属：サワシバ他），*Corylus*（ハシバミ属：ツノハシバミ他），*Castanea*（クリ属：クリ），*Fagus*（ブナ属：ブナ），*Quercus*（コナラ属：コナラ・ミズナラ・カシワ），*Ulmus*（ニレ属：ハルニレ・オヒョウ），*Magnolia*（モクレン属：ホウノキ・コブシ），*Hydrangea*（アジサイ属：ノリウツギ・ツルアジサイ他），*Phellodendron*（キハダ属：キハダ），*Acer*（カエデ属：ハウチワカエデ・イタヤカエデ他），*Tilia*（シナノキ属：シナノキ・オオバボダイジュ），Araliaceae（ウコギ科：ハリギリ・コシアブラ・タラノキ），*Fraxinus*（トネリコ属：ヤチダモ・アオダモ），Ericaceae（ツツジ科：ヤマツツジ他）

草本：Polygonaceae（タデ科：オオイタドリ・ミゾソバ・ギシギシ他），Chenopodiaceae（アカザ科：ハマアカザ他），Ranunculaceae（キンポウゲ科：カラマツソウ，ニリンソウ他），Cruci-

ferae（アブラナ科・タネツケバナ・イヌガラシ・ナズナ他），Saxifragaceae（ユキノシタ科：ネコノメソウ・エゾネコノメソウ他），Rosaceae（バラ科：ワレモコウ・オニシモツケ・オオダイコンソウ他），Valerianaceae（オミナエシ科：オミナエシ他），Haloragaceae（アリノトウグサ科：アリノトウグサ），*Aralia*（タラノキ属：ウド），Umbelliferae（セリ科：エゾニュウ・ヤブジラミ他），Geraniaceae（フウロウソウ科：チシマフウロウ・ゲンノショウコ），Cichorioideae（タンポポ亜科：コウゾリナ・ヤマニガナ・ハチジョウナ他），Carduoideae（キク亜科：ヨツバヒヨドリ・フキ・チシマアザミ・ハンゴンソウ・エゾノコンギク他），*Artemisia*（ヨモギ属：オオヨモギ・オトコヨモギ他），Gramineae（イネ科：クマイザサ・イワノガリヤス・ヨシ・ススキ・エノコログサ他），Cyperaceae（カヤツリグサ科：エゾアブラガヤ・ヒラギシスゲ・オクノカンスゲ他），Liliaceae（ユリ科：バイケイソウ・オオバナノエンレイソウ・オオウバユリ・ユキザサ他）

胞子：Osmundaceae（ゼンマイ科：ヤマドリゼンマイ・ゼンマイ他），Lycopodiaceae（ヒカゲノカズラ科：ヒカゲノカズラ他）

形態分類胞子：Monolate type spore（シダ類），Trilete type spore（ワラビ他）

花粉・胞子の出現数が多いH－2号住居跡の2点の試料では樹木の *Quercus*・*Fagus*・*Alnus*・*Salix*・*Betula*・*Ulmus*・*Acer*・*Tilia* と草本の Gramineae・*Artemisia*・Ranunculaceae・Polygonaceae・Umbelliferae・Carduoideae と羊齒植物の Monolate type spore を主とした花粉化石群集が確認された。

樹木では *Quercus*・*Fagus*・*Alnus* が，草本，羊齒植物では Gramineae・*Artemisia* がそれぞれ優勢である。

針葉樹の出現数は少なく *Abies* がわずかに出現するのみで，冷温帯落葉広葉樹の出現率が高い。

しかし，総花粉，胞子に対する樹木花粉の出現比は低く，草本花粉の出現比がいずれの試料でもきわめて高くなっている。

3　古植生について

H－2号住居跡で確認された花粉化石群集をもとに，縄文時代中期～後期初頭に位置づけられた中浜E遺跡周辺の古植生を次のように推定した。

遺跡背後の山地や沢沿いにはミズナラ，コナラ，ブナ，ハンノキ，ネコヤナギ，シラカンバ，ハルニレ，イタヤカエデ，ハウチワカエデ，シナノキ，サワシバを主とした冷温帯林が分布していたが，遺跡周囲の林はまばらで住居跡を中心とした生活空間は，クマイザサ，ススキ，オオヨモギ，オオイタドリ，カラマツソウ，エゾニュウ等を主とした草地にとりかこまれていた。

住居跡周辺にはチシマフウロウ，ゲンノショウコ，イヌガラシ，タネツケバナ，エノコログサ，フキ，コウゾリナ等が繁り，ネコノメソウ，エゾネコメソウ，アリノトウグサ等の生育が

可能な湿った場所もあった。

また，近くにミズナラ，コナラ，オニグルミ，クリ，ツノハシバミが生育し，秋にはこれらの堅果が採集されたであろう。

参考文献

北村四郎・岡本省吾（1970）：原色日本樹木図鑑，保育社

北村四郎・村田　源・堀　勝（1971）：原色日本植物図鑑（上），草本編（I）・合弁花類，保育社

北村四郎・村田　源（1970）：原色日本植物図鑑（中），草本編（II），離弁花類，保育社

北村四郎・村田　源・小山鐵夫（1970）：原色日本植物図鑑（下），単子葉類，保育社

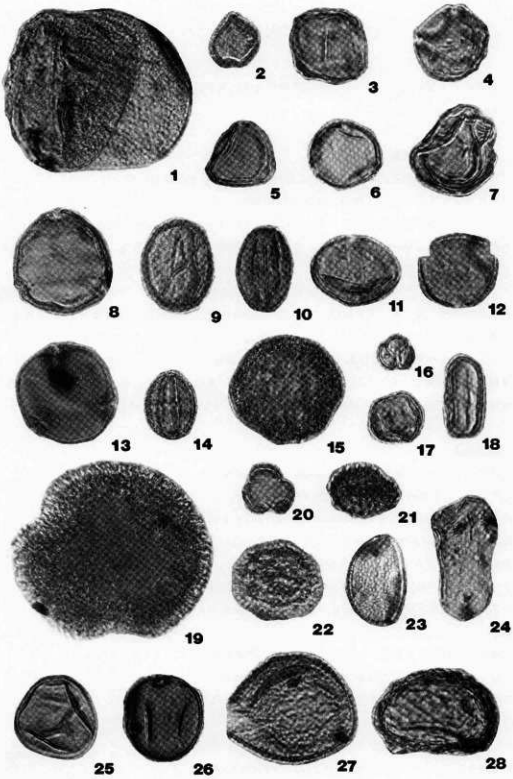
田川基二（1971）：原色日本羊歯植物図鑑，保育社

	H－1 床面出土の完形土器内	H－2 Pit壊底	H－2 床　面	Pit－1 壊　底
Abies	－	4	1	－
Salix	－	16	3	－
Juglans	－	8	2	－
Alnus	1	32	5	2
Betula	1	12	3	1
Carpinus	－	6	3	－
Corylus	－	1	1	－
Castanea	－	－	－	2
Fagus	－	24	10	－
Quercus	1	38	14	3
Ulmus	4	12	9	－
Magnolia	－	3	1	－
Hydrangea	1	3	－	－
Phellodendron	－	2	－	－
Acer	－	12	5	1
Tilia	1	16	3	1
Araliaceae	－	4	4	1
Fraxinus	－	2	3	－
Ericaceae	－	1	－	－
Polygonaceae	3	27	11	2
Chenopodiaceae	1	－	－	－
Ranunculaceae	19	94	31	16
Cruciferae	8	14	15	7
Saxifragaceae	5	6	4	－
Rosaceae	－	8	4	1
Valerianaceae	－	－	－	1
Haloragaceae	－	－	2	－
Aralia	－	－	2	－
Umbelliferae	3	24	8	2
Geraniaceae	1	－	－	－
Cichorioideae	－	3	－	－
Carduoideae	15	21	12	6
Artemisia	106	256	129	43
Gramineae	130	552	192	84
Cyperaceae	1	3	2	－
Liliaceae	－	2	－	－
Osmundaceae	1	8	5	1
Lycopodiaceae	1	2	2	－
Monolate type spore	13	56	8	1
Trilete type spore	1	2	2	2
Total grains	317	1,274	498	175

各試料から検出された花粉・胞子数

1. *Abies*	(H−2. Pit壁底)
2. *Salix*	(H−2. 床面)
3. *Alnus*	(H−2. Pit壁底)
4. 〃	(〃)
5. *Betula*	(〃)
6. *Carpinus*	(〃)
7. *Juglans*	(〃)
8. *Fagus*	(〃)
9. *Quercus*	(〃)
10. 〃	(〃)
11. *Ulmus*	(H−2. 床面)
12. *Acer*	(〃)
13. *Tilia*	(〃)
14. Polygonaceae	(H−2. Pit壁底)
15. 〃	(〃)
16. Ranunculaceae	(〃)
17. 〃	(〃)
18. Umbelliferae	(〃)
19. Geraniaceae	(H−1. 床面出土の完形土器内)
20. *Artemisia*	(H−2. Pit壁底)
21. Carduoideae	(H−2. 床面)
22. 〃	(H−2. Pit壁底)
23. Liliaceae	(〃)
24. Cyperaceae	(H−2. 床面)
25. Gramineae	(H−2. Pit壁底)
26. 〃	(〃)
27. Osmundaceae	(〃)
28. Monolate type spore	(〃)

(1,×1.100・2〜28,×1.200)



中浜E遺跡出土の花粉

完新世の火山灰について

花　岡　正　光

本遺跡の土層断面は，2～3枚の完新世の火山灰層が認められる。火山灰の特徴を記載するために鉱物組成を調べた。

地形と堆積物の概要

遺跡は海成段丘面上に立地している。背後の山地斜面との間は緩斜面をなし，ローム[1]をマトリックスとする安山岩の角礫層（礫質斜面堆積物）から成る。海側の段丘崖で観察すると，段丘面はローム層で覆われている。ローム層の下位には分級の良い砂層がある。緩斜面をつくる角礫層は，ローム層の堆積面に漸移しているが，両層の層序関係は不明である。これら角礫層とローム層とを基盤として黒色腐植土（くろぼく）が発達している。

完新世の火山灰は，黒色腐植土中に挟まれる形で出現する（図1）。リー4附近では，住居跡H－2の凹地を埋めるように堆積している。この火山灰は，褐色（7.5ＹＲ4／4）のシルト質降下火山灰（リー4の2層）である。ヨ－9附近では，上・下二枚の火山灰層が認められる。上位のものは赤黒色（2.5ＹＲ1.7／1）のシルト質降下火山灰（ヨ－9の2層），下位のものは褐色（10ＹＲ4／6）のシルト質降下火山灰（ヨ－9の4層）である。後者二枚の火山灰は腐植の集積が進み，上・下の腐植土との層界は鮮明ではない。そのため，粒度も粘土分が多い。

鉱物組成

試料はできるだけ新鮮な部分から採取し，次の手順で処理した。湿重量約50ｇを取り椀がけ法によりシルト・粘土分を除去→粒径1/4～1/8 mmのものについて6％H_2O_2，10％HCl処理（50～60℃で湯煎，上澄液が澄むまで繰り返す）→カナダバルサムを封入剤としてプレパラートを作成→偏光顕微鏡下で300粒以上の鉱物を検鏡→各鉱物の量比を粒数％で表わし，火山ガラスの形態を観察。

検鏡結果を図2に示す。処理後の色はいずれも灰白色となった。鉱物組成・火山ガラスの形態から，これら三つの試料の火山灰はそれぞれ異なるものである。リー4の2層はほとんど全て火山ガラスから成る火山灰である。火山ガラスは，泡壁がリッジ状に直線～曲線的に伸びているもの（Ｌ－Ｃ型と仮称）が73％，平板状のもの（Ｐ型と仮称）が12.2％，気泡が繊維状に平行に伸びて

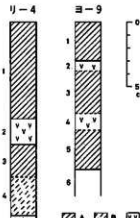


図1　地質柱状図

凡例　A：黒色粘土質腐植土
B：暗褐色粘土質腐植土
C：シルト質降下火山灰
D：ローム
E：礫質斜面堆積物

いるもの（F型と仮称）が9.4%を示す。ヨー9の2層は，三つの試料の中では角閃石（全て緑色系）を含む点が特徴である。$_{c}P_{x}$（単斜輝石）/$_{o}P_{x}$（斜方輝石）は0.28。斜方輝石は自形のものが多い。火山ガラスは，L－C型が35.5%，塊状で，泡壁のつくる模様が網目状に見えるもの（M型と仮称）が19.6%，P型が9.3%，薬果状のもの（B型と仮称）が9.3%を示す。ヨー9の4層は，$_{c}P_{x}$/$_{o}P_{x}$が0.17。火山ガラスは，M型が79.7%，針状の気泡・条線を有するもの（N型と仮称）が15.4%を示す。

上記のように，リー4の2層はガラス質の特徴的な火山灰である。この火山灰は，登別市の川上B遺跡におけるグリッドH－100－Cの第11層に，鉱物組成，火山ガラスの型とその量比が酷似し，同一火山灰である可能性が極めて高い。

これら三種の火山灰の噴出源は目下のところ不明であるが，遺物との関係から，リー4の2層とヨー9の2層は縄文時代後期以降，ヨー9の4層は縄文時代早～中期の噴山物と考えられる。

注）

1）「粘土化した更新世の火山灰」の意味で使用する。

引用・参考文献

北海道火山灰命名委員会（1982）：北海道の火山灰，札幌，23pp.

北海道埋蔵文化財センター（1985）：川上B遺跡―北海道縦貫自動車道登別地区埋蔵文化財発掘調査報告書―

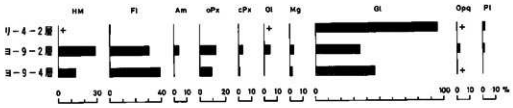


図2 鉱物組成

凡例　HM：重鉱物　Fl：長石（斜長石）　Am：角閃石　oPx：斜方輝石
cPx：単斜輝石　Ol：橄欖石　Mg：磁鉄鉱　Gl：火山ガラス
Opq：不明鉱物（風化粒）　Pl：植物起源粒　＋：1%〉

写 真 図 版

(1)　中浜E遺跡より眺めた恵山

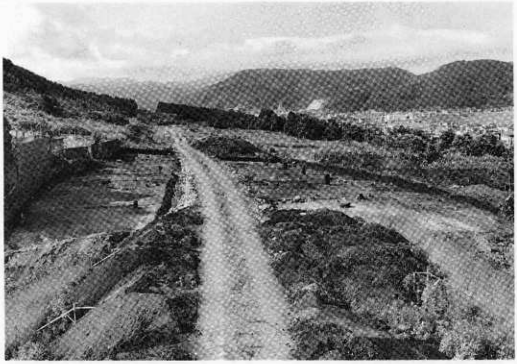
(2)　中浜川と日暮山

図版　2

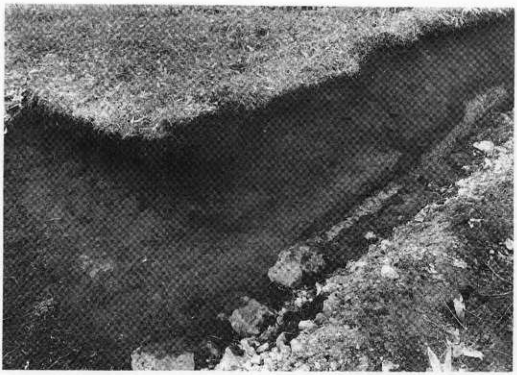
(1)　発塩前の風景

(2)　伐採作業

(1) 調査風景



(2) 発掘後の風景



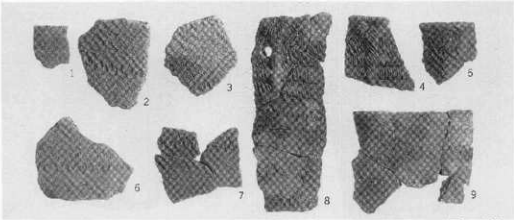
(1) 法面で確認されたH－1断面

(2) H－1完掘

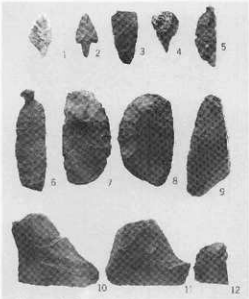
住居跡H－1（道構）

(1) H－I 炉

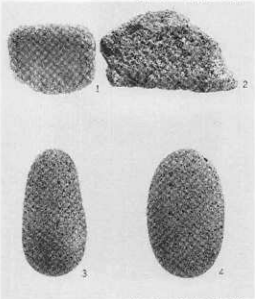
(2) H－I 炉の深鉢



(3) H－I 覆土の土器

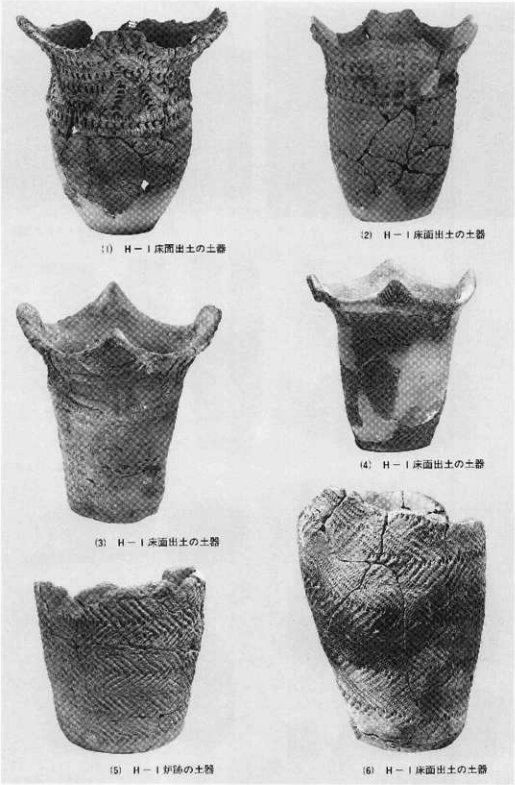


(4) H－I 覆土の剥片石器



(5) H－I 覆土の礫石器

住居跡H－I（遺構・出土遺物）



(1) H－Ⅰ床面出土の土器

(2) H－Ⅰ床面出土の土器

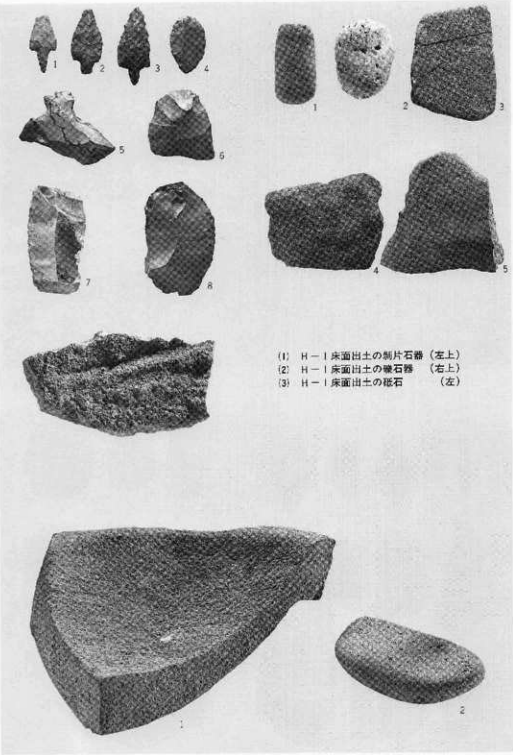
(3) H－Ⅰ床面出土の土器

(4) H－Ⅰ床面出土の土器

(5) H－Ⅰ炉跡の土器

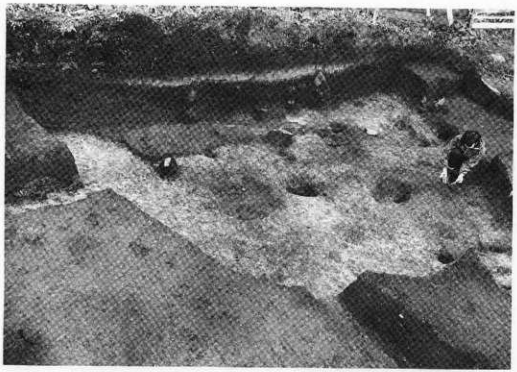
(6) H－Ⅰ床面出土の土器

住居跡H－Ⅰ(出土遺物)



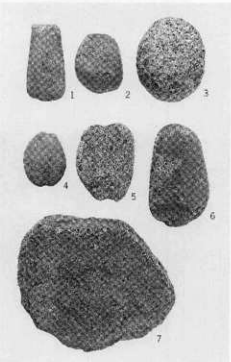
(4) H－Ⅰ床面出土の石皿

住居跡H－Ⅰ(出土遺物)



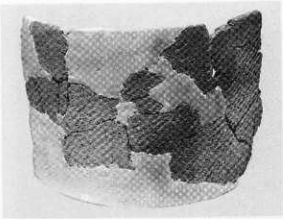
(1)　H－2完掘

(2)　H－2覆土の剥片石器

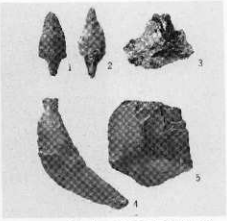


(3)　H－2覆土の礫石器

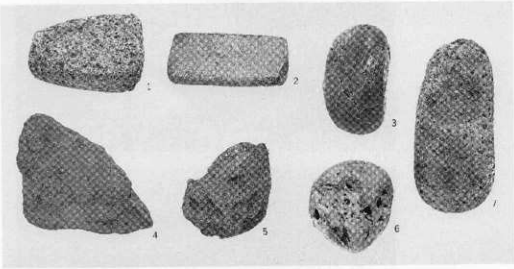
住居跡H－2（遺構・出土遺物）



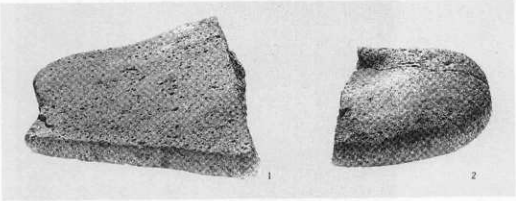
(1) H－2床面出土の土器



(2) H－2床面出土の剥片石器



(3) H－2床面出土の棒石器

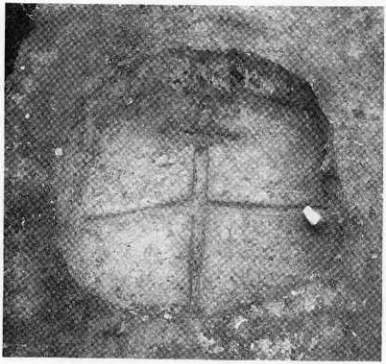


(4) H－2床面出土の石皿

住居跡H－2（出土遺物）

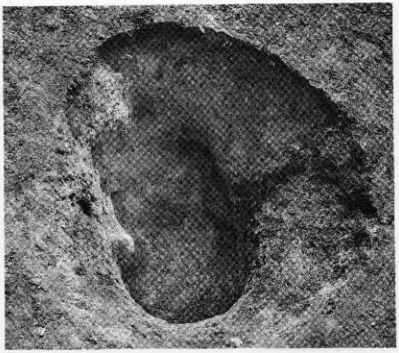
(1) P－1

(2) P－3

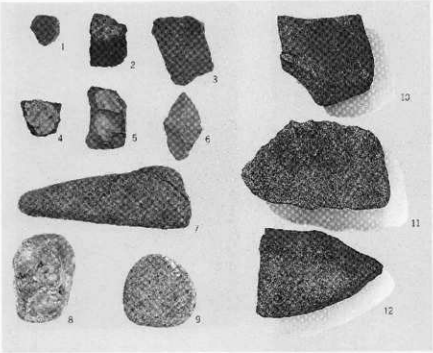


土　壙(遺構)

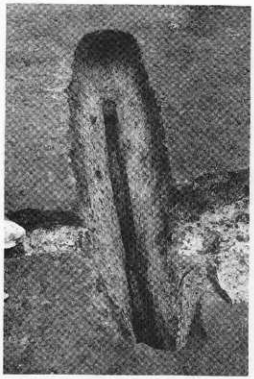
(1) P－4



(2) 土壙の遺物

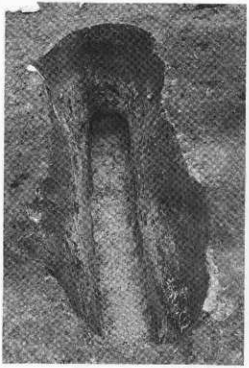


土　壙(遺構・出土遺物)



(1) ＴＰ－１

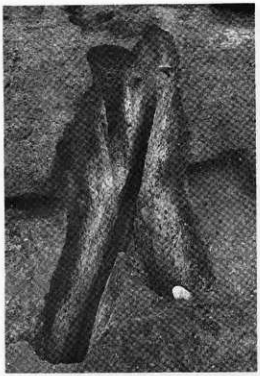
(2) ＴＰ－２



(3) ＴＰ－５

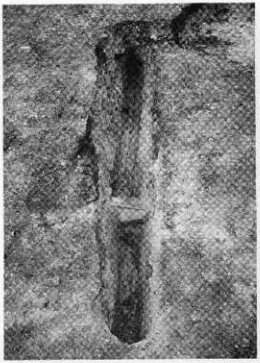
(4) ＴＰ－５出土の炭化した笹

Ｔピット(遺構・出土遺物)

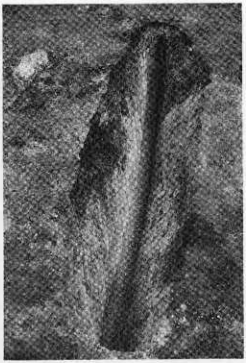


(1) ＴＰ－６・７

(2) ＴＰ－９

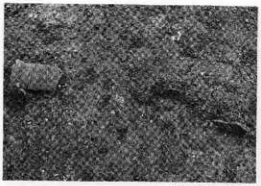


(3) ＴＰ－10

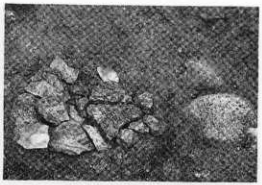


(4) ＴＰ－11

Ｔピット（遺構）



(1) 早朝の土器



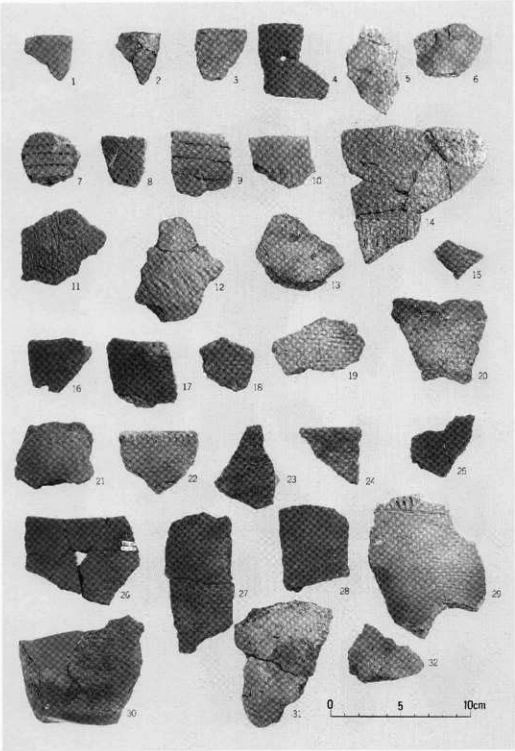
(2) 中期の土器

(3) 中期の土器

(4) 石斧

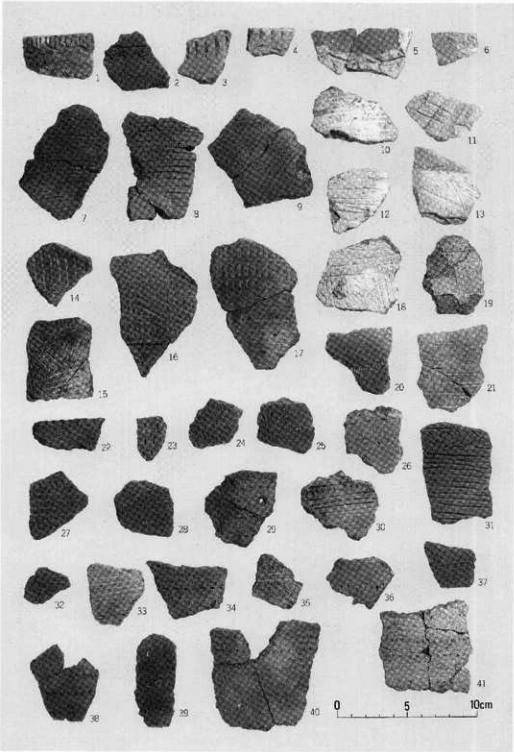
(5) フレーク

包含層の遺物出土状況



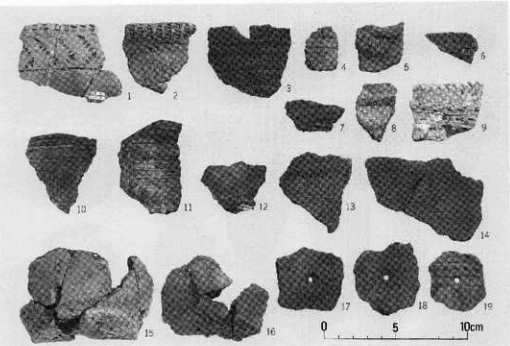
(1) 土器(Ⅰ群)

包含層出土の土器

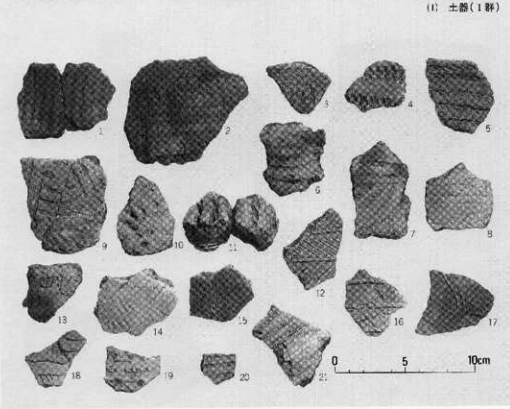


(1) 土器(Ⅰ群)

包含層出土の土器

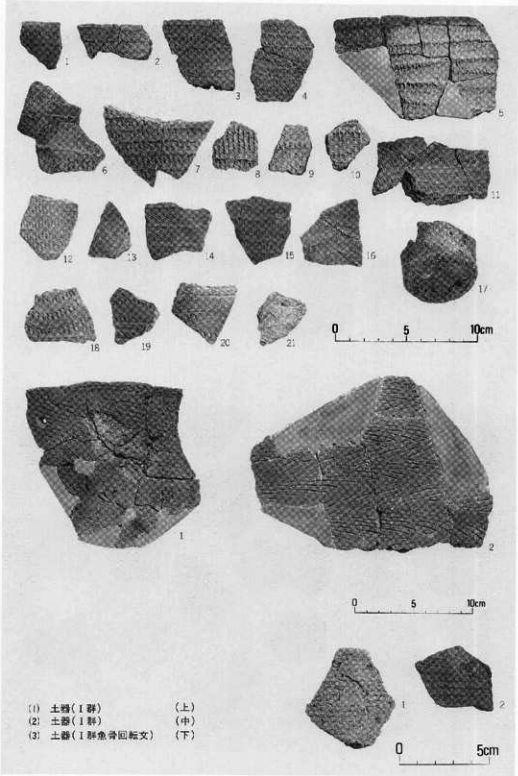


(1) 土器(1群)



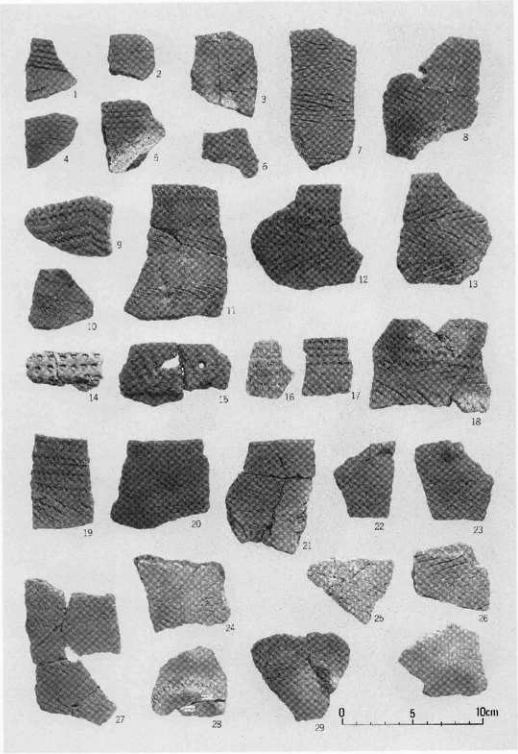
(2) 土器(1群)

包含層出土の土器



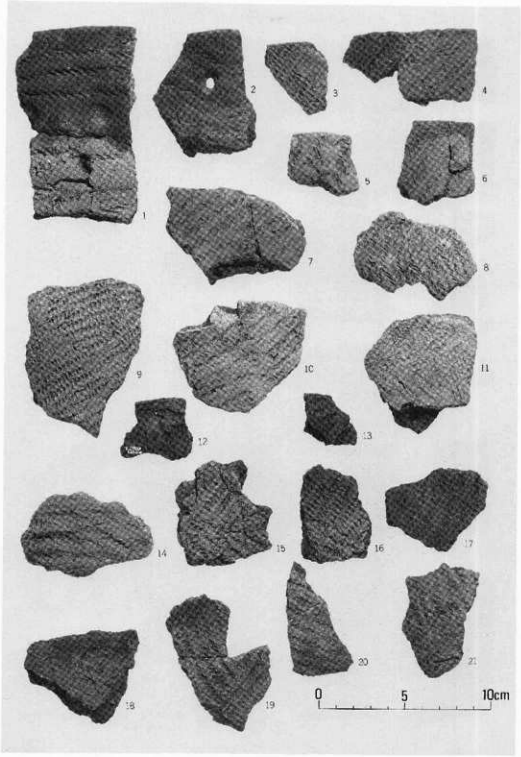
(1) 土器(Ⅰ群) (上)
(2) 土器(Ⅰ群) (中)
(3) 土器(Ⅰ群魚骨回転文) (下)

包含層出土の土器



(1) 土器(Ⅰ群)

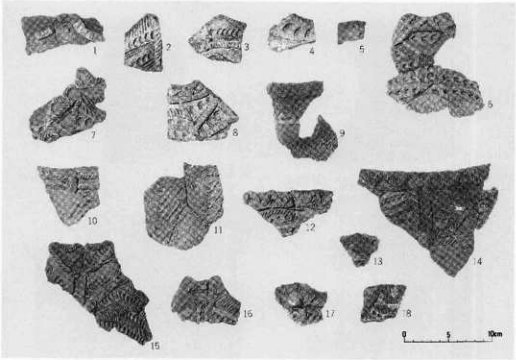
包含層出土の土器



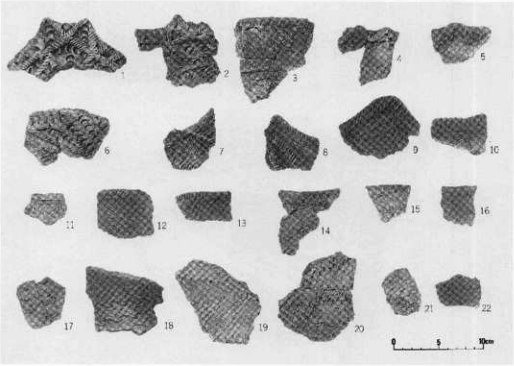
包含層出土の土器

(1) 土器(II群)

包含層出土の土器

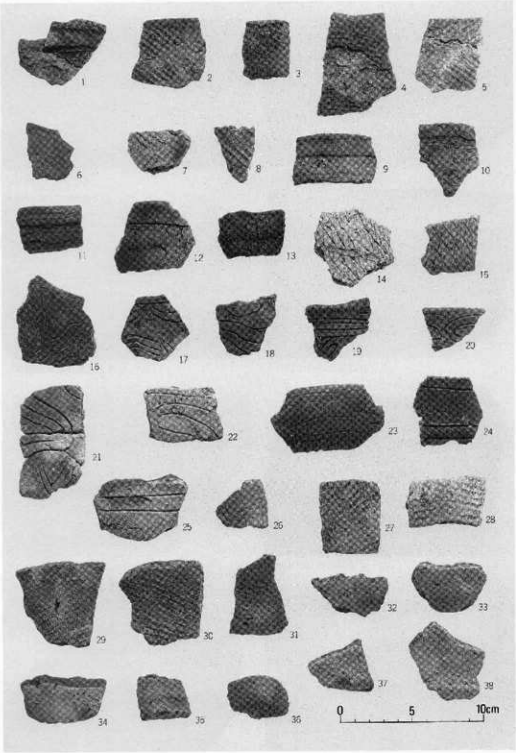


(1) 土器(III群)



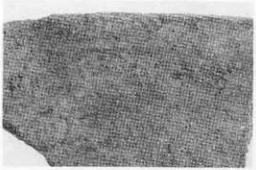
(2) 土器(III群)

包含層出土の土器

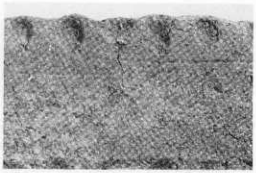


包含層出土の土器

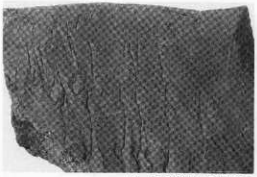
(1) 土器(Ⅳ群)



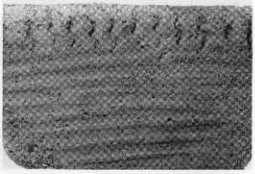
(1) 無文



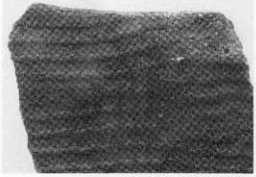
(2) 圧痕文



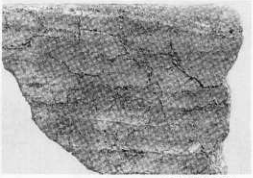
(3) 貝殻腹縁連続波状文



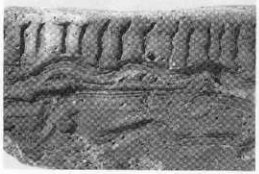
(4) 貝殻条痕文＋貝殻腹縁文



(5) 貝殻腹縁押し引き文



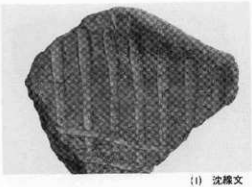
(6) 貝殻条痕文



(7) 沈線文(波状)

(8) 沈線文(波状)

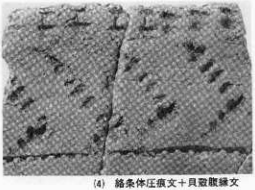
出土土器(早期)の文様各種



(1) 沈線文

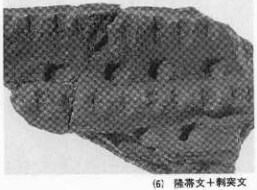
(2) 沈線文

(3) 貝殻腹縁押し引き文＋絡条体圧痕文



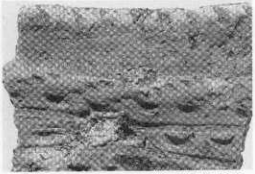
(4) 絡条体圧痕文＋貝殻腹縁文

(5) 爪形文



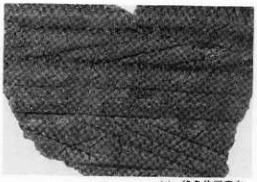
(6) 隆帯文＋刺突文

(7) 隆帯文＋絡条体圧痕文



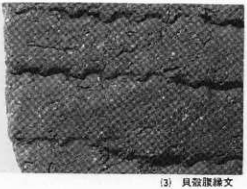
(8) 隆帯文＋絡条体圧痕文

出土土器(早期)の文様各種



(1) 結条体圧痕文

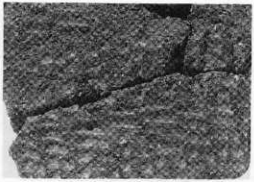
(2) 隆帯文＋沈線文



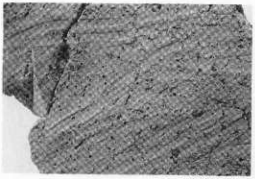
(3) 貝殻腹縁文

(4) 貝殻腹縁文

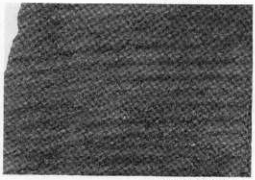
(5) 貝殻腹縁連続波状文



(6) 貝殻腹縁押し引き文



(7) 貝殻条痕文

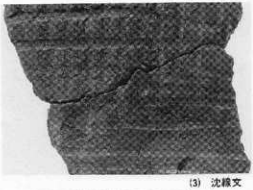


(8) 貝殻条痕文

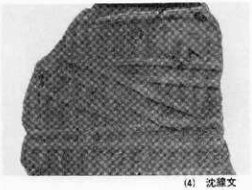
出土土器(早期)の文様各種

(1) 沈線文

(2) 沈線文

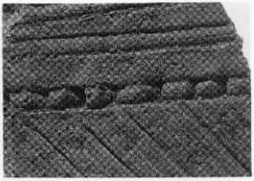


(3) 沈線文



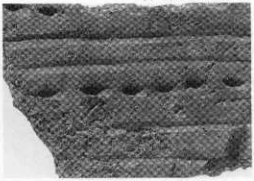
(4) 沈線文

(5) 沈線文＋刺突文



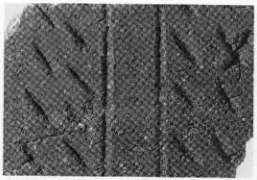
(6) 沈線文＋刺突文

(7) 沈線文＋刺突文

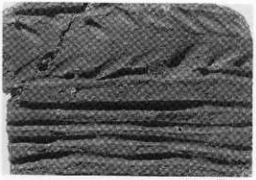


(8) 沈線文＋刺突文

出土土器(早期)の文様各種



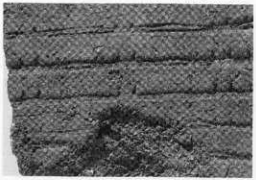
(1) 爪形文＋沈線文



(2) 沈線文

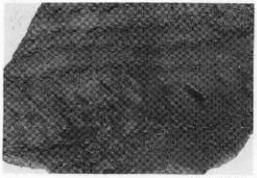
(3) 隆帯文＋沈線文

(4) 隆帯文＋沈線文



(5) 魚骨回転文

(6) 魚骨回転文

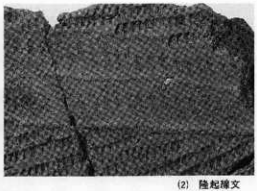


(7) 短縄文

(8) 組紐圧痕文

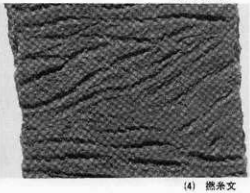
出土土器(早期)の文様各種

(1) 貼付帯文

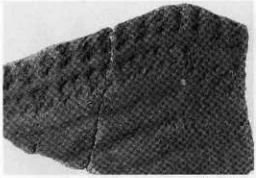


(2) 隆起線文

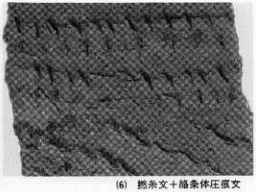
(3) 隆起線文＋絡条体圧痕文



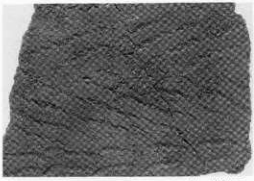
(4) 撚糸文



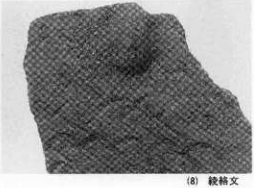
(5) 撚糸文



(6) 撚糸文＋絡条体圧痕文

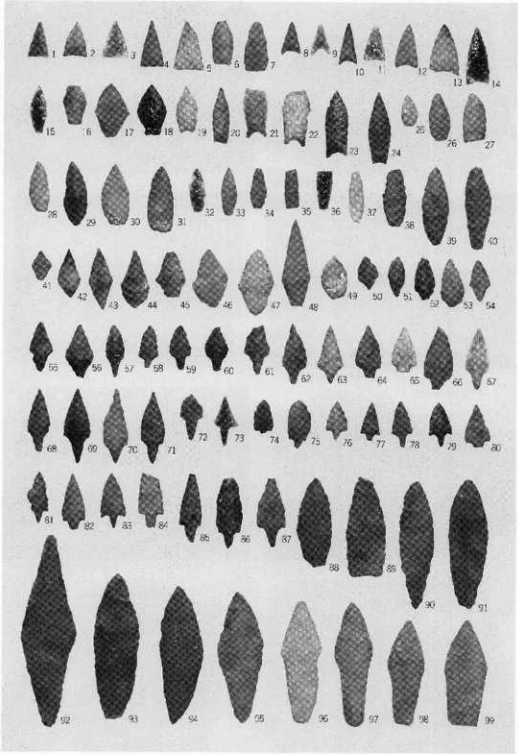


(7) 撚糸文



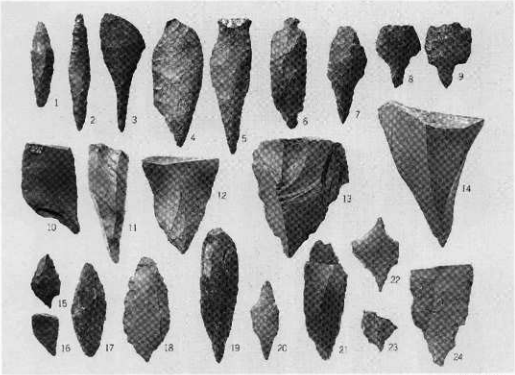
(8) 綾絡文

出土土器(早期)の文様各種

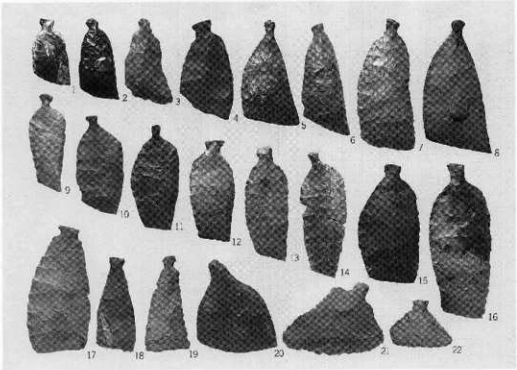


(1) 石鏃，槍先類

包含層出土の石器

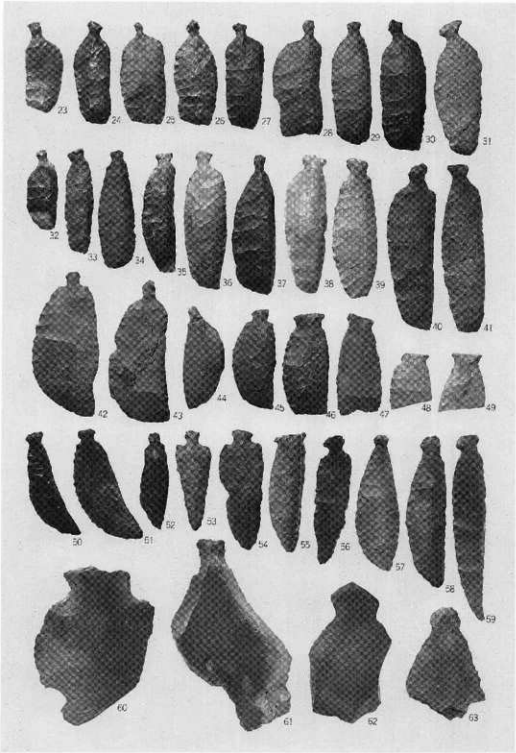


(1) 石鏃



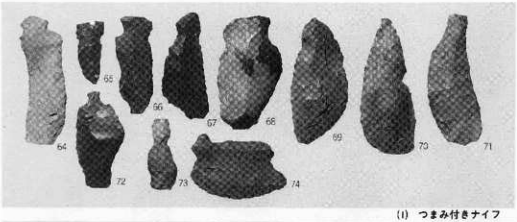
(2) つまみ付ナイフ

包含層出土の石器

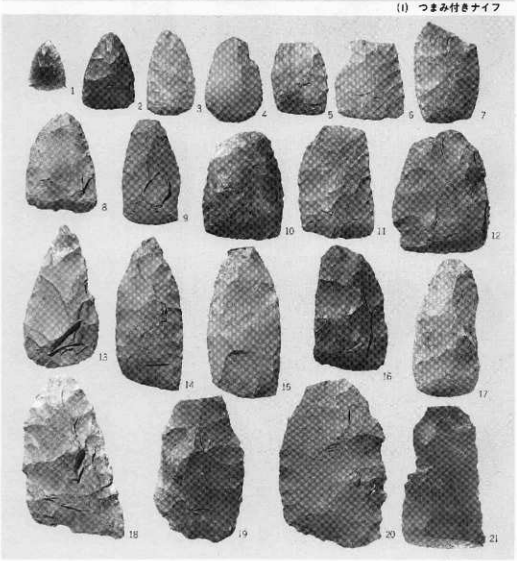


(1) つまみ付ナイフ

包含層出土の石器



(1) つまみ付きナイフ

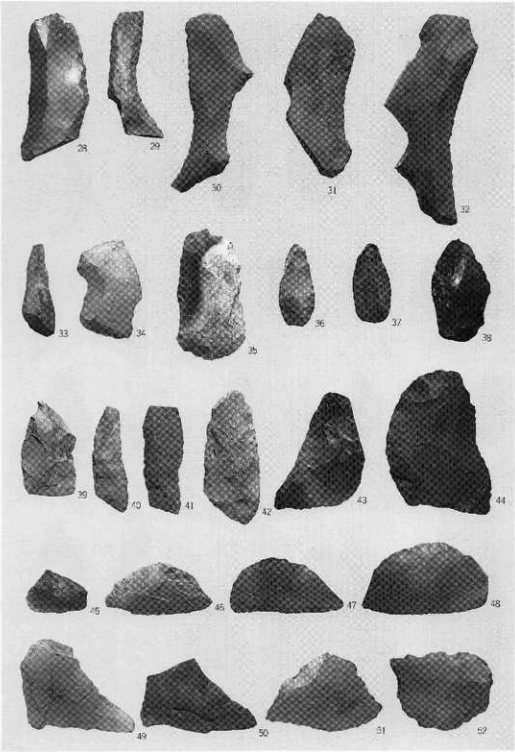


(2) 筒状石器

包含層出土の石器

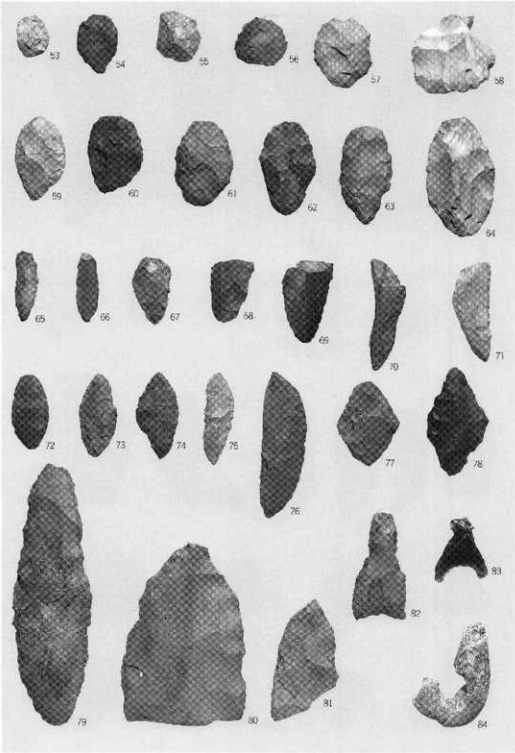
(1) スクレイパー

包含層出土の石器



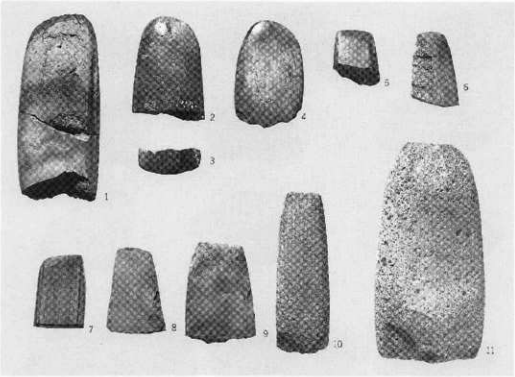
包含層出土の石器

(1) スクレイパー

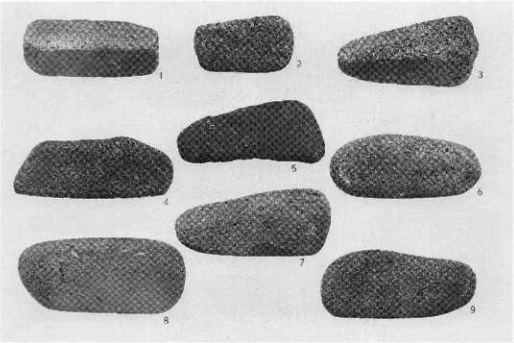


(1) スクレイパーと異形石器

包含層出土の石器

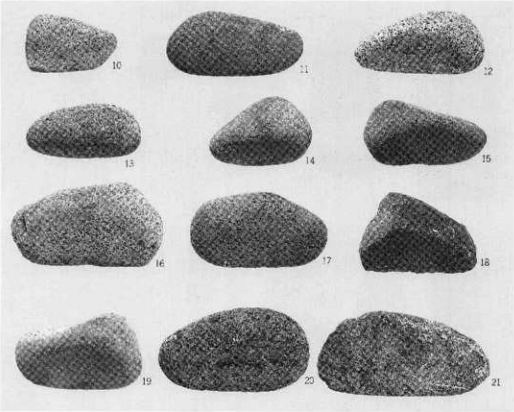


(1) 石斧

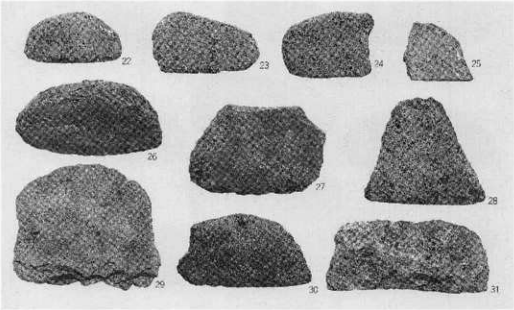


(2) すり石

包含層出土の石器



(1) すり石

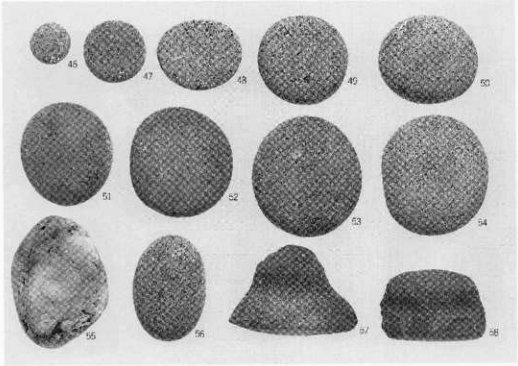


(2) すり石

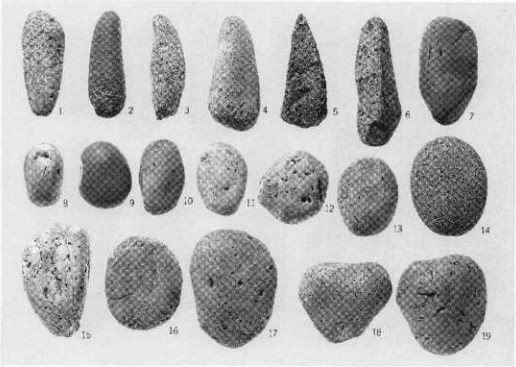
包含層出土の石器

32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45

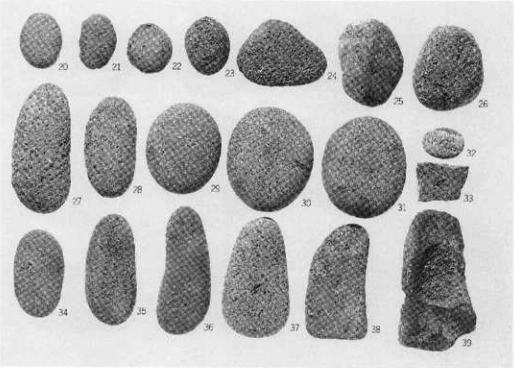
(1) すり石


46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58

(2) すり石

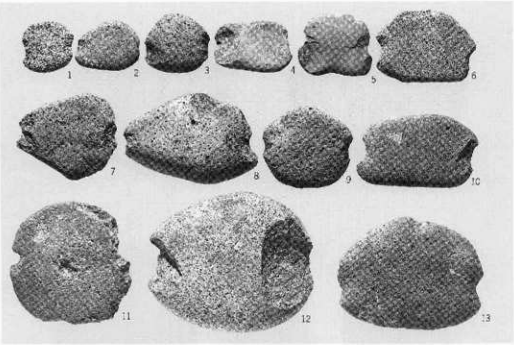


(1) たたき石

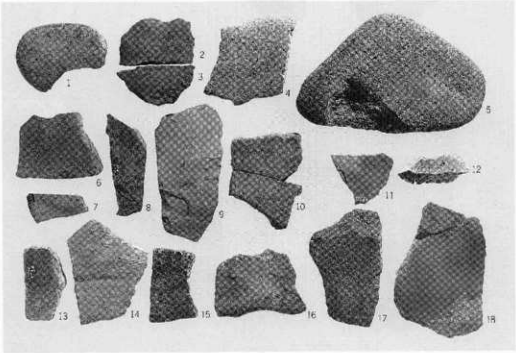


(2) たたき石

包含層出土の石器

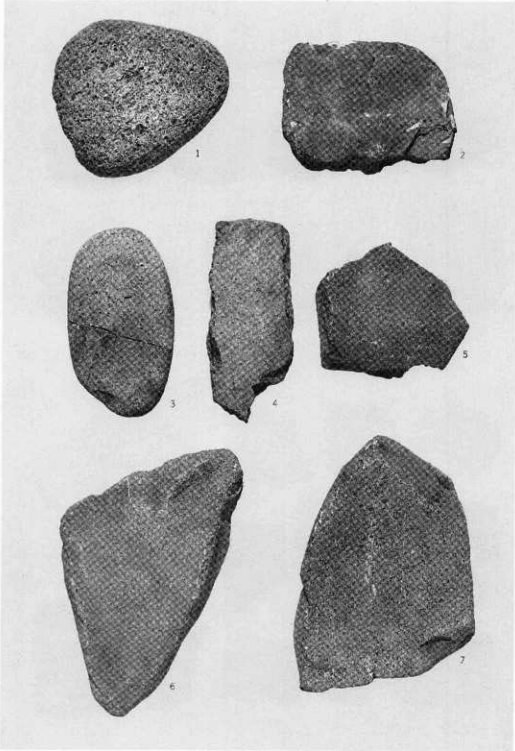


(1) 石錐



(2) 礫石

包含層出土の石器



(1) 石皿，台石

包含層出土の石器

財団法人　北海道埋蔵文化財センター調査報告書第22集

尻岸内町　中浜E遺跡

－尻岸内町中浜E遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書－

昭和60年３月30日　発行

編集
発行　財団法人　北海道埋蔵文化財センター

064 札幌市中央区南26条西11丁目

印　刷　協業組合　高速印刷センター

札幌市西区曙２条５丁目２－48

☎代表(011)683－2231

（この報告書は、函館開発建設部のご了解を得て増刷したものです。）